

(四月三日附益田勇櫻田徳四郎聞取書の一節、本
文の前後の條は前條(三月廿九日の條)にあり)

一右同日(廿八)御衆議ニ而幕府々御再考之御奏聞之儀ニ付猶從 朝廷被仰出之趣左之通

過日再考建言文中且一旦取結候條約變更之儀難相叶各國々申立候儀有之候節之過日建白之趣意を以申達置候云々と有
之候儀如何ニ候何分 御沙汰有之候迄之間開港差許候儀有之間敷其段心得可有之旨攝政殿被命候事

尤御請書差出可有之事

右之同廿九日被仰出候處昨二日板倉小笠原稻葉三閣老御名ニ而御請書被差出候趣左之通ニ御座候(請書は四月朔日の條に
あるを以て茲に略之)

右之尹宮様にも御請書として差出ニ相成候得共此節之儀之宮様一切御關係無御座候まらし前條御請書之儀之甚々御不
平ニ御座候由承申候

三月廿九日米國公使將軍に謁す是日將軍英兵の訓練を覽る

(慶應三年正月よ季
〔京都返達御用狀扣〕

(四月朔日附青地源右衛門報告書の
一節前文は三月廿八日の條にあり)

一昨廿九日亞米利加國着坂夕八半時登城內謁有之候由

一同日朝五半時英國人登城練兵御上覽御座候由

三月某日紀伊茂承更に兵庫開港に關する幕府の諮問に答ふ

〔風説記〕

左之通紀伊家々差出

兵庫表開港之儀御尋ニ付過日愚存之趣申立候處猶又去ル五日御奏聞有之御書付寫拜見仕候右御趣意ニ而之實ニ無御余

儀事情奉恐察御尤之御儀々奉存候依之御受申上候

三月

三月某日我藩偵吏薩長國內の事情及び二藩相互の關係を探り報する者あり

(慶應三年
〔時體探索書〕

慶應三ノ三月

肥前藩長森傳次郎々聞取之次第

一同人先月六日か永井侯ニ附屬長崎表に罷越當所ニ而承候ニ薩州々内々育置候浮浪坂下良馬列數十人有之薩々蒸氣船一
艘貸渡置夫ニ而諸方之產物買取交易いたし居候處先達而難船いたし當時之細キ帆船を求下ノ關三田尻萩杯に參り交易
し山口にも追々參候由ニ而彼情實も承知いたし居候由右事情を申候ハ御休戰後國中之戰卒必死之地を脱し銳氣鈍レ一
休之人氣相沮ミ候故異論茂沸騰仕依之激徒之甚憂ひ御三征ニも相成候ハ、猶又一致いたすべく候得共休兵ハ迷惑至極
ト歎息いたし居候由尤官府之見込ハ程能ク戰爭も相止メ社稷を存し國を全するを急務とし恭順之論を押し立候故激徒益
懼り大議論差起候付桂小五郎高杉晋作杯心配いたし漸ク激説を取領メ先官府設ニ之相成居候得共内輪之極々不熟之由
御座

一坂下見込ニ之大膽御父子之至愚ミして臣下ニ被塞蔽世臣大家ハ激徒之爲ニ排落され權柄盡ク激徒ニ歸し勝手次第ニ國
政を取扱候故内輪之紛亂不違して差起遂ニ自滅ニ至らされハ治り中間敷と噂いたし候由

一薩州々長州之儀之外向極々睦敷模様ニ相見候へ共實ハ左様ニ無之先達而桂小五郎薩州へ參り候節薩々之應接振宜敷無
之動それハ愚弄かまへニムムし候故小五郎甚懼り候得共其座ハ其儘押さらへ歸ニ長崎ニ而申候ニ之此度薩ニ而重疊愚
弄いたされ口惜候得共一旦之忿怒ニ而國事を誤候而之都合惡キ故其座ニ而ハ忍居候と噂致し候由夫ト申も畢竟近來薩

長内輪五ニ相惡ミ居候模様ニ御座候薩ハ長之暴激ハ救助ニ道なしと嘲り長ハ薩之狡黠頼不足と惡口いたし居候得共五ニ交を斷ち兼候儀之長ハ薩三年國內之產物吐場なく薩ニ依り其品を賣捌今日之入費取賄候故怨かくして交を不斷薩ハ長之暴を惡ミ居候得とも彼產物を以利潤を得候故程能相接居候由御座候

一薩州之國議も近來少打替候由右之四五年前交易相始候島津左衛門ト申一門家老小松帶刀ト交易之是非を論し帶刀ハ交易を是とし左衛門之非として兩途ニ相分其節之國中帶刀之説を是として専ら交易ニ取懸蒸氣船も數艘買入手廣交易いたし候處其後交易之功驗少も相見不申却而年々疲弊を重候故不得止措克ニ至り民心是か爲ニ上を惡ミ既ニ擾亂ニも至り候勢ニ相成候故左衛門此機ニ乘し前議を唱候次第ハ當藩ニおゐてハ最初會王攘夷を以 天幕に忠勤を盡候覺悟ニ有之候處交易相始り候以來國論之主意を忘却いたし剩へ交易之爲ニ國虛耗ニ及人心之動搖引起候段國家之大害過之たる事有之間敷依之先ツ交易を止メ以前之國論ニ舊復いたすべき儀今日之急務ト建白いたし候付高崎伊太郎杯も左衛門の説を輔け今日之非を責候故國中左衛門の説ト與るもの甚多ク相成昨年來英人ト約置候製鐵場取起器械製造傳習之爲英人呼取候期限も參居候得共英人參り候ハ、左衛門方若手之面々異人を暗殺いたすと覺悟仕居候故夫ニ恐れ異人呼取候事も相止居候由ニ御座候

一長森藩崎中薩之國論打替五代才助を國元へ呼返罪科可申付模様ニ而同人歸期相分候處異人共三日之晚貸金取戻シニ詰懸居候由

一長森藩崎中薩之公子英之進様ト申御方此度爲御弔儀御上京ニ相成海路長崎に御立寄相成候節御供廻之者共此節上京之不容易事件有之候間再ひ歸國之覺悟ニ而之無之杯種々之流言いたさせ候由

一薩州ハ異人ハ借金ハ四拾萬金計之由其内拾萬金之ガラハ借り居候處近來ガラハ交易之都合惡敷莫太之損失を生候間右之金子を取戻候筈ニ而差廻り致催促候由

一土州藩岩崎二三噂ニ之薩ハ英之官錢を余計ニ借受其後申分差起惣彼方ニ而官錢ト申候而ハ返辨之期限ニ甚嚴重之模

様ニ而夫等ニ申分差起候而ハ此後薩英之爭必差起可申と世上ニ而氣遣申候由御座候

三月

三月某日日本藩偵吏長幕と英佛兩國との關係を報する者あり

〔探索書扣〕

風説書 大坂之評歎

佛が言此度英吉利長人と合躰致ニ付而ハ英より佛を誘引供ニ幕府を可討相談之處佛ハ不承知之趣ニ而彼申候ハ英之長人ニ恩を受居候故左も可有之候得共佛之長ニ何之義理も無之素より佛と日本と交結之儀之元來墨國之周旋より當今如此日本と和親ニ及候處今幕府を敵といたし候事非本意全英國ハ長と一味候ハ、我佛國手之勢を以六ヶ月を限長防兩國連ニ平定征伐可致由佛が幕府ニ申入候處幕府御深慮被爲在候處返答ふし猶又不違内重而御下坂可被成由英國者長と合躰明白之事件強而此儀長より依頼ニ而も無之只英國ハ長人ニ之始末申入候處長ハ遮英に斷をも不申其儘ニ打捨候由幕も又佛へまると御返答も不相成候而御歸都ニ相成候由右密話之趣區々之風聞

三月

三月某日長崎浦上の天主教徒公然其信仰を許されんことを請願す幕府許さず尋て其徒六十八人を捕へて之を監禁す

〔時體探索書〕

癸卯三年 卯三月長崎郷浦上村邪宗之者共願書

私共儀先祖を申傳之儀有之天主教之外何宗ニ而も決而後世之助ニ不相成候得共 御大法之儀ニ付是迄ハ無餘儀且那寺聖徳寺引續請來候得共是之役目迄ニ而誠ニ上ハ之空ニ而引續請來候處方今外國人居留地に禮拜堂建立ニ相成佛蘭西寺

教化之様子承候處先祖傳來之儀と符合仕候ニ付別而信仰仕尤未當分之事ニ付極意之儀と相辨不申候得共人間ニ之アリ
マと申魂有之死後ハ極樂にも可申難有所に生レ替り候もの之由和尚申諭候ニ付頻ニ信仰仕候日那寺淨土宗ニ不係何宗
ニ而もアリマ之助ケ候教ニ無御座候間 御大法相背候段之如何にも恐入候得共宗門一條ニ付而之如何様嚴科ニ被處候
とも甘心可仕候間向後天主教を樹テ且那寺引導ニ不及自分共所置ハハ候様被仰付度奉存候以上

右之通譯臺に願出候處難叶段申渡ニ相成直ニ江戸伺ニ相成當六月宗徒六十八人召捕ニ相成今以入牢之儘御處置無御
座候事

浦上事情聞取書

此節浦上村三八母たか埋葬ハハ候儀ハ且那寺引導を不受迄ニ而外ニ相替候儀無之尤天主教ニおゐても極意ニ至候
得者右様之事も有之由ニ候得共此もの共ニおゐてハ夫々傳習不仕一弊宗門ニ成候而之生前之内其身ノノ之行を改善
行之功德を以善所ニ生替り候趣ニ付葬式之節ニ臨ミ別段執法等無之猶香花之手向候共アリマ之助ケ候儀無之候得之
此節之先用申候又年季吊もハハ候得共是ハ其もの分限次第ニ取賄イ強而僧を請經文共誦酒食等供養之儀を專ト不
致由ニ候事

右浦上邪宗徒召捕之事ニ付此間佛之ミニストル幕府に參申出候ニハ以來佛之教師之浦上ニ入込申間敷候依之右宗徒
之者共ハ御赦免ニ相成候様申出候ニ付幕府承諾ニ相成被捕置候六十八人近々ニ出牢ハハ候由風説御座候事

卯七月廿四日長崎仕出

四月朔日幕府先月廿九日條約變更に關する朝旨に奉答す

〔從京都來候探索書等〕

四月朔日幕府より

過日再考建言中且一旦取結條約變更之儀と所詮難相叶事勢ニ御座候間各國より申立候儀有之節之過日建言之趣を以
夫々申運置候事ニ御座候云々之文言如何ニ候何分御沙汰有之候迄必々開濶差許之儀有之間敷其段心得可有之候趣承知
仕候右ハ追々申上候通條約變更之見据無之候間各國より趣意相尋申候節ハ其段相答候迄ハ御差許無之内布告等仕候儀
ニ之會而無御座候此段御請申上候
別紙

御書取之趣大樹公に入覽之處別紙之通被申上候間此段及貴答候

四月朔日

小笠原 壹岐 守
稻葉 美濃 守
板倉 伊賀 守

飛鳥井 中納言 殿
野宮 中納言 殿

四月朔日將軍慶喜米國公使を大坂城に延見す

〔京都返達御用狀扣〕

（前文は三月廿九日の條にあり）

一今朝日八半時亞國登城御目見被仰付候由尤御禮席ニ拘り候面々等其外諸事去ル廿八日英國人始三ヶ國登城御目見被仰
付候節之通之由

一佛國人今朝五半時登城有之候由

右之趣御頼御小人目付方御城使兼勤承り込候段申出候以上

慶應三年

三五一

四月朔日

青地源右衛門

四月二日所司代松平定敬加藤能登守に令して少將植松雅言外五名赦免につき其守衛を撤せしむ
〔風説記〕

於京都表去ル二日御所司代松平越中守様に家來之者被召呼別紙之通被仰渡候段申越候此段御届申上候已上

四月十五日

加藤能登守家來

上田滿

別紙

加藤能登守に

岩倉侍從
岩倉大夫

植松少將
園池少將

右者兼而御答被仰付候處此度御免相成候ニ付右家之守衛之儀以來不及其儀候此段相違候

高辻少納言
千種侍從

四月

四月二日鳥津久光上京の途大坂に着す尋て大久保一藏等土佐藩士に對し山内容堂の入京を促す

〔探索書扣〕

聞取

一鳥津大隅守様當月二日着坂ニ相成候處薩藩大久保市藏土州小笠原只八に重役代職容堂侯御出京之頃合書翰を以問合せ候處同人方答候ニ之容堂差急上京之覺悟ハ致居候得共未タ出立之日限之申來旨及返答候處猶大久保方申越候ニ

之大隅守御一同御出京之御堅約御座候付最早敏ク御登り被成候ト相心得罷出候處未御出京之御日取茂御申越無之ハ如何之御模様ニ御座候哉之段再問ハシ候付土州京都留守居某大坂に罷下り大久保に面會ハシ主人出京ニ付而之新ニ蒸氣船買込萬端調ヒ兼彼是ニ而及延引申候併近日中ニハ出京可仕ト日夜相待居申候ト返答仕候處彼方切迫ニ申候ニ之容堂侯必御登被成居候ト相心得出京仕候處右之御模様承候而之大隅守ニ之實ニ當惑至極ニ而連茂一人ニ而之固方盡力之見通茂付不申殊ニ嫌疑茂有之旁以容堂侯御登迄大坂に御待受可申上トの事ニ付薩ハ土州出シ抜カ土州留守居某方假令容堂方御堅約ハシ候共 天幕之命ニ而御出京被成候ハ、容堂之儀ニ而御滞坂ハ甚々迷惑之次第ニ御座候様一刻茂御上京可然候段申向候處然之弊藩蒸氣船當時不用ニ御座候間至急ニ御乘込御出京御座候哉否之儀御伺取被下度との相談御座候付當月六日より小笠原只八京都出立大坂ニ而薩之模様委細聞繕其上歸國之積ニ而罷下候由ニ御座候扱前文大久保より御堅約云々之儀ハ當春之比數薩州西郷吉之助隅州方容堂に何ッ比御出京御座候哉否之儀御問合之書翰持參ハシ候處容堂侯方ハ三月末歟四月初之比迄ニ御出京被成度との返翰ニ而有之候由其節人拂ニ而西郷方容堂侯に言上仕候ニ之天下切迫之形勢長州兵庫之兩條傍觀仕候譯ニ無御座候間幕府之可輔ハ相輔ケ可保ハ相保チ自然幕力及不中節ハホリ代りて隅州盡力之覺悟御座候尤隅州存意之儀ハ京地御對顔之上委細可申上候間容堂侯にも與々ニ御盡力有御座度段内話ハシ候由容堂侯ニおろて茂追々御召之儀ニ付急ニ上京之覺悟ニ御座候ト御答有之候由西郷人拂ニ而言上致懸いたし天幕之厚恩乍蒙臨ヒ存心と譯決而無之と申事右ニ付土藩ニ之國論之次第觸達ニも相成候由 右之次第御座候處土州大谷小傳次高野直猪之兩人長崎表方薩州に罷越長州兵庫之兩條右兩人之西郷之一如何御盡力御座候哉之段相尋候處薩州方之答ニ之弊藩之盡力周旋哉盡力杯之儀ハ思懸茂無御座候ト一向取合不申由ニ而兩人之其儘引取右之趣ト之雲泥之儀ニ付此度出京御見合ニ相成候茂畢竟右之次第方と中事御座候前文小笠原只八薩州蒸氣船ニ而歸國之都合ニ相成候得之儀大久保市藏列乘込様子ニ御座候處幸土州蒸氣船着坂ハシ其船ニ而同八日方歸國ハシ候由御座候

慶應三年

四月十三日

三五四

牧新吾
益田惣四郎
櫻田惣四郎

四月三日將軍慶喜大坂より京都に還る

〔續徳川實記〕

十日(四)……京都御旅館還御令

一上様去る三日大坂御城御發途陸通同日京都御旅館に還御被遊候

此段向々に可被達候

四月五日大坂城の大手門柱に貼紙して徳川氏を誹る者あり

〔風説記〕

一四月五日大坂御城大手柱に張紙之寫

あつまから肴屋の主人登り来て

濱地も賣立まのし路も賣る

神國殘異國にまたす一橋

清き流を残田安德川

四月九日幕府監察小林甚六郎筑前藩士を招き三條實美等の召致に就きては自ら其事に任すべきを告げ之を關係四藩に通達せしむ

〔慶應三年正月 御國京大坂返達御用狀控〕

四月十三日村上より 同廿一日着

松平肥前守様御廻達寫

以廻狀致啓上候然者御目付小林甚六郎殿御切紙を以御旅館中之口に即刻登人罷出候様御呼出ニ付中役指出候處御徒目付高橋平之丞大原道藏を以此度三條實美始當地に御呼寄ニ付着之上小林殿萬事取扱ニ相成候間其旨相心得候様尤右之段御銘々様へ別段御達無之候付手前方より通達致候様との旨を茂被相達候此段爲御通達早々如此御座候以上

松平美濃守内

守 田 守

四月九日

御次第不同

細川 越中 守 様

御留守居 中 様

松平 肥前 守 様

御留守居 中 様

猶以乍御面働早々御順達被下留之御方御返却可被下候以上

四月十二日幕府は先月末大坂城に於ける各國公使將軍謁見の手續及び上意の趣等を外國關係の諸有司に通達す

〔諸雜御留守居録上〕

鄰近新聞

慶應三年

三五五

卯四月十二日河内守殿佐藤清五郎ヲ以御下ケ外國御用立會役々

外國奉行

神奈川奉行

箱館奉行

覺

各國公使大坂御城ニおゐて御目見被仰付手續并上意振爲心得相達候事

各國公使登城御目見之節手續大意

一各國公使於大坂御目見被仰候付英吉利公使ハ三月十四日阿蘭公使ハ同十六日佛蘭西公使ハ同廿二日亞墨利加公使ハ同廿八日着坂何々も着之節老中爲尋問罷越候

一三月廿五日英公使内拜謁被 仰付附屬士官召連九時過登城櫻御門ニ而下馬御白書院ニおゐて御對話有之老中若年寄其外諸役人出席畢而大廣間御庭ニ而公使召連候英國之騎兵乘馬御好ミ上覽有之相濟ミ御白書院御次之間へ出御御饗應有之老中若年寄始諸役人等伴食被仰付公使へ御道具類士官に縮緬等被下モの有之夜ニ入退出

但殿中平服例刻登城御對話之節ハ老中若年寄御白書院御入頬に迎御對話之節ハ牡丹之間迄相送迎候事

一同月廿六日阿蘭陀公使登城次第同斷騎兵上覽ハ無之

但前同斷

一同月廿七日佛蘭西公使登城次第前同斷騎兵車馬上覽有之且樂人召連登城ニ付御饗應中奏樂有之

但前同斷

一同月廿八日佛蘭西公使登城御目見被仰付英吉利は附屬士官召連五時過登城大廣間ニおゐて御目見被仰付老中披露公使自ら之口上申上上意有之公使附屬士官之姓名一々申上御會釋有之士官五人に上意有之相濟而入御御次之間ニおゐて公

使へ時服十被下候旨老中演達公使御目見并被下物の御禮申上殿上之間へ引老中若年寄縁迄送之夫々退出

但立御老中若年寄役々共立待

一同日蘭公使四時過登城次第前同斷圖書持參ニ付御直ニ差上之士官に者上意無之相濟而入御被下物前同斷但時服七

但前同斷

一同日佛公使八時過登城次第同斷公使之外アトミラールニ計り上意有之相濟而入御被下物同斷時服十

但前同斷

一殿中五時揃御席ニ拘り候面々ハ狩衣大紋布衣素袍着之不拘面々ハ平服且御番所向御屋敷迄勤番之銃隊等者或服着之立固メテ公使通行之節ハ捧銃ハムし候事

一同月廿九日四時前英吉利公使登城大廣間御庭ニて英之主隊運動上覽且御寫眞有之相濟而大廣間御下段御次之間ニて洋酒御菓子被下老中并役々接待ス

一同日八時過亞墨利加公使登城内拜謁被 仰付次第佛英公使等内拜謁被 仰付候節之通

一四月朔日五半時過佛公使登城大廣間御庭ニ而佛蘭西之主隊運動上覽有之相濟而大廣間御下段御次之間ニ而洋酒被下等

前同斷

一同日八時過亞墨利加公使登城御目見被仰付佛英公使等御目見之節之通士官に者上意無之

各國公使に

上意之趣

英吉利公使に

原註
(大貌利大泥亞特派公使全權ミンストル兼コンシユルゼネラル、ハルリーバルクス)

我國の大法を遵奉し祖宗以來の全權を掌握せしニ付て我第一ニ深く意を用ふへき緊要の事ハ先代の條約を結ひし各國

と日本との交際を厚くするにあり是を旨として今度各國公使を大坂に招き且英國ニおゐても兩國懇親の交際を厚くする爲メ盡力をへしとの事を今大貌利太泥亞の公使より直ニ口上を以て申述べしを聞く我ニ有ても幸甚なり總て條約済の各國就中大貌利太泥亞との交誼を深くし親情を厚くする是我日本ニおゐても向來幸福を得んため緊要の一ふらんと思へるより且又此大典を取行ふの好機會を以て我政府より兼て其許へ申入置し如く大貌利太泥亞と取結ひし條約を一々履行ふ事を斷然と決定し且其趣を今茲ニ其許ニ申告する者我ニ有ても極めて幸甚を希ふより尙其許右之趣を委曲其政府へ申通し貴國王家の幸福榮華盛ふらん事を祈る我信正の意を併せて申送らるへし又其許ニ大貌利太泥亞の代吏としてハ勿論其許自身も深く感賞をへきを知らハ我懇親友誼の深情を信せらるへし

此度者上坂大儀ニ存スルより

シワーコントに

前同斷

此間ニ七人の上官名前披露有之

クウント アブリン サトウ ウオンス
ウレトシヨウ アストン ウイルチン

船將三人

第一 ヘスウエンに

其方ニは水海ニ五ヶ年住居致せし由定めて苦心致し候儀と存するより

第二 ヒキウリに

魯國戰爭之節ハ兩度迄大功有之由勇々敷事ニ候

第三 アンロツクに

其方ニハ先年内瀬戸測量ニ由り此度も大坂兵庫の灣測量大儀ニ存するより

佛蘭西公使に

(原註) 佛國全權公使レオン、ローゼ)

貴國帝より既ニ好意の深きを我國ニ示さる今又其許をして全權ミニストルニ任し來りて懇親を益固くするハ兩國の心情を感せしむるに由る此意を告るるの書を落手し満足に至り是に過ぎざる事は改めて申述べし猶餘り有り我爲メ大慶より既往の不都合を掩ふへしと其許言をる事とも我ニおゐてハ偏ニ我不材を患るのミにて既往の事を掩ふに足らず唯其許と我と照應して尙開化進歩の民を量見ん我祖宗以來の全權を掌握し五ニ力を盡して國民を開化せしめ併せて外國交際を厚くせば確然と我ニ望達せん唯同與信義の國ニ其意を代吏の厚き周旋ニ依頼するの艱難あるを願ふ

佛國アトミラルに

遠路航海被致大儀ニ存スルいつ比任濟て歸國被致候哉海路折角自愛被致候様存スル

亞米利加公使に

(原註) 合衆國レシデント、ミンストル、エル、フワン、ワルケンブナルフ)

貴國とハ我國開港の始條約書爲取替就中結盟の懇切深く殊ニ近來兩國の間郵船の路新ニ開け千里信一瞬ニ相通するに至る是又交誼愈厚るべき一の效徴にて欣喜不堪なり尙貴國の紛擾近頃一洗して南北一併ニ歸せし極畢竟大統領の武威盛しして衆兇を鎮壓するの力餘有るによきハ幸ニ大統領其許をして我地ニ有る代吏ニらし近時の情態を體認して百事處置せらるるより其裨益少らざる貴國政府の威力と其役の懇情を籍り彌以て我國の幸福を得ハ萬世無限の友誼を保全せん事深く望む所なり我切實の意衷を其政府へ通知し併せて貴國安寧を祈る

和蘭公使に

(原註) 和蘭國コンシユルゼネラル兼ボリチーケアケント、ド、デ、ガガラーフ、ハン、ホルス、ブルツク)

和蘭ハ歐羅巴各國の内にて第一日本と交誼を結ひし國にて兩國の交際今日に至る迄常ニ懇情の厚失えず我國にて歐羅巴の諸學術を知り得るは是れ全和蘭ニあり我る見る所にて舊好忘を難く尙今日まで日を追て盛ふる交情を厚くも貴國主其許をして我傍ニ在らしめ彼の代吏をらしめし事ハ無限喜歡とす其許我國ニ到着せし日より其許の好意を知りぬをハ其許も亦我懇親の意深きを信用せらるべし我先代和蘭と取結ひし條約を一々履行ふ事を斷然と決定せし我誠實の意を貴國の淑徳ある王の許へ通知し併せて貴國の平寧幸福を祈る事を申告らむ事を請ふ

一 今般ハ格別之御禮典にて各國公使坂地ニ被召呼候儀ニ付着坂即日爲尋問公使旅宿に伊賀守罷越候間右之振合准し横濱歸着之上出府いたし候ハ、尋問として公使旅宿に御越可被成候尤歸着之上出府之遅速も難計候間横濱歸着之儀御承知被成候ハ、不取敢無滞歸着之悦御狀可被遣候

一 各國公使以後出府いたし御用談被成候節ハ此方方も旅宿に御出之事も有之五ニ往返々々し候様可被成候事

一 公使歸着之上出府候ハ、英佛亞蘭共々禮濟歸着を御祝之趣意を以御役邸にて相應之御禮應可被成事

右ニ而御大禮首尾全く相成候事

但此節ハ閑話雜談にて御用談無之趣其以後迎も公使出府いたし候節ハ御用談ニ無之懇情ニ而折節者御邸に御招一廉之御禮應可被成候又彼之旅寓にも御越し禮應御請可被成事

一 御用談ニ而公使御役邸に罷越候節以來茶菓子而已ニ而御用談濟之後も酒肴等差出無之事

一 江戸并横濱ニおゐて外國奉行御用の有無ニ不拘折々私之尋問として公使旅寓へ罷越談話可致候事

一 公使附屬之士官懇情として外國奉行宅に罷越候義不苦候事

但外役ニ而も引合候筋有之ものハ同斷之事

一 公使御役邸に罷越候節ハ次之間外迄送迎之事

一 公使に遣し候書翰文休不敬無之處外國奉行に御申聞置華押も小之方可用事

但御用向之外懇親までにて書翰遣候節ハ文面一段丁寧ニ可致事
一 都而之取扱向前件之振合ニ准し聊も輕慢之仕向者御改正可有之事

横濱方之書翰抄出

英佛亞蘭四國公使上坂 御目見之節

上意之趣并手續書とも御用狀ニ而到來ニ付寫取さし上申候取急相認候間落字等可有之御察覽可被下候外國付并支配向通辯方等々様子承候處萬端都合よく相濟候由御禮應休ふと十分行届各公使いつとも雀躍罷在候趣殊ニ拜調之節も實ニ御懇親ニ不絶御談話有之英公使ハ午時第二時夜ニ入第八時ニ退出蘭は三時九時迄いつとも同日ニ者無之且蘭公使歸港之前御逢之節子供あり哉と御尋有之一人有之候旨御答申上候處種々手遊御前へ御取寄被成何歳ニ相成候哉と猶又御尋ニ付幾歳ニ成候と御答申上然ら之如此品ふとよるへしと被仰御自身ニ御撰年齢ニ相當喜ふへき品々澤山頂戴被仰付子供之土産ニ可致旨被仰聞候由萬事如此御行届之事故公使達いつとも涙をふるし難有らり候由就中英公使ハ御老中方モテアマシの人物之處此度者信以伏し世界第一之君と奉仰候趣云々下略

四月十五日松平阿波守兵庫開港の諮問に奉答す

〔説風記〕

兵庫開港之儀ニ付見込之趣御下問相蒙り奉謹畏候ニ淺慮短才白上可仕臆見之儀も無之尤港之儀ニ 先帝深く爲惱
叡慮既ニ三港 勅許之砌 叡旨も奉伺罷在候得共宇内之變更彼是熟考仕候ニ而ハ大樹建白之件々全時勢ニ應し候術策
此外ニ出申間敷奉存候何分ニも 皇國不朽之御基本被爲立候様冀願候余者申上候儀無之依之愚意、、、

四月十五日

松平阿波守

四月十五日日本藩使者古閑富次三條實美に面謁して五百金を贖す

〔元治元年以後
五卿一伴〕

一御客屋方御奉行中々左之通

轉法輪三條様に御贖金被進之儀ニ付而者最前委細御申越之通ニ付及其達置候處夫々進上相濟候段別紙兩通相達候間則差遣申候以上

五月六日

右一通

轉法輪三條様に御贖金五百兩御客屋方より演舌ニ相成候趣を以御口上書之古閑富次列に夫々及仕向申候處同人御使者動相濟別紙差遣申候間其儘差出申候尤右者御一覽相濟候上政府に茂御幸廻被下其筋々に通達ニ相成候様御通議仕吳候様との儀共申出候間左様御承知被下其御取扱被成下候様奉存候以上

四月廿四日

池部武助
石橋常次郎

御積方

根取兼中

右一通

覺

三條殿に御使者相勤申候處直ニ御逢ニ付御口上之紙申述御進物差出候處御懇情之御口上之上御贖としてし御目錄之通被贈下深忝御受用ニ相成候間宜御禮申上吳候様被仰聞候事

四月十五日

古閑富次

〔全書〕

三月十二日

一三條様に御内々被進物之御口上振於機密間調出來御家老衆初巡覽も相濟候由ニ而佐貳役致持參候付致一覽候處可然相見候付奉伺候處伺之通被仰出候付清書出來御用人に差出候處直ニ御奉行に差廻候様被申聞

今般京地に御引取之段珍重被存候當所永々之御滞在嚙々御不自由被爲在たるに被致深察候是迄之處對 天幕被相彈候譯も有之態に御普信も被指控御疎情ニ被打過候段不本意之至被存候此節御歸京ニ付乍聊御贖之趣迄ニ御内々より目錄之通被致進呈之候此段各様迄宜御意旨越中守被申付越候

四月十五日英國公使パークス大坂を發し陸路伏見大津を経て越前敦賀に赴く

〔風説記〕

於京地去ル十五日御用番稻葉美濃守様御目付原市之進様より彼地詰家來之者被召呼英吉利ミンスター其外附屬之者五人今十五日大坂表出立越前敦賀に罷越候儀并道割別番之通御達有之同十七日着賀同十九日罷歸候旨在所表申越候依之此段御届申上候以上

酒井若狹守家來

五月二日

成田作右衛門

別番

御所司代様御達書寫

酒井若狹守

家來に

英吉利ニニストル其外附屬之者五六人今十五日大坂表出立別紙之通陸路越前敦賀に罷越候間休泊等差支無之様可取計候尤爲附添役々罷越候得共領分通行之節猶取締筋等心付粗暴之儀無之様可仕候

四月

道筋

伏見 大津 堅田 大溝 敦賀

歸路

中河内 柿市 柳ヶ瀬 木ノ木 長瀬 米原 彦根 鳥居木
高宮 愛知川 武佐 鏡 守山 草津 宇治 是より船路歸帆

御目付様御達書寫

英吉利國

上使壹人

外 五人

外國方別手組附添

右者今十五日大坂表出立乗切ニ而越前敦賀表迄罷越候間右之心得ヲ以其御領分内通行其外都而差支無之様可被取計候早々可被相達候依之此段申達候以上

四月十五日

酒井若狭守殿

留守居

原 市之進

〔從京都來候探索書等〕

飛鳥井様書記役塚本圖書より知せ越候書付

四月十五日

(一) 此程滯坂之英吉利人最早用濟ニ付可致出帆之處公使初六七人敦賀表に用向有之罷越度旨申立右者無餘儀情實も有之且

(二) 阿蘭陀人伏見筋通行之先蹤も有之候間其段差許今十五日坂地發足之都合ニ有之尤途中警衛之儀之嚴重被申付候事

(三) 此程滯坂之英吉利人最早用濟ニ付可致出帆之處、、

令承知則及披露候處必々京地に不立寄様御沙汰候事

一尾張前大納言様事玄同様ニ御同官ニ而前字被加候處玄同様一橋家御相談被成候付以來前字被除候事(以下は十六日の條にあり)

(按するに(一)の文書は四月十五日所司代より傳奏へ申告せしもの(二)は傳奏より所司代へ達せしもの也)

四月十六日朝廷外人通行事件に關し幕府に沙汰して堅く將來を戒めらる

〔從京都來候探索書等〕

(飛鳥井家書記役通知書類の内)

一昨日伏見海道より大津驛英夷通行之儀不伺定臨期通行爲致候儀殊ニ六七人之旨ニ候處十七人余茂有之候旨風聞候其上

兵庫開港伺中無 御返答尙尤無餘儀情實も可有趣ニ候得共自今右様之事堅固不相成候事

右被仰出旨攝政殿被命候事

四月十七日朝廷薩因備の三藩に京都警衛を命せらる

〔從京都來候探索書等〕

(飛鳥井家書記役通知書類の内)

(本文に所謂別紙は四月十六日の條にあり)

別紙之通幕府に被 仰出候就而之一昨日伏見を大津に臨期英夷通行不容易折柄潜伏夷人も難計候付兩驛之不及申京師等一際嚴重ニ可致警衛被仰出候旨攝政殿被命候事

四月十七日

右之通幕府に被及御達候段薩因備之三藩へ傳奏衆より御沙汰有之候由候事

四月十七日議奏廣橋胤保六條有容久世通熙傳奏野宮定功英人通行事件に座して其職を免せらる

〔從京都來候探索書等〕

(飛鳥井家書記役通知書類の内)

議奏

廣橋様

六條様

久世様

傳奏

野宮様

右各依御所勞御願之通御役被免候

今十七日より飛鳥井家月番之事

四月十七日

〔慶應三年正月上季
京都返達御用狀扣〕

左之御方様依御所勞議奏御辭退之處御願之通被開召候段別紙覺書之通御使者を以被仰進候

久世前宰相中將様

御使者

以上

四月十八日

御留守居中

村上彈助殿

覺書

越中守様に

前宰相中將殿

彌御安全珍重被存候然之依所勞議奏御役辭退之儀願之通被開食候依而此段爲御知使者を以被申入候以上

久世宰相中將殿使者

佐々木 右衛門

四月十七日

〔慶應三年
探索書扣〕

聞取

一昨廿日尹宮様に板倉開老御參殿御座候而御勸御座候ニ之此度關白殿下御辭表御差出ニ相成候處當時殿下御退役御座候而之須臾茂難立行是非共御辭職御留申上度然處右御周旋之儀外ニ可然御方茂無御座候間何卒天下之御爲メ宮様御出勤被爲在屹度御盡力有御座度大樹公御勸申上候様との儀ニ而罷出候段言上御座候處宮様御答御座候ニ之此方出勤之儀之何時ニ茂支不申併幕府之運ひ是迄通し而之 朝廷之諸役ニばし過を取り永ク奉其職候者有之間敷此度攝政ニ於

慶應三年

三六七

而も一條近衛九條之言を以傳議之四人を貶し候之輕卒之仕方固より其罪難免併攝政其罪を取り候之畢竟大樹の不行届
方之事ニ御座候然處攝政ニ於而ハ自ら罪を引キ辭表を差出候得共大樹ハ其儘依然ト相勤居候ハ甚々相聞不申若大樹自
ら罪を引其上攝政之辭職を留候ハ、其筋相立可申此儘ニ之何分右之周旋難致攝政ニおるて茂必聞入中間敷將又當將軍
之先帝之叡慮遵奉之心得ニ兼而承居候處近來之處置現實之上ニ之遵奉之筋一稜も相立不申長州之解兵兵庫ハ開港逐日
夷俗ニ陥り候様相成加之此節條約面ニ有之候とて英夷を伏見大津より越前に通し萬事我意ニ叶ひ不申儀ハ獨斷を以相
決叡慮遵奉之稜何レニ相立居可申哉若一稜ニ而も遵奉之筋相立候ハ、此方出勤仕候而も奉對先帝申聞茂御座候へ共此
儘ニ而ハ如何ニ出勤を促シ候共難罷出段御返答御座候由之處板倉閣老ハ甚御當惑之躰ニ而強而御勸メも出來兼退出ニ
相成候由御座候 右之今廿一日尹宮様方御直話奉拜承候

一前條遵奉之筋一稜ニ而茂相立候ハ、御出勤可有御座との儀ニ付當時於幕府如何之御事件相立候ハ、御遵奉之稜相立可
申哉之處宮様に奉伺候處只今ニ相成胡服を變し候儀ハ簡便之品ニ茂有之是非改メ候ト申候而も不理ニ相成可申哉既ニ
被髮ニ變シ全ク夷人同様之姿ニ相成候ト言語を絶候事御座候何卒此一事ニ而茂改候へト日本之風俗之取失ひ不申儀ニ
而 先帝深醜俗御惡被遊候御趣意ハ相立可申との事ニ御座候

一同日宮様之御時ニ當月十八日朝 大園公二條殿に 薩州大久保市藏近衛殿に罷出此度關白殿下に御迫り被爲成傳議奏御役
御出之日ナリ 免之儀大隅守參 内相濟居候ハ、不取敢參殿ニムし右様御輕卒之御周旋決而無御座様乾度言上可仕答ニ御座候得共未
タ其儀茂出來不申候故態ト今日市藏を以申進候段言上仕候處殿下之甚々御當惑ニ相成候由ニ御座候然處其實ハ薩州方
ハ滋野井様方に取り入り三公を二條殿下に進し候儀ニ御座候處面ニ之右之所置ニムし居誠ニ狡黠成仕方ト宮様御内話ニ
而御座候

一春嶽様に薩州小松帶刀罷出候付傳議奏貶せられし儀其方藩士方尻推ニムし候哉ニ風説承候處如何ニ御座候哉之趣御尋
ニ相成候處同人より之答ニ之傳議貶せられし儀薄々承知ニムし候得共決面弊藩より尻推ニムし候儀ニ而ハ無御座候畢

竟堂上方御不折合より事起り候事御座候ニらし自然ハ壯年之者左様之事仕出候儀茂難計ト御答申上候由御座候
右之會津上田傳次方傳承仕申候

一一條様に參殿御模様奉伺候處甚々御心配被爲成此方ハ陽明家茂幕府茂縁家之儀ニ而何方ニ茂關り不申存意ニ御座候得
共十六日之夜二條殿に參り不申候得之堂上共方因循之者ト被責不得止罷出候處輕卒之事ト相成大樹公方御尋ニ付其罪
を謝申候全ク四人之者をおだてらる今日ニ相成其方ニ逢候も面目茂無キ次第ニ候ト甚々御後悔ニ而以後ハ決而々様之
事ニ之加り不申ト直ニ御内話奉拜承候

一土州公子兵之助殿當月廿日空堂候同廿五日出帆之模様承候付當藩生駒精次ニ問合候處右之趣因許方申來候得共以前日
限間違候故此度ハ彌以出帆ニムしと申來候上吹聴可仕答ニ御座候ト返答仕申候
四月

四月十九日朝廷薩因備三藩の京都警衛の命を撤せらる

〔風説記〕

一攝政殿ニ之右疎忽之儀採用之廉ヲ以左之通御取消相成申候事
一昨日達置候英國之儀事實相違ニ付御警衛探索不及旨攝政殿被命候事
右之通薩因備方御達戻ニ相成一件御一埒ニ付十九日巳半刻

右御所旁ニ付御辭職被仰上候
攝政殿

四月廿日藩主慶順は松平春嶽の横井平四郎復籍希望に關する書翰に答ふ
〔續再夢記事〕

八日(五) 細川越中守殿の御書翰到達す左の如し來御録

正月十二日之貴翰拜誦仕候如仰奉寒退兼候處被爲掃愈御安全被成御座恭賀之至奉存候然ハ横井平四郎事付而縷々被示下趣具ニ拜承仕御懇念之御儀奉存候右ハ追々之御相談殊ニ年序も大分相立候事ニ付奉對貴兄候而も如何様卒有恕差加へ可申處舊來之國典有之候迄ニ無之粗御案内も被下候通り弊藩之義ハ偏固之習俗ニ而都合次第家中一統之人氣ニも致關係候間容易ニ取扱も六ヶ敷去とは奉對貴兄何兎角等閑之形ニ相響甚以心痛仕候得共聊左様之譯柄ニ無之候間重疊無餘儀次第不惡御了察被下候様奉希候追而能時節ニも至候ハ、素リ無油斷及差圖可申奉存候先は右奉答計紳々如斯御座候恐惶謹言

四月二十日

越中守

大藏大輔様

向々御端書之趣厚奉存候貴藩ハ餘寒も猶更ニ想像仕候間爲邦家御自玉奉專祈候且又顯光院始孰もへ御傳書之趣夫々中間候處深奉存候猶宜申上候様申出候扱又閨門老女共并備前はしめ御沙汰之趣申開候處何レも御懇慮之御義恐入候段御請申上候

勇姫御方よりも御傳書奉候猶宜奉願候以上

此御書中に正月十二日之貴翰云々ある書翰ハ左の如くなりし書翰録

態々一筆啓上仕候春寒甚敷御座候處先以御全家様御捕愈御安寧被成御迎陽珍重奉存候扱ハ其御國典も御座候御義相願候ハ甚恐縮之至御座候得共横井平四郎義先年嚴罰を蒙り此節は極々困究罷在候由右は素々小生方相願出府中不調法故第一貴家へ對し奉恐入候は勿論同人へ對し候而も實以氣之毒存居候事ニ御座候唯今ニ而は彼是余程歲月も相立候事故何卒相成候儀ニ候ハ、出格之御憐評を以被召返候様於小生只管奉懇願候先は右之段相願且時候御見舞旁如此ニ御座候書餘期後音之時候恐惶謹言

正月十二日

松平大藏大輔

細川越中守様

四月廿一日松平美濃守兵庫開港の詰問に奉答す

〔風説記〕

左之通壹通筑前が差出

今度兵庫開港之儀從大榎建言御座候處一昨年十月三港 勅許之節於彼地之被爲止候御沙汰之次第も被爲在重大之儀ニ付猶更上京見込之趣無伏臆言上可仕旨を以右建言書御渡御達之趣奉畏候然ル處父子共所勞罷在急ニ登京難仕ニ付見込之趣別紙以封書申上候宜敷御執奏奉願候以上

四月廿一日

筑前宰相

兵庫開港之儀ニ付見込之趣言上可仕旨以委細御達之趣具拜承仕候依之熟考仕候處根元兵庫之 皇國福用之地ニ付開港被爲止儀之勿論之事ニ候得共此節幕府建白之趣意ニ而者方今之形勢利害之大小 熟慮を盡し不得止事儀と相聞候ニ付一昨年 御沙汰之次第も有之候得共猶時之變遷等隨ひ幕府建言之通り御許容被爲在候外御良策も有御座間敷候乍去彌勅許ニ御決定相成儀ニ候ハ、御取締向之格別嚴重御規則被爲立候儀肝要之御事ニ愚考仕候是迄各國應接之振合礙承知も不仕重大之御事柄御粗忽等申上候段奉恐入候得共御尋ニ付此段申上候以上

四月廿一日

筑前宰相

四月廿一日敦賀遊覽の英人等字治より乗船して大坂に下る

〔慶應三年正月より季 京都返達御用狀扣〕

慶應三年

去ル十六日英夷男女五人越前致賀表に罷越候段相達置候通候處引返同廿日宇治に一泊翌廿一日同所方乗船大坂に罷下候由尤致賀表に參着いたし候哉途中方引返候哉其邊之儀者相分不中段肥後屋清兵衛方知せ越候付此段相達申候以上

四月廿三日

御留守居中

村上 彈助 殿

四月廿二日近衛忠房一條實良九條道孝國事懸に復せらる

〔慶應三年正月上季
京都返達御用狀扣〕

近衛様
一條様
九條様

右者被免置候國事懸猶被仰出候事

四月廿二日

右之通飛鳥井様書記塚本圖書方知らせ來候間此段相達申候以上

四月廿四日

御留守居中

村上 彈助 殿

四月廿二日丹羽左京大夫上杉彈正大弼松平容堂兵庫開港の諮問に奉答す

〔風説記〕

今度・御沙汰之次第ニ付而之疾速上京見込之趣可申上儀御座候得共先達而中々持病之症疾指發其上痔疾氣ニテ難儀仕罷在候逆茂長途之旅行難相成且急々快復之期も相見へ不申候間不得止事存意之次第書中を以申上候宜奉願候

丹羽左京大夫使者

天野半左衛門

四月

右一紙

此度兵庫開港之儀從大榭被申立候處一昨年十月三港勅許之節於彼地之被止候 御沙汰之次第も有之不容易重大之儀ニ付上京見込無腹臆申上候様 御沙汰之趣奉長候右者 皇都近き場所ニも有之旁開港御取止之儀之御尤之事奉存候得共一日條約御取結之儀御變更相成候而之信義を御取失如何様之御不都合生候も難測不得止形勢ニ立至候様奉存候間開港被遊御許容候方ニ愚考仕候此段所勞ニ付登京仕兼候間以書取申上候宜執奏奉願候恐惶謹言

四月廿二日

丹羽左京大夫

〔全書〕

米澤家方

一今度開港之儀ニ付存慮御尋被爲在候間早々上京見込之趣可達言上旨被仰出奉長候然ル處持病之脚氣差起難儀仕候内舊冬方尙又再發仕長途之旅行難相成此節江戸參府も相斷保養罷在候義ニ御座候得之重キ御召御免奉願候儀奉恐縮候得共不得止上京之儀御免奉願依之愚慮之趣以書取言上仕候段御届申上候以上

四月廿二日

上杉彈正大弼

皇國之大事件通明之眼力も無御座候得共御答辭退仕候ニ而之却而多罪之筋ニも相當候儀ニ付不顧不肖鄙見疎述候仰兵庫之儀ニ 皇國之咽喉近畿之要津有之萬一夷人騷擾之變を相釀し奉惱震懾候儀難計候民心一同懷不安場所ニも有之且先年同所開港之條約之勅許も無御座候内幕府役人自己取計を以取結候趣ニ付昨午式部大輔在京中幕府方右港開鎖之可否尋問ニ預り候節も右之趣を以固相斷可然段申上置候得共此度御渡被成候兩通ニ而乍不及愚考仕候ニ幕府建言之趣ニ

字内之形勢を深察し當時之情態は明知仕候儀ニ而左之儀ニ可有之且一日取結候條約を變更仕候ハ、諸夷心沸騰強義理曲直之不當ニ行涉り終ニ争端を發し候メも立至り生靈塗炭之苦ニ陥り候も難計一度者 皇國全州之兵力を以膺懲之典舉行候共所憂孤島環海之御國柄ニ而洋船東西南北ニ出沒仕候而殆寧歲無之大小之藩屏奔命ニ疲レ不出數年困弊之極ニ立至り座ふるら屈撓仕候事も可有之左様之時態ニ相及候而之 皇國御威信ニも差響不容易場合推移り可申哉ニ奉存候且又三港既ニ御差開ニ相成候上港御差塞ニ申儀ニ而之白 皇國之弱劣を御示之筋ニ隠然と相見へ却而渠ニ輕侮を相招候一端ニも有之候間御斷然ニ御差免。大之御度量を御開御所置振渠ニ意表ニ出候ハ、御威信凜然と相立諸侯永久奉感誠放慢不遜之非行無之際を立信義を堅固相守萬々世跳梁之患有之間敷奉存候尤以兵庫之儀ニ畿甸切迫之儀ニ付不虞之御警備も嚴重幕府に被仰付可然御儀ニ奉存候前件申上候通完劣聞洩見之陋臣ニ御座候得共假令御採用無御座候共聊遺憾無御座候此上至當之場合御講究被成下候様伏而奉萬禱候恐惶誠恐

四月廿一日

上杉 彈正 大弼

〔全書〕

土州侯

兵庫開港之儀不容易重太之事件ニ付早々朝下へ罷出見込之趣無伏願言上可仕 勅諭之儀奉畏既ニ大吉へ船觸仕來ル廿五日發渡登京之上愚存之趣意獻言可仕奉存候然ルニ昨今烈風激濤甚敷兩三日遲滯仕候茂難計御座候此段申上候以上

四月廿二日

松平 容堂

四月廿二日在京本藩重役木村男吏等は島津久光京前後の形勢と薩藩の密計英人の敦賀遊覽と廟堂紛紜及びひ之に對する將軍の論結と其將來に關する決心等を藩政府に報告す

〔新録自筆狀〕

慶應三年

慶應三年四月廿二日京發

以別紙申達候島津隅州着京後之様子相分候ハ、早打差立可申段之先便申達候通ニ而種々探索申談居候處去ル十六日夷人伏見通行之事を起同十七日傳議奏衆俄ニ御免職ニ相成右ニ付而同十八日上様攝政様に御成翌十九日書比還御之次第等別番御留守居書取之通ニ而朝幕其餘程之御混雜全ク障之突込と相見申候併先一幕之相濟此儘暴發杯ニ及可申敷之無之候得共手段を變又如何成企可有之哉懸念不少事ニ御座候畢竟ハ激派之人を傳議ニ入込幕府を察メ候策略ニ而右之にる哉と相考申候小松帶刀原殿へ返答之趣ハ如何ふる深意ニ可有之哉難被計未タ表裏いたし候事とハ相聞不申候得共何様 朝幕之御難決ニ御座候

一若殿様御上京之儀上様方態々御沙汰被爲在候通ニ付迎も御逃之被爲出來間敷候處御遲速之境近日之形勢ニ而之何レニ可被決哉致迷朦候事ニ付今少見定も付候ハ、御留守居之内ニ而茂早打ニ差下被是之情實直と及言上可申と存候
一典儀今日着邸之段ハ他筆を以申達候通ニ而今兩三日も相立候ハ、一躰之模様も相分可申其上よりハ男吏交代之時ニも至可申哉左候ハ、前條御留守居早打ニ茂及不事申ニ御座候

右之通ニ而今日迄之有委ニ而之御上京之御踏へニ可相成程之儀も無之候得とも態々御沙汰も被爲在候事ニ有之且之右之分ニ而も京地之近狀御參考之端ニも相成可申哉と不取敢急脚を以申達候事ニ御座候以上

四月廿二日

田中 典儀
木村 男 吏

帶刀 將監 孤雲

美濃 夷則 金左衛門

殿宛

慶應三年

三七五

向々本文書取之外ニ探索書等一綴入御披見申候以上

御留守居書取

大隅侯當月二日着坂先達而大島吉之助土州に爲御使者被差越近日御出京ニ付ハ 皇國之御爲共々御盡力有度段申越ニ相成其上御人拂ニ而何賦吉之助及御密話候ニ付而之國內疑惑を生少々沸騰茂爲有之由隅州侯之疾容堂様御出京之積ニ而着坂之處何之御模様茂無之大久保市藏が土州京留守居被及察討容堂様御出懸無之内之ハつ迄茂御滞坂御待受可被成との事ニ而右留守居不怪心配積右事情爲申上此間致歸國候由

一右等之様子ニ而隅州御滞坂隙取候事見込居候處存外去ル十二日出京ニ相成候其後四五日も相立候得共何之物音茂無之如何哉懸念々々し日々聲息を伺無油斷探索致居候處十六日櫻田惣四郎尹宮様ニ罷出候御宮様御意ニ兩三日以前原市之進殿薩小松を被呼此度隅州御出京ニ付而者如何ふる含を以て被罷出候哉之段問合ニ相成候處當時萬國之形勢連も兵庫開港位之事ニ而之相濟不申幕府之幕府八百萬石丈之致交易諸藩之諸藩銘々之高ニ應夫々之交易いたし今迄固陋之風習致一變候様大改革有之於 朝廷茂五攝家を初門地を廢し將軍家攝政ニ御成其他之官職各其任ニ當候人物御登庸無之而之 皇國之御威風海外ニ輝候儀之六ヶ敷其邊之盡力い々し候積之段相答原殿に茂余程當惑ニ而連茂宮様ニ而も早ク御出仕被爲在攝政に御力を不被添候而之如何成變動差起候難計且又大坂夷人御用相濟當月八日九日ニ之御役々御暇乞等茂相濟十日十一日方之追々出帆之治定ニ而大概御役人茂引拂候處十二日ニ至英人方大和國及越前致賀表遊覽且出京此節之御禮御暇乞を茂申上度段申出登閣老初被是申斷ニ相成候得共一切承引不致候付京都が板閣老急ニ御下坂ニ而大和京師之漸ク拒々留ニ相成致賀行一稜御聞濟ニ而十五日六日ニ發途いたし候由右之如何成主意ニ候哉極々可怪次第ニ而此節上様夷人御對面之重々御誠意を以御應接諸國公使も滿悦々々し孰も安心暇を告出帆之時ニ至候處俄ニ取而返し甚敷暴論一事も望叶不申候ハ、炮發ニ茂可及勢ニ而佛亞人杯餘程致心配候得共聞入不申候ニ付佛人茂持扱ケ様暴成致方有之候而之諸國まで恥辱ニ相成候事ニ付連茂此儘ニ差留候儀之難相成早速右英人之振舞之木國に申越本國が英

國に致通路此ニニストル之急ニ引替候様取計可申候間一ヶ條文之差許願曰穩ニ御取扱可然して相談ニ相成候由最前暇乞相濟十日乗船後番衛茂相弛候付宇和島土州阿州薩人杯追々夷船ニ乗込候由ニ而其節都合もいたし置候哉翌十一日朝飯後薩小松大久保西郷初都合五人英船に乘込夕七時比迄閑談いたし餘程應等茂爲有之由前文教賀行之儀其翌日ニ至突然申出候方ニ而全薩人より尻差候事ニ相違有之間敷との趣も原氏方内々被申上候由宮様ニ茂此事一方御憂ニ而此末如何相成可申哉と涕垂御時ニ相成候由櫻田が相咄自然之宮様御憂之餘り少之御詞過候様之事有之間敷哉と翌七日朝源右衛門呈助原監察に參直話承候處少茂相違無之何様公邊西洋風不怪御好ミ且五日御建白等之御主意を見透し彌以人心ニ被爲逆候御所置を御勸申候意味茂可有之御油斷難相成趣嚙仕候處成程其意茂可有之と同意之趣ニ有之候一翌十七日暮比惣四郎源右衛門御小屋に罷越今日尹宮様ニ罷出候處拜謁之出來兼土州御出入岩崎二三に被仰聞候趣昨十六日暮比より攝政様に推參之堂上方有之夷人致賀行之儀御差止無之儀を申立攝政様に御迫り傳奏野宮様議奏六條様久世様廣橋様御役免被成候由承り直ニ六條様に伺候處中納言様之御逢無之侍從様に懸御目伺候處相違無之先時御役御斷御聞届相濟候御禮侍從様御出有之候由承知暮比歸邸知せ候付今晚ニ茂攝政様に幕府より御手を被付候様無之而之此上如何成變事出來仕候難計と申談六半比源右衛門呈助惣四郎同道永井様に參候處未々御下無之由ニ付直ニ御旅館へ罷出御同氏に拜謁申入頓而御逢ニ相成承込候趣申上候處相違無之只今御評議最中之由ニ付乍恐先諸事ハ被聞可然人物ニ御人數を被添差越不被置候而ハ甚以懸念之段申上候處尤ニ御聞上早速上様ニ茂被仰上旨被仰聞候跡ニ而承候得之直ニ御採用原市之進殿被遣遊擊隊三千人二條殿に被差越候由ニ御座候一十八日晝九時御供揃ニ而上様二條様に御成夜前より傳奏に被仰立國事懸堂上方不殘御參集有之候様被成度被仰進置候由之處漸ク九條様一條様議奏葉室様御出席之由大樹公被仰上候之此節英人六七人致賀に罷越度段願出其段御届いたし差免候儀ニ候處 朝廷より之英夷六七人ニ申届ニ候得其實ハ十六七人之由右之中十人計京伏見大津杯潛伏茂難計仍而薩因備三藩に及探索嚴重取締いたし候様傳奏享ニ而御達ニ相成候由如何成御主意ニ候哉御任被置候私に之御尋茂可有

之處何之御沙汰茂無之畢竟幕府を深御疑被爲在候故之御事と御推考被成夷人六七人通行差免候儀之最前相達候通相違茂無之尤夷人名前も留置候間決而右等之儀可有之様茂無御座虚説を茂不被糺風説而已御取揚ニ相成俄ニ其御達有之候段御疎忽之御取扱と御論端を被發候處々様之不容易事件無據事情可有之候得共四五日以前ニ茂御届出候ハ、御參談之筋可有之候處届之節と疾夷人發途致居候趣ニ而甚以不都合之段攝政様被仰聞候間此儀と不得止次第茂有之幾重ニ茂奉恐入候旨御斷ニ相成段々御論談ニ渡り根茂無キ風説御信用ニ相成此儀付而人氣之動搖ニ茂係り御爲ニ不宜大樹直ニ申上候儀といつを御信用被成候哉之旨被仰上候得之大樹公之御直ニ御申達之筋勿論御信用被成候との御返答ニ付九條様一條様ニ茂右之趣如何御心得被成候哉と御迫付ニ候處聊大樹公之言上疑不申との趣御返答ニ相成候間左候ハ、虚説を御取揚ニ相成候末人氣茂動搖いたし此儘ニ而之何分人氣之治り方御見込茂無之御達之御誓面ハ御取消ニ相成右一件ニ付而御兩役被爲免候御方々誠之宥罪ニ付早々歸役被仰付候様被仰達候得共御兩役早速歸役之處ハ攝政様御取計茂重疊御心痛之絳有之趣ニ而前後三藩ニ之御達之御書而之直ニ御取消ニ相成攝政様ニ之重疊御後悔被爲在候由猶又大樹公此節之様成儀御採用ニ相成候而ハ以來朝憲茂難相立候間虚説之根原屹度被成御糺候様御差詰之處右之全躰滋野井殿父子正親町少將鷲尾殿四人近衛殿に御迫り近衛殿九條様一橋様ニ被仰合攝政様ニ御參向此儀御聞上無之候得之暴發可有之杯御迫被成候付無餘儀御計被成候由ニ而前條四人之堂上方之御差扣之上 公邊ハ番兵被付置候様被仰出近衛九條一條殿之國事懸御免傳議奏御跡役之日野殿始被仰付候様 本行攝政様御辭職之思召ニ之候得共勿論御免御決着攝政様ニ茂御辭職之思食ニ候由十七日御徹夜ニ而十八日晝四 二之相成不申事之由ニ候事 半時比上様還御ニ相成候由

一十八日晝後於御旅館源右衛門呈助永井様ニ拜謁右之趣一ト通奉伺候内從上様御召ニ而御這入ニ相成暫扣居候處尙御出方ニ而被仰聞候之前條之次第ニ而此先如何様之儀差起候茂難測被爲在候付若殿様早々御上京被爲在候様上様御意ニ付得其意屹と申越候様との御沙汰ニ付奉承知候段御請申上候

一今廿日源右衛門川村監察に罷出御安心之場ニ至昨日迄ニ夫々御願茂付候得共又々此後何歎邪魔之儀引起候様ニとも有之候而之難相成其境御懸念之由併上様ニ之兼而御腹を被爲居條理明白正路を以朝廷を御輔翼被爲在 皇國之御威信海外迄も奉仰候様屹度御世話不被成候而之難相成時節ニ而 皇國之御爲ニさへ相成候得之假令幕府之亡候而も將軍職之被免候而茂徳川氏ハ是迄之事と被思召決而外ニ御動之無之斷然と御居りニ相成居候由

一異人潛伏等之儀虚實茂不被糺畢竟幕府に重疊御疑懸候故歎一切御沙汰茂無之直ニ兩役衆茂被免候付而之正路を以御辯解被爲在候事ニ而朝廷之幕府ハ御輔翼不被成候而之 朝憲茂難相立との思召ハ一昨日之御成ハ被爲在候由

一此時體多端之折柄幕府を惡ミ兵端を發候様之儀可有之と不被存候得共自然左様之族此舉ニ乘シ存立候茂難計兄弟骨肉共可申者之内輪ニ而私之爲ニ事を謀候杯之下説時體茂不知無辯之至上様ニ茂左様之儀可有之筋ニ之無之との御見識尤自然之節と打潰候迄との川村殿御話ニ御座候事

四月廿日

青地 源右衛門
井口 呈助

〔慶應三年 探索書扣〕

聞取書

一去ル十四日監察原市之進殿薩藩小松帶刀を被招今度大隅殿上京之主意を被尋候ニ付帶刀ハ答候ニ之近來天下之命令兩途ニ出候故孰茂適從まる處を不知殊ニ幕府之御命令ト申候而ハ尙更被行兼候事而已ニ御座候間以後大樹公自攝政關白ニ被任五攝家を被廢關白職ハ被爲堪其任候御方御勤被成度開港之儀ハ何處ハ開何處ハ鎖扣ト固陋之論説を止メ大樹公ニ之八百万石丈之交易を被爲成其外小大侯伯各國力を計國內之便處を見立勝手次第開港いたし候様有之度右之主意を建白可致存念ニ而上京仕候ト返答致候由

一此節大坂來船之夷人共去ル十日迄ニ用向相仕舞退帆之覺悟罷在申候處翌十一日薩小松帶刀大久保市藏大島吉之助吉井幸助杯ト英夷ト朝飯後夕七時分迄何敷談判いたし候由然處翌十二日小笠原閣老迄數ヶ條申出候趣有之一々ハ分兼候得共於大坂居留館取立成就之上退帆いふし度大和奈良當り見物仕度今度將軍様拜謁いふし候處非常之御方様故今一應拜謁として上京夫方直ニ越前敦賀表を見物仕度杯許多之難題を願出候由付而之等閣老方余程御心配有之候得共英人聞入不申候付佛ミニストル蘭ミニストル方茂種々論破いふし且余程申諭候得共遂ニ承引不致候付佛蘭方英之本國に便節を差立此節談判餘り暴激之仕方ニ付國法を正しミニストル職を落シ外ニ可然ミニストルを日本に遣置候様可申越段兩國ミニストル方申出候由右之次第ニ付等閣老より其旨京師に被申越候付板倉侯下坂ニ而漸被申諭敦賀見物丈ハ可被差免御約束ニ而上京被致直ニ右之段 朝廷に被奉伺候處 朝廷方茂不得止時宜ニ而御免被爲在候然處去ル十六日之晚近衛殿一條様九條殿關白殿下に被參今度異人共敦賀物見之儀ニ付當所迄通行御免之儀付而之有志之藩々方深ク憤り暴發ニ茂可及勢ニ御座候間此儀取扱之議奏傳奏御役御免ニ相成候ハ、穩ニ事相濟可申候付左様御取計被成度旨切迫之論談有之候故 攝政様ニ茂不被爲得止御同意被爲在翌十七日早朝右取扱之公卿方辭表被差出候間即刻御役御免ニ相成候由候右ニ付而大樹公ニ茂思召有之旨ニ翌十八日午時方御參 内被爲在候筈之處 二條殿下御所勞ニ而御引入ニ相成居候間殿下へ御出其外國係事之公卿方も御集會ニ而御役御免之一條御糾明之御心組ニ被爲在候處漸ク一條九條様迄ニ而近衛様杯ハ御所勞之唱ニ而御出席無之候付大樹公ニ之近衛殿被參候迄ハ何日ニ而も殿下ニ滯留罷在候ト追々御使者を被遣候得共前文之儀を以御斷ニ相成候間不被得止一條様九條様此節之發端御尋被成候處一議ニも不及重々爲曲事由御挨拶有之關白殿下ニも御後悔被爲在御取計振不宜旨を以御辭表被差出候由一條様ニも國事懸御免御座候由左候而大樹公ニ之翌十九日四半時分御歸殿被爲在候事

但今度御免ニ相成候公卿方ハ一日御免ニ相成候事故先其儘ニ被差置外ニ御人撰も於殿下大樹公ト御相談ニ而相決候風聞御座候事

一前文有志之藩々ハ薩因備之由尤此節之一條主謀之薩ニ而因備ハ名を被借而已歟

一近衛殿も一條様九條様御同様ニ而一同國事懸御免御座候由其外國事懸之御役之此節御取消之模様ニ御座候事

一前文於大坂異人共種々之難題願出候儀ハ十一日薩藩方異人ト談判謀いふし翌日方俄ニ事起り候模様全ク薩之邪謀より出たる事ト相見申候事

一御役御免之一條及近衛殿主謀之様ニ相見申候得共此節ハ薩茂手を替に滋野井殿父子并鷲尾殿正親町殿を劫而事をふさしめ候由依之大樹公於殿下御役御免公卿方御復職之被仰立候節滋野井殿を始四人之公卿之復職之事を内々大隅殿に相談之旨御座候得共其儀ハ打止ミ留守居内田忠之助被呼相談之上四卿復職之儀建言之積ニ御座候處忠之助之病氣ニ而附屬之者遣候由依之附屬之者に右之相談有之候處附屬之者申候ニ之一日御役御免ニ相成候上之如何ニ大樹公方被仰立候共復職被仰付候而之朝廷之御威光相立兼候間此儀ハ決而相成不申是非共復職ト申候ハ、兵力を以相爭可申段申出候由此ニ而薩之邪謀顯然ニ事ニ御座候

一 大久保市藏方越藩青山小三郎に申向候ニ之此度大隅殿上京之儀ハ長防御所置兵庫開港之儀之日本之興廢ニ關る大事件ニ付公武御一致ニ而至當之御所置ニ相成人心安堵ニ運候様有御座度依之土州宇和島杯申談一同上京ニ而公武に忠節を被盡度存念ニ御座候間尊藩春嶽公ニも御上京被爲在與々ニ御盡力有之度段及相談候付青山も至當之論ニ服し其趣國元へ申越置候處大隅殿上京ニ相成候而之舉動ハ市藏方前説ト相違いたし候間當惑いたし候段噂いふし候今更薩ニ被售余程歎息いふし居候模様ニ相見申候事

此節大隅守様御上京之儀ニ付而ハ市中取沙汰諸藩之風説之區々之事ニ御座候得共要用之大略而已録上仕候以上

四月廿一日

木村辰馬
牧新五
櫻田惣四郎

益田勇
小篠熊雄

四月某日紀伊茂承兵庫開港の諮問に奉答す

〔風説記〕

兵庫開港之儀御尋ニ付而之早々上京可仕處所勞ニ付上途難仕段去ル十四日御請旁奉申上候處今以快氣不仕候付上京之儀者今暫御猶豫奉願上度見込之儀ハ別封以書取言上仕候宜敷御奏達奉願候以上

四月

紀伊中納言

〔別封〕

此度兵庫開港之儀追々大樹言上之趣有之候處於彼地之一昨年十月御沙汰之次第も有之不容易重大之儀ニ付見込之趣言上可仕御沙汰之趣奉畏候右開港之儀ニ付而之先頃大樹尋有之候處既ニ開港條約勅許被爲在候儀ニ付開港之儀之今更彼是可申儀之無之候得共場所柄ニも有之別而此節柄如何可有之哉と苦心之趣愚存申答候處猶又去ル五日從大樹奏聞之趣ニ付而之皇國之御爲富強之策略等無余義事情深察仕候ニ付最早愚存無之旨再答仕候次第ニ御座候然ル處今般私共迄御下間被爲在候儀乍恐御憂慮之段奉恐察熟考仕候得共愚昧不才勳問之重き不堪只々苦心之余宿病を相増候而已
一て右之外別段之見込無御座候尤無伏願言上仕候様御沙汰之儀ニ付大樹に相答候兩度之趣意書別帛相添奉言上候誠恐誠惶頓首百拜謹言

四月

中納言茂承

四月廿三日大納言柳原光愛再ひ議奏に任せらる

〔慶應三年正月上季 京都返達御用狀扣〕

柳原大納言様

右者議 奏御再役被 仰出候尤其餘議 奏方未相究候

右之通秋岡縫殿方知せ來候此段相達申候以上

四月廿三日

御留守居中

村上彈助殿

〔續再夢記事〕

廿三日柳原大納言殿へ再ひ議奏仰せ出されしよし登京日記

四月廿三日松平容保特に參議に推任せらる

〔從京都來候探索書等〕

〔四月廿三日飛鳥井家書記役通知書類の内〕

會津様

先帝 叡慮遵奉長々守護之職掌相勤其功不少

叡感候依參議被御推任

〔慶應三年正月上季 京都返達御用狀扣〕

飛鳥井様書記役塚本圖書方差廻候書付寫

不肖之輩守護職被命以來 先帝海嶽之厚眷曾而分寸之功勞無之恐懼仕居然處不計茂 天崩地折慟哭此上無御座候猶報恩之道日夜ニ心配仕候得共 今上御繼述之美目於サク^{ホノマ}拜順之儀未タ淺シ今般不存寄 先帝 叡慮遵奉永々守護之

慶應三年

三八三

職掌相勵其功不少被思召參議被推任旨被 仰下伏謝感泣已ニ先年參議被推任之旨蒙 御沙汰臣不肖之所堪ふきを以先
祖正之よ御追贈之儀願之通被仰付臣之榮耀不過之儀ニ御座候然處又々此度之御寵命重々之 天恩幾重ニも辭讓可申上
儀ニ御座候得共微衷 御垂憐之上兩朝斯迄之御重命此上固辭仕候而者却而恐縮至極ニ御座候間其御幕府に茂相伺謹而
御請奉申上候誠恐頓首

參 議 容 保

四月廿三日京都の薩藩邸に貼紙して薩人の奸曲邪謀を誘る者あり

〔本田文書〕
〔安津免久佐七〕

〔本田武典氏藏〕

慶應三丁卯四月廿三日薩邸に張紙之寫

薩藩之奸曲邪謀今ニ難始近年誠ニ熾盛而可惡ハ勿論不可赦所也第一徳川氏を欲令衰弱而天下億万令蒙瘡炭之苦抑當時
之亂脈ハ文久四月賊魁三郎諺州之脱士を勸奨して上登ニ根ヲ發ス又是諸藩割據ニ淵源也 天朝其輕蔑し滿朝之 公卿其
愚弄し反復表裏 朝暮ニ遷轉今般英國公使其奸臣吉井幸輔大久保市藏を以敦賀一見之儀を人説して幕英離親之陰策
を施幕府篤ニ察して英斷を決し強て陸路を越前ニ令走元々英之不欲所也然而薩藩ニ反して備脱之匹夫野呂呂某等をして
過激兇暴之雲客鷲尾侍從正親町公董を迫而外夷京師ニ潜入或ハ有志之藩之暴發之萌有之候威言を以兩役を廢し其奸計
外夷をして 朝廷を恐怖せしめ 幕府をして政令之順條令亂天下上庶之抑重を失し曲を與へて己其直を雖欲取天何
そ此罪人を許さんや且藩士之於 鞏下強盜強藩其志ニ令行抑扶桑一州之罪人ならず天地間の惡奴是迄生殘息をるハ億
俸之甚敷と言ふし天罰不歷日身首所を異ニせん事旬日之間より天網恢々疎而不漏といふべけん哉

四月廿五日藩主慶順兵庫開港の詰問に奉答す

〔慶應三年〕
〔自筆 牒 控〕

〔四月廿二日附田中木村より家老中老宛書翰〕

以別紙申達候儀儀今廿二日無異儀着京兵庫開港之儀ニ付朝廷に之御答書相達早速例之御役々打寄奉拜見乍恐至極之
御趣意と奉存候

〔下略、田中典儀藩主の奉答書を携へ此月十五日熊本を發す但氣船萬里丸乗組〕

〔慶應丁卯年〕
〔一新録自筆狀、内密公武に御建白一件、尊攘録御建白御國議〕

四月廿五日傳奉飛鳥井様に御留守居持參之御答書寫

今度開港之儀大樹より言上之處一昨年十月三港 勅許之節兵庫表之儀者被止候御沙汰之次第茂有之不容易儀ニ付猶早
々上京見込之趣無伏藏言上仕候様御書付之趣奉得其意候私儀持病之痛癢強長途之旅行無覺束養子細川澄之助儀爲名代
差出可申段者御届仕置候通ニ付同人出京之上可申上管ニ御座候得共御期限茂有之儀ニ付先以書取左ニ言上仕候根元兵
庫者帝都程不遠所柄ニ而開港者如何ニ候得共於幕府者年來洋夷之情狀字内之形勢等深く洞察有之殊更外國ニ對し一旦
條約取結之末及破談候而者信義難相立處よりは是迄内輪之不行届者大樹一身ニ引受御斷申上候而之歎願筋と相見候得者
乍恐於 朝廷茂大小輕重得斗御參酌有之 天幕御一致ニ被爲在御決定彌以軍國之手當ニ差入萬事公共之政道を以各國
を致壓倒候程之御國體相立候様有御座度御儀ニ奉存候普通之管見ニ者御座候得共見込之趣任御尋此段申上試候誠恐誠
惶頓首百拜

四月

細 川 越 中 守

四月廿五日我藩探索櫻田惣四郎は山内容堂の開港可否奉答延期のこと薩藩藤井良藏の將軍品階

のこと等を報告す

〔慶應三年 時體探索書〕

卯四月廿五日

聞取

一昨廿四日土州中村呈助國許を早打ニ而到着右之先日書上候通常月廿日兵之助殿國許出帆同船直ニ引返同今日比容堂公出帆之積ニ御座候處折節東風烈しく候而廿日之出船何分六ヶ敷就而之來ル五月朔日迄ニ兵庫開港之見込否之儀言上候様被 仰出置候處前文之次第ニ而容堂侯朝日迄ニ出京出来不申候間何を不遠中出京仕候間御返答之儀之そま迄御猶豫被仰付度段伺として上京仕候由ニ御座候右當藩生駒精次が直話承申候

一前文之次第ニ付既ニ御先供之此節中村呈助一同ニ乗込候而着坂いたし居候由ニ御座候

一薩州藤井良藏子供引連歸國之積ニ而昨廿四日 尹宮様に御暇乞として參殿いたし同人が申上候ニ之當月十六日ニ之傳議奏俄ニ御退職同十八日ニ之大樹公關白殿下に御出右之閑老敷監察ニ而も事足候儀ニ御座候處將軍之職として自ら徹夜之議論誠ニ何事も輕卒之所置耳有之候と微笑いたし候由ニ御座候

一前文談判中同人之口氣幕府を推強く議論も相立將又攝政殿下に勇激隊を警衛として被差置其外惣躰之まりよく有之候故薩之胸中ニ之大分さらへ候様相見候と尹宮様御賢察ニ而御座候

四月廿五日

櫻田 惣 四 郎

四月晦日常陸宮賀陽宮及び近衛九條鷹司其他國事係の諸公卿參内して二條攝政の留任勸告兵庫開港等の件を議す

〔慶應三年 時體探索書〕

慶應三ノ五月七日 聞取

一四月晦日 常陸宮様 尹宮様 前關白近衛様 同九條様 同鷹司様 其外國事係之御方々御參 内被爲在候御趣意尹宮様が御内話御座候ニ之二條殿下御辭表 朝廷が御許容無御座候處未々殿下におゐては御請無御座候ニ付御一同が是非御請御座候様御勸メニ相成候故殿下も御請被成候由ニ御座候然處殿下が御一人御内覽之御方被爲出来不申候而之何分職掌難相動と願出ニ相成候得共未々當日ニ之御決議ニ之至り不申由 殿下が御願立之御方將又二條殿下が兵庫港之儀之假令兵端を開 皇國焦土と相成候とも開不申方可然哉之段御尋ニ相成候處常陸宮様御説ニ之幕府に御委任之儀ニ御座候得之 朝廷が之兎哉角不被仰出方可然との事ニ御座候山鷹司殿下之素が開港之論ニ而近衛殿下も最早ケ様ニ相成候上之迎も開不申候而之相成申間敷との御見込ニ御座候由右之次第ニ付尹宮様が當春兵庫一條列藩に御尋御座候之如何之御趣意ニ御座候哉之段御尋御座候處近衛様が之御答ニ之天下之議論多キ方ヲ御取用之御趣意と申事ニ有之タル由ニ付猶尹宮様が最早諸侯が之答書も差出候儀ニ而何レ歎御決し被爲成候而も支不申儀ニ之無御座哉之段御取詰ニ相成候得共兵庫一條之何レ後日ニ相決し可申と決議之場ニ之至不申候由ニ御座候右之通ニ付兵庫一條格別御異論之御方も有御座間敷と宮様に奉伺候處自然廟議開港と申事ニ相成候ハ、必大原三位等之堂上共沸騰いたし可申當時之御所置外臣之言ニ隨ひ候へ之内臣沸騰いたし内臣之論ハ外臣ニ不都合ニ相成誠ニ當時之事休廟議甚々當惑之至ニ候幕府におゐて基本相立居候ハ、内臣抑揚之筋も就キ候得共此度兵庫開港之奏聞も其實之大坂迄も開港之所存右之所置ニ而之迎も内臣之抑揚付不申如何相成可申哉未々目適付不申趣御沙汰ニ相成申候

一土州容堂侯同兵之助殿當月三日六條中納言様に御職家也御出ニ相成候御模様六條様に罷出奉伺候處御咄御座候ニ之容堂ニ

おひては公武一和之盡力ニ相違無之候得共此度幕府方外國に之斷然と兵庫開港申向ニ相成候而 朝廷に之内分ニ取扱候仕方實ニ相聞不申候只今迄之御所置外國に之一時其場之間ニ合せいたし兎角欺キ勝手ニ相成候故毎も切迫ニ臨ミ不得止彼方申出候様取計不申候而之難叶勢と相成をまより國內も異論沸騰如此形勢ニ相成申候此節兵庫之一條も 朝幕御一致之上ニ候得之格別異論も有之間敷候得共々様ニ順序ヲ失ひ候而之決して相成不申と容堂噂いたし候と御内話承申候

五月七日

櫻田惣四郎

四月某日尾張慶勝兵庫開港の詰問に奉答す

〔風説記〕

尾州公御尋ニ付見込建言

謹而御請奉申上候今度兵庫表開港之儀大樹建言之書面御渡早々上京御見言上仕候旨等被仰降之趣謹而奉畏候實以御沙汰被爲在候通り不容易重大之事件ニ奉存候既ニ大樹方諮詢之節度時柄之宜ニ候得之別段存寄も無之候乍去天下之大事件ニ付尙天下ニ與々致謀議於 朝廷御安堵之途尙又手厚相成候様答置候義ニ候間此外可申上見込之筋無御座候右之趣上京可申上之處去頃已來宿痾兎角相勝不申此節之處押而上途難仕尤少々ニ而茂快候ハ、上京可仕候得共期限も被爲在候御事ニ付先此段以書取奉言上候誠惶誠恐頓首敬白

四月

大納言慶勝上

四月^{西曆五月}某日倫敦の一新聞紙は安政六年以來本邦に賣渡したる船舶價銀年月略表を掲載す

〔尊攘錄新聞紙並夷情探索等〕

中外新聞卷三 丁卯七月譯成

一千八百五十九年七月一日橫濱長崎箱館開港以來外國より日本へ賣渡したる船舶價銀年月略表

船	號	本國	噸數積高	價	但弗	賣渡の年月	買主
イングランド		英	七百四十六	十二萬八千		千八百六十一年五月	薩摩
セ	ン	蘭	二百五十	一萬六千		同 六月	仙臺
ダニール	、	亞	二百六十三	一萬六千		同 八月	政
シ、イ	、	同	四百四十八	三萬五千		同 十月	筑
アル	ゼ	同	三百七十八	二萬二千		同 同	政
アル	ミス	英	三百五十八	三萬四千		千八百六十二年七月	政
フワイリ	、	英	四百四十七	十三萬		千八百六十二年九月	薩摩
コロ	ン	亞	七百七十七	九萬五千		同 十月	筑
ゴ	ー	同	百八十	一萬四千三百		同 十一月	板
ウ	ン	英	四百四十七	十一萬五千		同 同	長
ジ	ン	同	四百〇五	十五萬		同 十二月	政
シ	ン	亞	千五百	八萬八千		千八百六十三年六月	阿
ワ	ン	同	百七十五	一萬		同 同	尾
ト	ー	同	百六十七	七萬		同 月不知	出
ガ	ツ	英	三百三十七	十萬		同 同	出
シ	チ	同	二百四十一	十萬		同 二月	加

慶應三年

三八九

ナ	ケン	同	八十一	四萬二千五百	同	同	政	府
ラ	ン	同	二百八十三	二萬	同	三月	長	州
キ	ツ	同	九十四	六萬六千	同	月不知	政	府
ホ	ク	同	三百三十八	四萬八千	同	同	長崎	製鐵所
シ	ヨ	同	三百六十一	十三萬五千	同	四月	政	府
シ	ヤ	同	三百七十	十九萬五千	同	同	政	府
リ	イ	同	八百一十一	八萬九千	同	同	安	府
コ	ン	同	五百三十二	九萬五千	同	同	薩	府
シ	ヤ	同	四百十二	十一萬五千	同	五月	土	府
シ	ヨ	同	四百九十二	八萬五千	同	同	薩	府
チ	ト	同	二百三十六	二萬五千	同	五月	南	府
コ	ム	同	不詳	十二萬五千	同	六月	筑	府
サ	ラ	同	百六十	七萬五千	同	十一月	薩	府
シ	ヨ	同	三百四十一	十萬	同	十二月	政	府
ヤ	ン	同	三百五十	十四萬五千	同	同	不	府
ホ	キ	同	二百七十四	七萬五千	同	同	薩	府
ス	ワ	同	四百十五	八萬	同	同	久	府
ロ	チ	同	四百六十一	十二萬	同	三月	薩	府
ス	ト	同	百六十四	七萬五千	同	同	薩	府

コスモ、ホリツト(萬里丸也)

カ	ル	ザ	ー	チ	同	五百	十二萬	同(一八五九年也)月不知	肥	後
船	號	失	記	同	同	八百八十七	十三萬八千五百	同	紀	州
第	一	番			同	日本政府より和蘭政府へ誂る新造の船按て開陽丸を言ふるへし	九萬五千	同	政	府
ヒ	ヨ	ラ			同	六百八十四	九萬五千	同	薩	府
シ	ヨ	ル			同	五百四十一	十一萬五千	同	加	賀
イ	ル	ヂ			同	三百九十六	十二萬五千	同	筑	前
ア	イ	ル			同	六百七十	二萬五千	同	筑	前
ユ	ナ	イ			同	二百〇五	六萬	同	薩	府
キ	ン	リ			同	二百七十	七萬五千	同	薩	府
ゼ	ラ	ル			同	四百十	八萬	同	薩	府
ホ	ン	ト			同	三百八十三	一萬九千	同	薩	府
ス	タ	ル			同	不詳	一萬二千六百	同	加	賀
ベ	ル	リ			同	普魯士	一萬一千	同	越	前
ブ	ラ	ン			同	八百	三萬五千	同	政	府
マ	セ	ー			同	三百〇五	三萬五千	同	政	府
プ	ロ	マ			同	不詳	八萬	同	小	倉
ベ	ン	、			同	二百四十三	二萬五千	同	薩	府
サ	ラ				同	百十六	一萬九千	同	薩	府

ドルヒン	同	五百九十六	二萬三千	千八百六十六年四月	肥前
キルドワーフ	同	不詳	一萬二千	五月	小松
オテントーサマ	同	不詳	五萬	六月	薩摩
ペンプロック	同	不詳	二萬	不詳	不詳
エド	同	三百七十	七萬	按此船名重出ス亦二度賣歟	肥前
グラナダ <small>(渡雲丸也)</small>	同	不詳	十萬九千三百七十	七月	肥後
イーグル	同	不詳	十八萬	八月	肥後
メルキュリー	英	百二十	三萬	同	肥後
フワイラー <small>(渡雲丸也)</small>	同	七十	二萬三千	同	肥後
ジャパン	同	四百七十三	十一萬	同	安藝
ドンバルトン	同	不詳	十八萬	九月	安芸
ケストレル	同	二百三十	六萬	同	安芸
チャイネ	英	不詳	二萬	同	安芸
サツマ	同	二百八十一	三萬四千	十月	土佐
ラワリ	同	三百二十三	三萬	九月	土佐
ハルナ	亞	千三百十八	十七萬五千	同	長州
ヘルキュルス	英	百五十	六萬	同	長州
ターバンニョー	同	五百十七	十萬五千	同	長州
ナンカイ	同	百三十	七萬五千	千八百六十七年六月	土佐

マルチン、ホワイト	亞	百〇〇	七萬五千	千八百六十六年十一月	不詳
ハシタ	英	四百四十	不詳	千八百六十七年二月	石炭と交易す
チウサン	同	八百十七	八萬	同	不詳
シチー、オフ、ナンテス	同	三百〇一	三萬九千	三月	不詳
スーイリイン	同	六百九十九	十五萬七千	千八百六十六年三月	土佐
カヒル、チーフ	同	百八十七	一萬一千	千八百六十七年三月	不詳
スボンキー	同	不詳	同	同	不詳

此表は一千八百六十七年五月刊行倫敦新聞紙に載せる者として彼邦にて聞くに隨て記しある者ふれば尙遺漏も有るべく買主の名を誤り聞きある或は此方にて轉賣したるハあるべしと雖も亦以て海内諸侯の備ふる船艦の大略を知るに足るを依て原文の儘に譯出せるものなり

五月二日會津藩京都留守居は藩主松平容保參議推任宣下の旨を我藩留守居に通報す

〔慶應三年正月上季
京都返達御用狀扣〕

細川 越中守 様
御留守居申様

松平肥後守内
小野 權之 丞
手代木 直右衛門
外島 機兵衛
上田 傳次

以手紙、然者今日依御奉書肥後守爲名代堀左衛門尉様登 營被成候處 先帝 御慮遵奉長々守護之職掌相勵其功 不少御感候依之參議御推任被宣下之旨 御所を被 仰出候付可任 御慮旨被仰出難有被奉存候右爲御知被申上度此段 各様迄宜得御意旨被申付如此ニ御座候以上

五月二日

五月四日薩摩土佐越前守和鳥の四藩主越藩邸に會して時局に處する道を講究す

〔慶應三年 時體探索書〕

慶應三ノ五月七日

聞 取

五月四日島津大隅守様松平容堂様伊達伊豫守様越前御屋形に御集會ニ付土州生駒清次に模様相尋申候處同人話ニ直ニ 容堂侯に相伺候處重大之事件一度之話合ニ而之確定之時ニ至り不申今一兩度も出會仕候ハ、如何とそ落着可仕評議未 定中外向に漏れ候而之種々之物議を起し諸人之疑惑を生る而已ニ而有害而無益事ニ候得之評議決着いたし候迄之近 侍之者へも難漏旨被申聞候御評議之次第一切相分不申併大隅守様思召之頃日小松帯刀原市之進殿に建言等之趣意 同様ニ之有之間敷見込之由承申候

一右御集會之儀越前青山小三郎に承合申候處三侯共晝八時比御入ニ而夜四時分御退座段々御評議も有之たる趣ニ候得 共家老杯も御退出前一寸御召出有之候位ニ而何之御都合も伺兼候併始終至而御熱談之御模様ニ而大隅守様も是迄外評 通之御異論等も無之儀と相考候段噂仕候

一容堂侯御出京前於御國許御家中に御示し書之趣ニ付而之區々之風説も御座候處右之土州當君方之重役容堂侯御上京 を拒ん爲メ觸出し候書面之由

一土州過激之流派是迄多分愼等申付有之處今度容堂侯御登駕前悉皆被免間ニ之役付被仰付候者も有之候由

右兩條容堂侯方青山小三郎御直ニ承候趣同人方直話承申候

五月七日

五月五日本藩志水九左衛門齋藤又太夫片山多門清田新兵衛外百五十八名に藩世子上京の隨行を 命す

〔御國往來狀控〕

五月五日

覺

志 水 九 左 衛 門
齋 藤 又 太 夫
片 山 多 門
清 田 新 兵 衛

右者今度若殿様御出京之御供被仰付旨(五日及六日附を以て此外百五十八名隨行出京を命せらる)

五月六日松平春嶽山内容堂伊達宗城島津久光二條關白に謁し議奏補任を迫る

〔慶應丁卯年 一新録自筆狀〕

奉拜啓候扱今八日尹宮様は參殿拜承之趣左之通ニ御座候

一一昨六日越春岳侯薩隅州土州容堂侯宇和鳥老侯關白殿下に御出ニ相成當時議奏未御揃無御座不容易時體ニ付至急御

慶 應 三 年

三九五

揃被成候様有御座度右御人體者中御門大原三位之兩公被仰付ニ相成候様有御座度との事ニて容堂候も御雷同ニ相成春岳侯ハ程よく御取成ニ相成候由隅州にも家臣餘程迫り候由此度者是非其運ニいたし候はまり之由ニ而昨七日ニ者薩藩西郷吉之助大久保市藏吉井幸助此者不等之三人猶又三侯へ土宇相迫り候上薩よりハ大久保越よりハ酒井十之允何千之助姓失土宇よりも壹人宛都合五人關白殿下に拜謁を申入候得共御不快ニ而御逢無之右ニ付今日惣御參 内故御序ニ關白殿に前文五人猶拜謁を願出候由是以前條兩公御役一條相迫り候事の由右之次第ニ而 公邊より尹宮様に是非御參内御座候様御促ニ相成宮様御見識ハ大原等者此方實ニ敵方ニ候得者願者他人より抑へ候様有之候へハ甚タ都合も宜敷尤近衛ニおひても容易ニ承知いたし申間敷しかし關白之説ニ者登る丈ク登し候而惡事天下に明白いたし候方可然敷との見込ニ候へは自然者兩人を擧げ候敷も難計若 廟議混雜いたし候ハ、此方も參 内之覺悟ニ御座候との事ニ御座候容堂心情頓度相分不申候間此方今日參内いたし不申候ハ、土藩生駒精二岩崎二三之兩人之中呼出申管ニ御座候付右之趣兩人へ申置候様との儀ニ付歸殿懸け兩人へ面會いたし委細申述候處兩人よりの返答ニ者寡君事議奏職至急ニ被爲出來度との存意ニ者御座候得共誰某之公卿御人撰之儀者言上不仕様承居申候間篤斗聞合せ猶可申上との事ニ御座候右者未定之事ニ者御座候得とも全く今日惣御參 内御衆議之由ニ御座候間聞取之大意奉録上候委細ハ明白いたし候上可奉申上仰々頓首拜

五月八日

櫻

田(惣四)

永屋様

机下

尙々取紛別して亂筆多罪

五月八日我藩大目附田中典儀は山内容堂の上京、越土宇薩四藩主の會合、攝政の辭意撤回及び兵庫開港に關する諸藩の意向等につき藩政府に報告す

〔慶應三年正月上季
京都自筆牒扣〕

五月八日御國通り御飛脚仕出

以別紙申達候爰許之形勢男吏殿御出立迄之處之疾ク御着熊夫々被仰達たると存候其後之模様無油斷探索之儀御留守居初に茂申談方々周旋有之候得共未タ取留候儀聞へ兼申候容堂様ニ之去ル朔日御着京翌二日ニ之春岳様宇和島老公島津隅州土州邸に御出有之候處隅州様之無程歸邸ニ相成候由不取敢御着京御歡位之事ニ而茂有之たる哉入組候御對話ふと有之候様子ニ之相聞不申同日ニ之越前邸に土薩宇和島之三侯御出有之終りニ之御酒宴杯茂有之其席ニ大久保市藏越藩青山小三郎酒井十之丞中根賴負杯も被罷出候由之處罷出候節之御酒宴最中ニ而時躰ニ係り候御談話等之無之段小三郎が噂いたし候由又一昨六日ニ之越薩土宇和島之四侯攝政様に御出有之候由何敷被仰入たる儀も可有之是以及探索候得共未タ聞取出來不申候尤原榎本兩氏之内右之様子承り候爲昨日攝政様に被罷出候由ニ付少之聞取茂有之たる哉御留守居罷出承籍候管ニ付右之様子其外之事共今少取留候儀御座候ハ、急脚ニ而茂差立可申と奉存候此節之儀土州杯御左右之近臣茂御模様伺得不申由ニ而重疊被秘候儀と相見申候

若殿様御上京御比合茂此元之一左右ニよりて御評決可被爲在最專要之事ニ付種々手を盡候得共未タ確報を得不申去とハ心痛之次第ニ御座候

一攝政様御辭職宮様方御留之事并兵庫港之一件等別番探索書之通ニ而攝政様之先御受被爲在天下之幸甚ニ御座候兵庫之儀未タ御決定ニ之至兼候得共約ル處開之方ニ落着と相見申候諸藩之御答書之大概出揃候由右之内因備藝之三藩之鎖港説其外之少々異同有之候得共大概開港説之由尾州加州之御答書之探索生々寫差出候付別番差進申候

一若殿様御登京之節之御究人數之外無足在御家人人と茂可被召連哉と恐察仕候處此許詰込之御備組并御物頭足輕共當七月交代ニ相當候付右交代之人數只今引上被召連御下國之節之當時詰込之分を被召連候ハ、別段無足御供ニ茂及不申御

出方茂莫太ニ減少可仕敷ト啗合申候右等之儀之勿論御參談茂可有御座候得共心附候儘不聞申試候事ニ御座候
右之外差たる儀茂無御座江戸ノ之官脚差通候付不取敢如是御座候以上

五月八日

田 中 典 儀

長 岡 帶 刀 殿 已下

五月十日幕府新選組隊長以下の格式を定む尋て新選組内訖を生す

〔諸雜御留守居録上〕

五月十日新撰組に被仰渡候格式左之通

見廻組支配頭格	隊長 近 藤 勇	見廻組並	調役 茨 木 司
同肝煎格	副長 土 方 歳 三	同	同 村 上 清
見廻組格	助勤 沖 田 綱 司	同	同 吉 村 貫 一 郎
同	同 長 倉 新 八	同	同 大 石 桑 次 郎
同	同 原 田 左 之 介	同	同 安 藤 主 計
同	同 井 上 新 三 郎	同	同 近 藤 周 平
同	同 山 崎 承	惣組不殘見廻組御抱御雇入被仰付候	
同	同 緒カ、方、 俊 太 郎	卯五月	

右之通被仰付候處局中異論沸騰今更格式を請候而ハ是迄之趣意ニ悖り可申とて同十二日脱局之面々

・茨 木 司 高野一郎右衛門 ・佐野七五三之助 松 本 主 税 岡 田 克 實

中 井 三 彌 ・富 川 十 郎 中 村 五 郎 木 幡 勝 之 松 本 春 藏

同十三日右之面々會津侯に罷出公用人小野權之丞並諏訪常吉に願立候口上手控

乍恐拙者共儀之先年來勤王攘夷ニ付盡忠報國之志を遂度一途ニ而本國を脱走し是迄新撰組に依頼罷在以後差而之御奉
公も不仕時勢柄とハ乍申追々御國體變遷隨而今般莫太之御格式被下置候段難有感銘仕候得共寸功も無御座斯被仰出候
を其儘御受仕候而ハ何共恐縮之至將初一念之程透徹不仕儀も歎ケ敷今更御格式頂戴仕候而ハ夫々本藩にも無面目ニ君
ニ勤仕候儀も難通依之難局仕度奉恐入候得共御支配之御儀ニも御座候間何卒隊長に右之趣被仰渡無異議願之通り被仰
付候様奉歎願候以上

卯五月

右之通歎願差出候へ共御免し無之候付議論益沸騰本國を脱し候も全ク勤王攘夷之宿志ニ有之候處今日ニ至り水泡ニ相
歸し格式を受候事ハ本意を失候而已ふらす二君ニ仕へ徒ニ祿を貪候儀ニも相當り如何ニも殘念之事ニ思ひ前文十人之
内黒印之面々遂ニ割腹致し候由承候事

五月十日松平春嶽島津久光伊達宗城二條關白に謁し議傳兩奏補任の速かならんことを請ふ

〔探 索 書 扣〕

五月十九日小篠熊雄被差下候節御國申向濟
聞取

一當月十日越春岳侯薩大隅侯宇和島老侯再ヒ 二條殿下に御出有之先日傳奏議奏之兩官速ニ御擯被成候様有之度段建言
之儀猶御促ニ相成候由殊ニ隅州より之中御門大原之兩公御登庸有御座度段頻ニ御迫被成候處殿下被仰ニ之右兩人之

慶 應 三 年

三九九

先帝之時御舉用之儀三度迄奉伺候得共絶而御許容不被遊人柄ニ御座候得之自身一己之見込を以登庸ハムし候儀何分奉對 先帝恐入候儀ニ御座候段御答ニ相成候處猶隅州方最早其頃ニ之時體茂變遷ハムし候儀候得之今日ニ至候而之御舉用御座候而却而 先帝之御慮ニ茂叶候ニ之相當申敷哉ト強而御促ニ相成字和鳥老侯茂御同志ニ而兩公之激論之唱茂有之候得共其儀ニ御當り被成候ハ、丁度程能御議論ト相成可申との事ニ御座候處殿下方之御答ニ之此方ニおひて茂當職を蒙り不申以前之大分正義之唱茂爲有之哉ニ聞及居候處近來ニ相成 朝廷之御規則を遵奉仕候得之因循家ト相唱將軍に相談ハムし候得之幕府之關白トそしらま候得之 將軍茂 朝廷之役人ニ相違無御座御規則ハ是非遵奉不仕候而之難叶儀候得之實地を不歷者カ之右之通議論を受申候被兩人茂其職を蒙り候上之暴論茂有之間敷候得共前條之次第候得之衆議ハ如何相成可申於拙者之何分舉用難致との事ニ御座候處猶字和鳥老侯より鳥丸萬里小路之兩公ハ御舉用何程ニ可有御座哉之段伺ニ相成候處其方國ニおひてハ人才ニ而候得之足輕士民之徒ニ而茂家老職ニ登庸ハムし可申哉 朝廷茂列藩茂各官位上下之分有之候儀ニ御座候得之低位卑官之徒を以俄ニ高官重職ニ舉候譯ニ之決而至不申と被仰候故其儀も相止候由御座候

一春岳侯ニおひてハ傳議兩職其人を被得候儀ハ御同論ニ御座候何某公ト御撰舉ニ至候而之御不同意之由ニ而既ニ隅州方中御門大原之兩公御撰舉之節私黨を引ニ相當り候故御遠慮可被成ト之御論有之候由ニ御座候
 一前條將軍茂 朝廷之役人ニ相違無之ト 殿下被仰候儀ハ隅州之胸ニ之大分響候由ニ御座候
 一右御參殿ニ之土州容堂侯茂御出ニ相成答ニ御座候處御痛足ニ而御斷ニ相成候得共其實ハ少シ御議論合兼候儀有之候處カ托病ニ而有之ニ由御座候
 右之尹宮様方奉伺候儀御座候
 五月十一日
 櫻田惣四郎

五月十二日日本藩政府は銃隊修業に志ある者は其筋の許可を得て演武場に出つべき旨を布達す

〔慶應三年機密間日記〕

一統觸
 演武場之儀ニ御國中一統銃隊等爲修行御取起ニ相成候處次第ニ出方相増取縮兼候儀も有之候間夫々之御役を茂被 仰付候事ニ候依之右藝術ニ志有之面々之其筋に相答罷出候儀不苦候條此段御同役に通達御組々ニ茂可被成御知せ旨候以上

五月十二日 御手當方より也
 御 備 頭 宛
 御 奉 行 申

五月十三日賀陽宮今般御扶助を免せられ國事係は如故との朝命ありし旨を同宮家佐川主殿より本藩京都留守居に通報す

〔慶應三年正月上季京都返達御用狀扣〕

細川越中守様 御留守居御中
 賀陽宮様 佐川主殿
 以手紙、然者御扶助之儀崩御被爲在候付被稱永々之御勤勞之上被免國事御掛り之可爲是迄之通旨被 仰出深長思召候依而此段可申入旨ニ付如此御座候以上
 五月十三日

五月十四日松平春嶽山内容堂伊達宗城烏津久光等將軍慶喜に謁し兵庫開港及び長州處置につき
て謀議する所あり

慶應三年
〔一新録自筆狀、探索書扣〕

去ル十七日青地源右衛門同道ニ而永井玄蕃頭様に罷出源右衛門より伺候儀者明日より國元に熊雄を差越申候管ニ付當時之形勢御内々奉伺寡君に申達候ハ屹と安心ニ相成可申候付頃日春岳様御登營之趣思召不被爲在候ハ、拜聽仕度旨願出候より玄蕃頭様より御咄之次第左之通

四侯登營之節ハ上様御一人ニ而御咄被爲在候ニ付翌日上様より伺取候次第者昨年御家督以來許多之難事打重今日迄被成御心配候趣逐一御咄被爲在候處四侯共ニ御内輪御心配之趣始而御承知ニ相成皆々御歎息之御模様ニ而是迄之御疑念も相晴候御様子ニ相見候由依而上様より兵庫開港之儀ハ如何處置致し候而可然哉御尋被成候處四侯共ニ兵庫之儀ハ今日之形勢にてハ迎も開港ニ而無御座而ハ御咄問敷と一同御返答有之伊豫守様より開港者固より開港ニ而宜敷御座候得共此節兵庫之通ニ而ハ次第順序相立不~~得~~次第順序ハ被成御立候様有御座度段言上御座候間上様より次第順序相立不申處ハ如何之處ニ而候哉御尋御座候付伊豫守様より諸藩に御尋も有之未タ其御答も不相濟中 朝廷に被仰立候段ハ乍恐如何之御譯ニ而被爲在候哉と言上ニ付上様より右者開港之是非其方共ニ爲可致相談昨冬使者を遣置候得共其節は上京不致異人ハ次第ニ切迫いたし於大阪直ニ談判いたし度段申出候付不得止 朝廷に奉伺候事ニ付今更致方も無之と被仰聞候ニ付春岳様空堂様大隅様ハ至極御尤之御意ニ而畢竟私共上京遲滞仕候處より右之通之御運ニ相成候段ハ重疊奉恐入候と御詫被成候由然處伊豫守様ハ矢張御承伏なく次第順序を不被得と而已被仰上候付上様ニも御取合も不被爲在其儘被差置候處空堂様より右ハ既往之事ニ而以後之御運宜敷無御座候而ハ御不都合ニ相成候付兵庫之儀も固より開港ニして一體之節制を被立交易之儀も皇國之費弊ニ相成不申候様被遊度段言上御座候付先兵庫之儀ハ夫ニ而相濟大

概御議定之由御座候上様より長州之一條者此方手元ニも失體有之長州ニ茂罪狀有之事故如何之處置いたし候而可然哉御尋被爲在候處春岳様より於長州ハ 國下暴動之大罪も有之候得共既ニ三百魁之首を切伏罪いたし候事故當時者差而罪狀無之候付 先帝崩御之譯を以大赦被 仰付候ハ、長州茂無事ニ相治り可申と言上御座候處上様より左様にてハ有之間敷於長州ハ當時少も罪狀無之申張居候事故大赦と申候而ハ有罪を差免候儀ニ相當り候故夫ニ而ハ長州ハ承伏いたす間敷外ニ條理相立候様處置可致と被 仰聞候處大隅守様より至極御尤ニ而大赦之名義ニ而ハ長州ハ御受申上問敷候間外ニ條理相立候御處置可然と言上御座候由右之次第ニ而長州御處置之儀ハ御決議之場ニ者至兼候由其中御酒頂戴共相始暫御酒宴御座候而御退座ニ相成其節四侯御咄ニ今日ハ閣老始御列席ニ而御召出と相心得居候處按外之事ニ而上様御登人ニ而右之通り之御咄實ニ感服之至 昔以來許多之御心配被爲在今日之御運ニ相成候事故御五ニおいても公武之間に屹と忠節を盡以後之御運重疊御 盡力仕度付而ハ篤ト御咄合仕候而御請可申上尤此節閣老迄御請可仕若上様御召出も御座候ハ、直ニ御請可申上と御相談御座候由春岳様空堂様御一同ニ今通之御運ニ被成候へハ聊申分も無御座此上ハ一同歸國仕候而國許にて以後之御模様可奉伺と御咄爲有之由御座候右御咄畢而永井様御沙汰ニ此節者春岳様空堂様御兩人ハ餘程天下之爲を被思差はまり盡力被致隅州宇和島に之處ニ者心配致し程能調和有之候故大ニ都合宜敷最早左程六ヶ敷事茂有之間敷候惣體隅州ハ論說等有之人ニ而も無之實は良人ニ而有之様相見申候得共臣下ニ權を執候族有之由ニ而全く是より事を生候由氣毒之事と御咄御座候事 探索書控には是より以下の文なく而して最後の日附に卯五書の時に書加へしものならん

一去ル十八日土州屋舖に春岳様伊豫守様大隅守様御參會ニ而御請之御咄合御座候由其節大隅守様御咄ニ 朝廷に被得御人候様御座候ハ、如何ニも盡力可致候得共今通ニ而ハ迎も 朝廷も共ニ天下之事を治候儀ハ六ヶ敷此上ハ幕府を輔佐いたし太平と致度と御相談御座候由尤其席御相談者委細之儀者相分不申候得共翌十九日御揃ニ而御登營御座候由ニ付全く御咄合は調候儀と相見申候御登營者空堂様ハ御持病ニ而自然御缺席ニ相成敷も難計候事ニ御座候

卯五月

小 篠 勝 基

再拜

〔小笠原美濃日録〕

六月四日晴

朝花殿當直也○孤雲氏示告小倉藩臣在于熊本之人之書蓋與中津領地替地之談判小倉之人以如有慾心也○小篠熊雄探案生也五月十九日發京、而本日至、中房而聞其話、京地平穩、越薩土宇四侯、十四日調 將軍、無傍人、兵庫之件、決於開港、長防之處置、雖未決、有屬寬之意、越土盡力於幕府、薩四州不唯異說、此後豫不有變乎、云々、田中氏之狀小篠携來、松井氏携上 公子、

五月十四日我藩莊村助右衛門長崎より書を坂本彦左衛に贈り土佐藩坂本龍馬と談合の顛末を報し且つ其所見を陳ふ

〔尊攘録探索書〕

密啓

坂本良馬云薩長之際者近來彌以親敷五ニ相往來緩急相救候程之勢ニ成行申候薩長之交合し候時者恐くハ肥薩之御隣交ハ疎ニ成行候者是亦自然之勢ニ存申候と云僕云我輩者御熟知之通一介之書生ニして毫茂政事向之事ニ預り聞候者ニ無之候依之國論之次第ハ承知不仕候癸丑甲寅より年來御辱愛を蒙り候儀ニ付唯野生一己之所見を以御話合可申候昨年小倉出張之儀者朝命幕令を奉し無據出兵致候事ニ而惣督之存念者小倉參集之諸將と商議し小笠原壹州と論詰其上ニ而全軍を引揚國論を京師ニ持出し候覺悟ニ相聞候處不計茂因循を以數日之間押移途ニ長州と義戰を遂候時ニ成行申候なり然ニ豈謀哉小笠原暗ニ遁走致公戰茂殆と私闘之姿ニ成行依之途ニ全軍引揚候事ニ成行爲申趣ニ承候其後肥後長州と

の間風馬牛之勢ニ而勿論聲息可相通様も無之一日者一日よりも潤疎ニ罷成申候勿論勢不得止儀と者乍申最前肥後物頭共之志存貫徹不仕途ニ如此戰鬪ニ成行候儀は遺憾無涯存候事ニ御座候何卒貴兄御紹介を以桂輩に而會致異船炮撃の事より起り京師暴發其後長防孤守決戦小倉追々之取合當時之國論ニ至候迄其中ニ就而我輩不審之後々承り糺し見申度御紹介被下間敷哉併小倉一戰已後長防之橫暴如此之形勢ニ候得者他日之患難を恐れ弊邑より強而款を入候様ニ共相響候而者我輩死して猶餘罪有之候決而左様之國情ニ無之此段者能々御含被下度唯天下之事者是迄人情ニ揆り共公之道理ニ基き天理之公義ニ歸着致候外無之候必竟皇國并ニ邦家之爲合ニもと存込候鄙懷より起り候義ニ御座候段申向候事坂本云此儀至極御尤之儀ニ存申候此儀屹度相整可申存候然處此事ハ書生輩ニ而者難被行候我等馬關へ參り候時分御先容仕置可申候如斯事者書生輩之耳ニ渡候而者難被行且者重疊不宜候桂小五郎歟杉徳助兩人之間ニ申入候様可致候然處先時も申述候通紀州談判之一條此末如何成行可申哉萬一者彼輩に叩き被殺も可仕歟或者和歌山に差急き候時ニも成行可申哉も難計或ハ長防御三討之時ニ成行又者長州國亂ニ而も差起り候ハ、盡力も相整申間敷歟も難計左様之差障無之候ハ、良馬ニ於てハ御公論之件々重疊御同意ニ存候上者莊村より桂輩へ而會取組迄之處は何分ニも相働御爲合ニ相成候様周旋可致候との趣返答仕候事坂本旅舎へ八九人程罷越居候長州人之内短髪ニして醫生之様ニ相見へ候者深目豐下之人物至極疲衰候もの壹人始終隣室ニ座し居申候曾て高槻晋作寫眞之像を一覽致し候儀有之能々似寄候様ニ見受け申候多分者晋作ニ者有之間敷哉と存申候然し高槻者四月上旬頃病死之風聞港内ニ而も承り及申候事良馬云將軍御許容之上越前致賀へ開港場御免ニ相成ミニストル伏見より京師に出湖水ニ沿陸路致賀へ參候筈ニ而伏見迄罷越候薩州より 朝廷に内意押留申候左候而京師之警衛相願候賦薩州に被仰付候然處會津者從來京師之御守衛ニ御座候處別段薩へ被命候處ニ而會津頻りニ事六ヶ敷論出候間爲此關白殿下者御辭職ニ相成候段承及申候と云ミストル彦藏云近年大榭様を奉始閣老方頻りニ佛人御信用ニ相成當時甚以片乘之御模様也此一事ハ日本之御爲合極々不宜候僕度々公邊へ建言致且漂流記中相認候俗記中ニも其一斑を顯し置申候御覽可被下候然共此處ニ着眼之人物無之候將軍

家佛人之甘説ニ惑ひ頻りニ天下之疲弊ニ乘し金銀御借用ニ相成申候愚考ニ而者追付日本大分之土地往々佛人之領地と相成可申存候此事窃ニ爲君ニ今日發し候と云其地を問ふ彦藏云追付相分可申候夫迄者難申候申候而も其益最早無之候必竟洋人を信し過し候誤ニ御座候と云不取留言上ニ御座候得共先承り取り候丈申上候猶追而承り繕候様可仕奉存候一兩日已後良馬に再度面會申入此節者天草浮浪井ニ京地之議論承り届可申候良馬論に而必ず薩土論説之蘊奥も相分可申奉存候書餘者在後信奉言上候様可仕候恐惶謹言

五月十四日

莊村助右衛門

坂本彦兵衛様

匆忙相認草稿之儘奉入貴覽候良馬様ニ應し馬關へ罷越し薩州と長州との交誼等此末之措置國內之企望等承り糺申度奉存候尤私儀當時探索生之場に而一己之暴發を以罷越し粉骨致し見申度奉存候此段被寄御存無之候ハ、曾而孤雲殿に御内意奉伺候儀御座候間御差出可被下候様奉希候以上

五月十七日日本藩京都留守居は正親町三條實愛長谷信篤議奏に任せられし旨を報告す

〔京都返達御用狀扣〕

御歡御使者

五月十四日

長谷三位様

同

同 十六日

正親町三條大納言様

右議 奏被仰出候段飛鳥井様書記塚本圖書よゝ知らせ來候間此段相達申候以上

五月十七日

御留守居中

村上彈助殿

五月十八日朝廷薩土越宇四藩の重臣を召して慰撫せらるゝ所あり

〔風説記〕

一 去月十八日於京都 御所御假建へ大藏大夫家來重役之者御呼出有之傳奏日野大納言殿御演達之上別紙之通御書付御渡有之且 叡慮を以御内々賜御酒肴難有奉存候此段御届申上候様被申付越候以上

松平越前守内

六月九日

大道寺喜三郎

別紙

國事之儀ニ付應 召早速登京 叡感不斜候内患外憂切迫之御時節候間滞在有之厚致盡力可奉安 叡慮 御沙汰之事

酒 三樽 鯉 十尾

〔探索書扣〕

塚本圖書方爲知越候事

大藏大輔様大隅守様容堂様伊豫守様等重臣五月十八日 御假建所參上之事

一 私共儀 御國事之儀ニ付奉蒙 勅命登京仕候段 叡感 思食内患外憂切迫之御時節候間滞在盡力仕可奉安 叡慮之旨

被 仰出深恐入奉畏候是又不存寄御酒三樽鯉十尾頂戴被 仰付難有仕合奉存候右御受御禮以使者申上候

右松平大藏大輔様御始跡御三軒方請書

一 兼而御三代様被 仰出候趣も有之候間京都御守衛之儀厚相心得非常之節速ニ人數差出御守衛向實事相立候様可存候

右之趣臆所候に被 仰出候由

慶應三年

四〇七

五月十八日藩世子護久上京の途に就く

〔文久三年亥正月、慶應四年辰三月迄〕
〔御書附井御觸達等之扣〕

今度若殿様御出京來ル十八日五半時之御供揃ニ而被遊御發駕豊後路御通行佐賀關より萬里丸に被爲召被遊御渡海旨被仰出候此段申達候條被奉承知支配方に茂可被達候尤代聞請込之面々者夫々可有通達候以上

五月八日

尾藤 金 左衛門
木村 男 吏

御目附 衆 中

慶應三年
〔機密間日記〕

五月十八日

一若殿様益御機嫌能今十八日九時四半前熊本被遊 御發駕候事
但御供等被 仰付之儀ハ 若殿様御用扣ニ記録有之候事（五月五日の條を參照せよ）

〔御國往來狀控〕

（以下數行原文を抄略して之を掲ぐ）

十八日

郡夷則出京を命せられ本日出發（世子上京に付隨行）

河添彌右衛門夷則一同出發

松田猪左衛門御供出京を命せらる（十三日達）

栗崎道坡夷則一同出發

五月十九日薩越宇の三藩主登營して將軍に謁し長防處置の事を先にして兵庫開港の事を後にすべきを進言せしも却て將軍に説破せらる

〔續再夢記事〕

同日（五月十九日）九ツ時出邸登營せらる此日島津殿伊達殿にも登營せられしか土州殿ハ御病氣にて御斷りありき

慶應三年
〔探索書扣〕

五月廿九日之早打ニ御國に申向濟

榎本守造殿に御留守居罷出承候次第書取

本ノマ、實ハ十九日ノ事也

五月廿日薩越宇之三侯猶又御登營兵庫開港之儀長防之御所置相濟候上ニ而御取扱ニ相成不申而之順序を得不申段被仰上候處 將軍様思召之長防之儀ハ日本國內之事件ニ而先之幕府と相對之儀共不申長防ニ罪あらハ可被罰又幕府ニ非分あらハ幕府斃を候得之夫ニ而相濟 朝廷に關係いたし候義ニ之無之候兵庫之既ニ期限切迫逆茂此上猶豫ハ難相成強而相拒候ハ、兵端を開可申然ニ攝海防禦之手當公邊諸藩共十分行届安心と申場ニ之至兼候付若戰爭ニ及候ハ、乍恐皇統ニ差障候様之儀茂可有之哉左まれ之無此上重大之事件ニ付重を先ニして輕を後ニするニ無之而之難相成段被仰聞處三侯共重疊御尤之御儀と御同意有之候由左候ハ、一刻茂參 内々し其段可申上三侯へ茂御同道可被爲在と被仰聞同廿三日 御參 内被爲在候然ニ薩ハ腰痛字之不快之申立ニ而參 付札 本文之通候處字和島老侯ハ御促ニよつて廿内無之越候計御參 内有之候由 三日之夜四時比御參 内有之候由

慶應 三 年

四〇九

一長防之御處置ハ彼茂實ニ無罪ト之難申又幕府ニ茂段々御失體之儀茂有之乍恐 朝廷ニ茂御屈兼之事無之共難申候付非分之非分ニ打出シ至公至平之筋ニ落合天下萬民是もらてハ外ニ御所置之筋ハ無之と致安心候處ニ決着之上御處置有之筈ニ付只今大小輕重之位箇様ト申目途ハ相立居不之段榎木殿被仰問候由右之通候事

五月廿日津藩主藤堂高猷兵庫開港詰問に奉答す

〔風説記〕

藤堂侯建白

兵庫開港之儀之既ニ一昨年十月三港勅許之節被止候處此度大樹右期限ニ至リ御沙汰之趣外國人に申渡候而之忽互解ニ及ヒ平穩之御趣意も水泡ニ可相歸強而施行有之候而之彼我之義理曲直矛盾ニ相成遂ニ皇國之御浮沈も相拘可申段建言在之處難被及御沙汰趣被仰出候ニ付再應前議譯柄我町寧反覆建言在之候ニ付右之利害得失如何存込候哉奉蒙御垂問候段謹而承知仕就而之大樹建言茂數回熟談仕候處猶事理不得止候様之儀ニも相見候得共彼地之開港被止候而方間も無之期限ト之乍申異人之乞ニ御隨ヒ被遊候段被爲惱 假慮候御儀乍恐御尤至極奉存候儀内接近之兵庫港之事故御開無之候之異人茂儀服仕右港に近付不申神算妙謨被爲在候ハ、其趣大樹に聖諭被爲在候而可然御儀ト奉存候得共若又其上之御見据も不被爲在候事ニ御座候得之甚以差越候義ニ御座候得共方今諸蠻之情密々探論有之儀緊要歟ト奉存候大樹之先頃於浪花城内親敷夷人に應接も有之候得共傍觀之者共精粗相違も可有御座且於本國諸蠻船幅濶之地ト申之莫若崎陽ニ奉存候肥前嶺而薩摩等之所謂足踐其境而目擊其事共可申土地柄右藩ト申上候通り見込等大樹ト建言ト御照察被爲在候ハ、大抵御標準者被爲附可申儀ト奉存候重々奉蒙御垂問候處私儀淺見寡聞之上兼而申上右之通り宿願依然思慮仕候得之肩背に凝結仕何分心底ニ任不申加之封内之中國之儀ニ御座候得之於夷情實以爾然之次第然ルニ如此重大之事件を彼

是憶斷ニ而構議論申上候而之御取惑之一端ニ茂相成候事ニ而重々恐多事ニ付前文之儀迄心附候間奉申上候御義ニ御座候以上

五月廿日

藤堂和泉守高猷

五月廿一日閣老小笠原長行外國事務總裁に任せらる

〔鶴崎長崎返達御用狀扣〕

慶應二年正月同三、四年
慶應三年七月廿三日在長崎宮村より

一於當所御達ニ相成候御書付寫御當番方筑前開役ト以廻狀通達有之候間右寫一通差進申候右之段申達候恐々謹言

以手紙致啓達候其御許様彌御安泰被成御座佐渡守様珍重思召候然者御同氏壹岐守様儀於京都五月廿一日外國事務惣裁被蒙仰難有仕合思召候此段爲御知貴所様迄宜得貴意旨被仰付越如此御座候以上

七月

渡邊多門

宮村庄之丞様

五月廿二日一條家より壽榮君女御入内内定の由を我藩に内報あり

〔御國京大坂返達御用狀控〕

慶應三年正月
六月廿六日

河口
村上
よ(江戸へ)

慶應三年

一條様ニ而末君様御儀 女御御入 内御内沙汰被 仰出候段別紙之通内々御知セ来
御内々貴所様限り御咄申上度故左府公姫君 壽榮君様御事 女御御入 内々被 仰出候哉ニ内々 御沙汰も有之候付
甚取込居罷在候尤来月下旬比御目見を被 仰出候哉ニ存候併極御内々之儀ニ付御他言被下間敷候御内々御咄申上度
早々以上

五月廿二日

莊 林 彈 正

五月廿三日將軍慶喜參内して長州處置兵庫開港の兩件を奉伺す朝議紛々として決せず翌夜二更
に及び將軍漸く歸營することを得たり

〔一〕新録自筆狀

五月廿九日御國に之早打ニ申向濟

聞 取

一當月廿三日大樹公長州兵庫之兩條御伺として御參 内御座候處翌廿四日夜四ツ比還御前日御參 内之御方様ニ之攝政
様常陸宮様尹宮様近衛様御父子一條様鷹司様九條様其外傳議御役々御揃ニ而御座候由此度之大樹公薩越字和島之三侯
御一同之旨ニ御座候處三侯共ニ御病氣御申立ニ候得共春嶽侯七ツ過敷ニ御參内字和島老侯之再三御促ニ而夜八ツ過是
又御同様ニ而御座候得共隅州之達ニ御辭ニ相成候故小松帶刀御呼出ニ相成原監察を應接有之候由ニ御座候扱朝廷御評
議之大意之大樹公が長州之猶再討仕可申哉將寛大之所置ニ可致哉并兵庫港之儀 朝議奉伺何レニも至急ニ取掛り申度
との事ニ御座候處 朝議も區々ニて近衛様御父子ハ薩州論ニて攝政様甚御當惑被爲成候處鷹司様頻ニ近衛様之御論御
拆被成尹宮様之御双方之御議論御取捨被成格別之御論も無之由ニ候得共大概廿三日深更迄ニ之被仰出候兩條御稿も出
來仕候哉ニ奉伺候得共未々御參 内無之御方様も御座候故御決議ニ至兼廿四日午時比有柄川宮様御參 内續て堂上方

無殘御參 内又々御議論沸騰いたし中ニも大原公 先帝之微慮御申立ニ相成兵庫不可開之論尤甚敷有之候故大樹公が
勿論尊奉いたし可成開不申候様致度あるし兵端を開焦土と相成候とも開不申方可然哉又之暫く相忍び國威を張之策を
建候之如何ニ御座候哉當時之形勢開不申候而皇國を汚し不申の御目適御座候哉と御尋ニ相成候處有志之者と事と事と與ニ
いたし候ハ、決して可憂ニ之至り不申との事ニ御座候故有志之者と之浮浪休之者ニてハ固方有之間敷必可然大藩諸侯
ニて可有之乍不肖天下之政權御委任之將軍ニ御座候處別ニ有志之者と天下之事を被致候と之甚々不審ニ御座候此度四
侯上京いたし候も彼方之建白之十分 朝暮ニて取擧可申あるし施行之儀と 朝議を奉して幕府之任ニ御座候處返ノ、
も有志之者とも唱候之如何ナル藩ニ候哉と精々御問詰ニ相成候處大原公議論屈して其後之沈黙被致候由其外柳原公正
親町三條公を始議論盛ニ有之候處大樹公が一々御説得ニ相成候由將又大炊御門公始廿三公御連名ニて兵庫不可開之建
白差出ニ相成候處是又攝政様が當時之形勢行レ兼候譯を以御差返しニ相成候處猶又勘考いたし建言仕度明日迄御待被
成度と願出ニ相成候處最早御決議後ニて有之候哉又之無御構御一決ニ相成候哉廿四日夜四ツ比迄ニ大樹公御伺濟ニ相
成還御座候由ニ御座候右之次第ニ而廿三公之未々議論之屈し不申候故攝政様之猶御配慮可有御座との事ニ御座候
一堂上方御參 内之儀之攝政様御論ニ而御座候處尹宮様其外之御方様御不同意之由其譯之天下之大事御攝家も有之殊
ニ國事掛りも被建置候而朝議決し兼平公家迄も呼出候之餘り朝議を失し候仕方と申事ニ而御下りニ相成候由一説ニ之
宮様御攝家御列座被爲在候而之却而御都合悪しく有之候故態と右之御論ニて御退出とも承申候
一前文小松帶刀之原監察應接中屋敷に三度立返り隅州と談合いたし頻ニ議論をいたし候得とも監察が一稜も取擧不申故
甚々不平を鳴し遙ニ天下之爲を憂ひ上京いたし候詮も無之候と怨言を吐き退出いたし候由ニ御座候
右之間違候事も可有御座と奉察候聞取之儘相認申候以上

五月廿九日

櫻 田 惣 四 郎

此度幕府と薩越字和島之異論之此迄書上ヶ置候兵庫長州御所置之前後之論ニて薩等之三侯が長州御所置濟之上兵

慶 應 三 年

四一三

庫ニ御取掛りと申事ニ御座候得共大樹公容堂候之一圖ニ朝議を奉伺追々双方何レとなく内外順序を立手續次第ニ運
ひ付可申との論ニ御座候處薩方長州を先ニ致す之深意有之歟ニ被察候得共春嶽侯之御同論之儀土州方も殘念ニ存
當月廿五日ニ之容堂侯方春嶽侯へ字和島侯御招ニ相成屹度御相談之筋も爲有之山ニ御座候

右之土州生駒精次方内話承申候事

*付札 薩字ハ長州ハ少も罪ハ無之候故大膳父子共ニ復職被仰付度との論春岳公ハ御不同意之由ニ御座候事土州ハ同様也

〔時體探索書〕

慶應三年 (七月附津野田秋吉古閑山田連名報告書の内)

西 桂 坊

探 索 書

一去ル廿三日大樹公御参 内我意を逞し殿下を取入奸策佞辯を以 朝廷を輕蔑壓倒せる之狀態實ニ傍ニ無人ら如し公卿
縉紳之御方ニハ十分之一分其理一ツも不立可悲 朝廷御微力諸卿之御人物連茂當るべきニあらず終攝政殿下大樹公
御兩所之決議を以 勅書御下渡之事ニ及尤廿四日ニ大樹公之曰兵庫開港之事ニ付異論申立候者有之候ハ、一々可及演
説直ニ聞取可申旨被申候付誰につて大樹公ニむらひ申者無之候故大原前左衛門督殿被罷出段々至當之義被申述候得共
大樹公被申候ハ足下若キ日本記舊事記年代記様之義ニてハ當今之事少しも間ニ合不申杯愚弄被致何事申入候をも更
ニ耳ニも入不申候由扱 勅書之寫御決定之上夫々には被相示候ニ付國事掛り之御方々は勿論諸公卿御一統御不服御不平
各御役御免等之御願ニも可相成之處先ハ其儘御不興之儘御退出翌日議奏正親町三條殿柳原殿長谷殿各御病氣を以御引
入(下略)

五月廿三日越宇土薩の四藩主連署して長州處置兵庫開港の順序につき幕府に建議書を提出し其

反省を請ふ

〔續再夢記事〕

同日(五月廿)四ツ半時出邸板倉開老の許に至らせらる此時公(春)開老へ申入れしハ過日四藩登營之節長防の事ハ寛
大に所せらるへき趣意を朝廷へ仰上られ然る上朝廷より敷願書を差出す様にとの御沙汰あれハ幕府より藝藩へ其事を
達せらるへしさて長防の事已に藝州へ達せらるゝまでに運ひたる上再び御参内ありて兵庫開港の事を仰立らるへしと
の御相談に御同意申上しふり然るに昨夕大久保一藏來り大隅守再考せし由にて長防御所置寛大とハあれとも其寛大ハ
何程の寛大ふりや判然せず要するに今日ハ幕府に於て斷然反正是ありし次第を天下に示されすては人心の疑ひを解くに
足らざる事故大膳父子の官位を舊に復し削地の命を廢し毛利家の家督を長門へ仰出さるゝ等顯然寛大の實を擧行ハる
ゝ事に決し其旨を 朝廷へ仰立られ然る上速に 勅命を降さるゝに至らハ始めて寛大之御趣意ハ判然すへしさて寛大
の御趣意斯くまで判然せし後兵庫開港の事を仰立られハは定めて朝議ハ速ニ決定あるへけれとも萬一此場合に至りて
も尙朝議御波滯在らせらるゝ事あらんには四藩に於て如何様にも盡力すへきふり尤此事ハ字和島も同意の由申出たり
拙者に於ても素より同意の事なれハ何分にも只今申述たる順序にふさるゝ様いたしたしとの事ふりしか開老其御趣意
も一應ハ御尤ふれとも過日御登營の節仰立られし順序ハ誠に御至當の事にて上様にも深く御同意即今日ハ其順序を以
て仰立らるゝ筈ふり尤今日仰立らるへき御趣意も寛と聞との二字に外ふらず又長防の事降命ありし上引續兵庫の事を
仰立らるゝも長防兵庫並ひ行ハるゝも畢竟格別の相違あるにあらず官位復舊領地如故等ハ後日とふりても指支あらさ
るへけれハ今日之所ハ矢張寛大之御所置との御仰立らるゝふりと申されし故公再三開老の説を辯駁せられけれと到底
了解に至らず仍て携帶ありし四侯連署之建議書を出し是ハ伊豫守の執筆なるが(中)御落手ありたしとて其書を差出さ
れたり

〔慶應元年八月 京都大坂長崎探索書〕

幕府に建白

天下之大政之公明正大之至理を盡し時世的當内外緩急之辨を明し御施行無御座候而之難被行儀勿論にて全弊不可救之今日ニ至り候根由を推窮仕候得之乍憚幕府年來之御失體を醸出候内殊ニ防長再討之御一舉より物議沸騰天下離叛之妾相及候次第ニ御座候依之明白至當之筋を以防長御所置可爲急務兵庫開港防長事件之大ニ寬急先後之順序有之候段談合之上屢建言仕候儀ニ而之篤退考仕候處右區別を以曲直至否之分被爲立御反正之御實跡顯ると不顯とニ相拘り候事ニ付虚心を以御反察被爲在候様奉願候二件

朝廷可被令奏拜承仕候得とも

皇國御安危ニ關係仕候ニ付是非至公至大之道を以私權を被拔治久之大策被爲立候様有御座度重大之事柄難默止再考之趣言上仕候誠惶敬白

五月廿三日

松平大藏大輔
伊達伊豫守
松平容堂
島津大隅守

五月廿四日防長寬典の勅諭及び兵庫開港の勅許あり

〔時體探索書〕

（七月附津野田秋吉古閑山田連名報告書の内）

卯五月廿三日幕府并越宇薩土之四藩の大事件言上之儀ニ付國事掛惣參 内容堂殿ハ兼而頭腦病ニ付不參之儀ニ候越薩

宇三藩同廿一日登營之節兼而申台茂有之是非參内 ニ可相成管大樹公御參 内國事惣惣御參 内之上嘉陽宮山階宮御參 内御斷ニ相成候得共押而被仰進候ニ付二方共御參 内ニ相成候幕更板倉稻葉等參 内ニ候得共前三藩俄ニ參 内御斷右之開港不可然旨兼而右三藩申上候得共此度大樹公攝政殿下に相廻り脅制可被致儀を被察候故之義ニ候由右御不參ニ付彼是混雜終ニは爲御使松平健三郎薩宇之兩邸に被行向候處御參 内及週々候故御使之度ニもおよひ候由薩邸に御使被差立候節既ニ夜ニ入門戸を鎖し不入故幕府計之御用ニ無之 天朝より之御沙汰有之候旨申入候處漸開門銃卒兩側ニ并立其中を通し候由隅州侯ニハ所勞ニ而參 内無之其前夕方ニ越前老侯參 内宇和島ニ之并刻參 内翌廿四日隅州侯爲名代小松帶刀 御所御仮建庇に被召出伊賀守殿玄蕃守殿を以被仰渡有之仍而帶刀歸邸往復三度ニおよひ候由其後夕刻ニ廻狀を以公卿方惣參 内開港御許容可被遊候ニ付異論無之哉御尋問ニ付各存慮書取候内攝政殿下大樹公御兩所ニ而御決議 勅書御下ケ渡ニ相成候右御文中此度上京之四藩同意ト之御文而之事實相違之儀有之候哉扱大樹公ニ之 勅書御頂戴之上即刻御退出夜四時頃ニ相成國事掛御一統其外共御不服御不平之儘御退出之由也

勅書

長防之儀昨年上京之諸藩當年上京之四藩等各寬大之處置可有 御沙汰言上於大樹も寬大之所置言上有之 朝廷同様被思召候間早々寬大之處置可被取計事

兵庫開港之事元來不容易殊 先帝被爲止置候得共大樹無余義時勢言上且諸藩建白之趣茂有之當節上京之四藩も同様申上候間誠ニ不得止御差許ニ相成候ニ付而之諸事急度取締相立可申事

一兵庫被停候事

一條約結改之事

右取消之事

外ニ一昨年十月三港御許容之節前二ヶ條大樹公之御請書此度攝政公御一存ニ而御差返ニ相成候事前開港勅書中當節上京之四藩同様申上候ト申事ハ大樹公自ら筆を被爲取草案御書入有之候由之事

五月廿四日在京本藩吏員村上彈助は閣老板倉勝靜の内見に供せし川上彦齋申出にかゝる長州形勢聞取書を在府吏員に送附す

〔慶應三年正月 御國京大坂返達御用狀控〕

五月廿四日村上より六月五日着（京都より江戸へ）

内啓於御國川上彦齋申出之趣聞取書御内々板倉伊賀守様に御留守居方懸御目候寫爲御存差進申候以上

書取

長州之儀初發御征伐之節未開兵ニ相成不申内萩より奇兵隊退治之高札を所々ニ相建候より國亂差起惣縣國中三ニ相分古來より之備組先鋒隊ト此度變動ニよつて取立候奇兵隊ト之戰爭ニ相成右之内先鋒隊中之者ニ而同隊之儀論ト合兼別ニ引分居候を當時干城隊ト唱右者先鋒隊奇兵隊トも附不申中央ニ大膳父子を守護し萩城ニ籠候由之處先鋒隊奇兵隊ト之戰爭都合十一戰ニ而先鋒隊打負巨魁之面々者多石州之方に出走いたし一國之權奇兵隊ニ歸候様相成其後同隊より再大膳父子を山口ニ迎取出走いたし候者共ハ石州方送返候付巨魁數輩者切腹流罪等被處其他者未刑斷等夫々相片付不申内御再討之事起其節公邊より被仰立候罪案於長州不落着之旨を以前文之三隊并岩國等ニ至迄一國一致之容ニ相成是ハ國內大ニ和熱いたし於南北戰爭ニおよひ候處此度休兵之後者猶又國情内端一變之機相見是迄追々之戰爭事變ニよつて國力甚費弊ニおよひ最早浪華迄出兵いたし候手當茂無之様相成此儘ニて戰爭而已を務候ハ、勝候而も費弊をかさね進退共ニ窮り候様罷成積り亡國之埒ニ至可申依之今日見識者第一國力を養候處ニ相定候へ共若此以後引續御再々討有之候ハ、勿論防戰之覺悟ニ而當時專海陸軍備を組立右ニ付而者尙又費弊ニ費弊を重ネ諸方ニ手を延候掠杯いたし候儀者

存懸も無之様子ニ相聞申候如此國情ニ相成候茂畢竟ハ長州之政府追々之國亂ニ而人物一變いたし當時者永井雅樂時代之もの多被擧用一國之政體者元就公之初年ニ派候而之事ニ而振興仕居候へ共老輩多候處ト今日ニ至り前日之非を覺内實者無事を求候處より當時政事座相動居候桂小五郎松原乙藏列之ものも前日トハ見識も相替居候様子ニ相聞候尤公邊和戰之御沙汰延引仕候ハ、諸隊列ハ前日之通山口より抑へ兼候様成行兩三年を不過事を破可申之必然ニ候得共當今之處ハ彼方諸方ニ手を出し侵掠いたし候儀者決而右之間敷併備中倉敷等之事ハ元長州國論之所致ニ而ハ無之激烈之徒山口之命を茂不相用より起り候儀ニ候へハ右體之儀者何時可有之哉も難計段申出候大概右之趣ニ相聞候得共吟味筋未々落着至りに兼候間追而ハ申候異同之儀も可有之事

五月廿五日議奏正親町三條實愛辭表を上る

〔慶應三年 時體探索書〕

（七月附津野田秋吉古閑山田連名報告書の内）

正親町三條殿辭表

實愛以微軀再度啓 天恩列顯要候段榮寵過盛深畏入候然處亦今般御役被仰付重々之感激仕候得共何分近年多病且陵土未乾變難繼起不容易時勢迫茂不堪其任立而固辭仕候處蒙懇々御撫諭不能遜辭御請申上候得共深憂惶惶仕候處昨廿四日兵庫開港之事件ニ付御爲方ト見込候義都而不策之次第ト相成惶悲仕候依之退役之義伏而奉願度存候復役後未及一句忽辭役奉願候段恐惶之至ニ候得共何卒依請被聞召候様偏ニ宜願存候也

五月廿五日

實

愛

日野大納言殿
葉室中納言殿

慶應三年

五月廿六日薩土宇越の四藩主連署して一昨廿四日の勅書中四藩も同様申上候云々の文言あるに對し伺書を上る

〔慶應丁卯年
一新録自筆狀〕

慶應三年六月朔日京地發之急脚同十一日着

〔前文は五月廿九日及六月朔日の條にあり〕

一兵庫開港長防御處置被仰出候ニ付而薩越等之四藩より朝廷に御伺之書付別番寫一通入御披見申候先達而四藩登營之節兵庫ハ御開長防者寛大之御處置と被仰立候由ニ相聞此度之被仰出右ニ反し候事ニ無之且兵庫長防御處置何を前何を後共御書面ニ差別も相見不申候ニ伺之主トスル處何をニ可有之歟此節上京之四藩茂同様申上候と有之御文言天下之耳目を憚候處より之儀ニ茂可有之哉些解兼候書面ニ相見何レニ薩ニ被押潰無據連名位之事ニも可有之哉と相考申候其外格別之儀も無之右之段迄申達候以上

付札
本文之通候處土州藩より極密櫻田惣四郎迄申聞候趣者兵庫開港御表發之節者朝幕御一致之處ニ而不被仰出候而者如何ナル混雜可有之哉も難計段四藩より朝廷に懇ニ建言いたし置候處此節上京之四藩も云々と有之何分不安意ニ付今一應可致建言段四藩話合同意之處を以薩方直様伺書差出跡達而此通ニ差出候との事ニ而見せ來咄合候趣とハ大ニ翻歸いたし容堂様ニも不怪御驚愕一御議論可有之處最早御發足ニ差臨候付其儘御歸國ニ相成候段申聞候由是程之間違夫ふりニ御歸國と申も御意中解兼候事ニ候得とも何様土藩も重疊不安意之由ニ而他言ハ堅無用之段申出候由之事

六月朔日
田中 典儀
郡 夷 則

帶刀 將監 孤雲 殿宛
美濃 男 吏 金左衛門

兵庫開港長御處置之二件者當時不容易内外之御大事と奉存候全体幕府防長再討之妄舉無名之師を動兵威を以壓倒可致心積候處全奏功ニ不至天下之騷亂を引出候次第故各藩人心離叛物議相起候時宜御座候就而之即今被爲立國基候急務者公明正大之御處置を以天下ニ不被爲臨候而者一圓治り不相付候付防長之儀者大膳大夫父子官位復舊平常之御沙汰相成幕府反正實跡相立候儀第一と相心得申候間判然明白實跡相顯候上天下人心始而安堵可仕候得之第二兵庫開港時務相當之御處置被爲在順序を得可申兼而勘考仕候先般蒙御下問候得共未一同勅問對答不仕内前文二件順序區別を以幕府に屢申出置候然ル處一昨廿四日可取計兵庫開港之儀と當節上京之四藩も同様申上候間誠ニ不被爲得止御差許ニ相成候云々御沙汰之御書附拜見仕實以意外之次第不堪愕驚仕合御座候從朝廷御沙汰之儀容易可奉申上筋ニ無之甚恐懼之至ニ奉存候得共皇國重大之事件事實相違之儀。御座候間不得止一應奉伺候以上

五月廿六日

越前 松平大藏大輔
島津 島津大岡守相
津中 伊達伊豫守將
和島 松平容堂將
宇和 島津少將
土佐 佐少將

〔一書に後の二人の順序轉倒す〕

〔慶應元年八月
京都大坂長崎探索書〕

一四藩廿五日柳原殿に參り此度防長之事件并兵庫開港之一件四藩も茂同様申上候とハ其御役方御申出ニ御座候哉と及詰問候處此方共之内ハ決而右様之儀ハ不申出大樹公より言上之義ニ而此方共ハ右様之義一切不拘と之儀ニ付早々四藩申合之上殿下ニ建白ニ相成候由ニ候事

慶應三年

〔慶應三年時體探索書〕

（七月附津野田秋吉古閑山田連名報告書中、西桂坊探索書の一節）
廿六日四藩侯が建白被差出候ニ付物議沸騰いたし御所中之動搖不一方各最寄々々之御集會有之何分ニも殿下之罪を糺候上幕府を糺候而兵庫開港取消ニも可及抔衆議紛々五六日前々晝夜御所邊騷擾之御容體ニ御座候事尤此度之義おろてハ諸公卿方も當時御滯京之四藩も全御同意ニ御座候事

五月廿六日閣老板倉勝靜藝藩重臣石井修理を召喚し囑するに長藩を説きて先つ彼より寛典の歎願をなさしめんことを以てす

〔諸雜御留守居録上〕

一五月廿四日長防寛典并兵庫開港之御布告有之同廿六日板閣老よ藝重役石井修理を被召御内諭有之候へとも此度防長寛典之御取計相成候ニ付而ハ同國は是迄之如ク歎願ニ而も有之候へハ御處置も下り安ク候間其邊盡力ニ盡し候様修理答ニ於同國ハ哀訴之道も絶果且一旦從天朝寛大可取計旨御沙汰之次第も有之候へハ今更歎願ニ盡し候様盡力萬々六ヶ敷旨を以御断申上候處一己之了簡を以御断申上候筋ニハ有之間敷候間國許に相運其上ニ而委細申聞候様被仰付候左様之儀候ハ、國許に運ヒ候而も無詮儀ニ候得とも御差圖之通可取計旨申達其儀世子御上京之上前文之通（六月七日附）表向御断ニ相成候事

一五月廿四日諸藩に御布告相成候長防寛典兵庫開港之御達是迄通り藝州之心得を以長州に通達有之候様被仰付候處只寛大と計り有之而ハ必彼が右寛大之御模様振り尋候ニ者相違無之其時ハ如何返答致し候様幕府に伺候處何様御不都合之儀候有之候哉御目付より三宅万太夫御呼出ニ而左之通被仰渡御目付榎本亨造

即刻壹人御旅館に御呼出ニ付罷出候處御目付松平大隅守殿御達一昨廿五日板倉侯が御渡相成候御書付四通之内毛利家に可被相達御書付二通ハ御取削相成候間御渡無之以前ニ心得早々拙宅迄可被差廻候右伊賀守殿被仰談候ニ付相達候且又昨夕伊賀守殿が修理殿に御談し之趣ハ精々盡力可致候へ共猶一際盡力有之候様修理殿へ相達可申旨伊賀守殿被申聞候間夫々奉長候旨申述引取申候

五月廿七日

三宅万太夫

〔慶應三年時體探索書〕

探索書

（前略）

一去ル廿七八日比閣老板倉伊賀守殿邸へ藝藩石井修理を被召呼即日罷出候處至極丁寧之事ニ而強而居間ニ通伊賀守殿一紙を差出し此度長州寛大之處置則 御所よ被仰出候通ニ候□寛大ニ於而其處置を申付候處先家老中が早々歎願尙差出候様取計有之度則此通と被申書付被差出候由之處石井修理申上候之長州歎願之上御處置ニ被爲及義一圓不得其義尤長州ニ於而之歎願等差出候義決而無之候右様之儀ハ安藝守ニ於而茂決而御受ハ不申上如何とふまハ所詮長州ニ承知可仕筋無之義ハ顯然ニ御座候只今御寛大之官位復舊閣下へ罷出候平常之通りと申義ニ候ハ、當然と奉存候間急度安藝守ニ於而も御請申上通達可仕歎願之義之御断申上候旨被申上候由伊賀守殿ニ於而段々被申聞候後ニ之御頼之御口上振ニ候由然共石井決而御請不申上候ニ付甚以御不興之休ニ而石井ハ退座右之義ニ付幕府之情實色々探索及候處長州寛大之處置を甘し藝之説得ニ而歎願書を出候ハ、幕府ニ於而存念通り所置被申渡此上三ヶ年も五ヶ年も御上京之事差延し可申策略ニ候由又 御所よ此度之 勅書ニ之寛大之處置可取計ニ而已御處置振之何とも不被仰出候然るを幕府處置ハ改而可被仰出候或ハ處置之品杯と相記し布告せし候事如何候哉猶今朝日六月三日之内藝之紀伊守殿御上京何を此

慶應三年

四二三

事ニ可及奉存候右承込候儘書記報知仕候間老石井應接大略右之通ニ御座候得共異同も可有之候哉
一細川澄之助殿五月廿九日御出京下説ニ之良之助殿之極内々ニ而被登候由噂先以前件之次第申上候ニ付而之此節 御所
御動搖之儀何ニ當職攝政殿下ニ之此儘御在職之有之間敷今幕府之願出候處之當攝政家而已當職斃候時之幕府立所無
之故此上如何成奸計相施可申哉緩急其變生し可申存候薄氷ニ臨ら如し

六月三日

右之新聞薩州方寫取申候ニ付御達仕候以上

西 桂 坊

七月

津野田儀左衛門
秋吉又助
古閑富次
山田己右衛門

五月廿七日山内容堂歸國の途につく

〔京都返達御用状扣〕

松平容堂様御暇被下山内兵之助殿殘被置候段飛鳥井様書記塚本圖書方知らせ來候間此段相達申候以上

五月廿六日

村・上 彈 助 殿

右一通

松 平 容 堂 様

右之昨廿七日京地御發途御歸國ニ相成申候以上

五月廿八日

御 右 筆 頭 衆 中

御 留 守 居 中

〔時體探索書〕

〔七月附津野田秋吉古閑山田連名報告書の内〕

一土州容堂侯先達而來御病氣ニ付去ル十九日御登營も無之外三侯而已御登營殊御願差出候付御願之通付紙を以御暇被
仰出候後忽御快廿六日御親類家に御廻勤御登營有之翌廿七日公然馬上一而京地御發途ニ相成候事虚實更相分不申候
事

〔全書〕

〔全斷、西桂坊探索書の一節〕

一容堂侯之御歸國實ニ不審千萬ニ付過日來色々苦心いたし探索を盡し候處漸今朝三日相分申候右ハ全幕府之大奸計ニ而
薩と容堂侯之中ニ離間策を入容堂侯是ニ欺まゝるゝ相違無之其策ハ容堂侯之薩之手先ニ使令せらるゝと申様之義ニ
有之候由素り同候ハ御思慮薄殊御短氣之御方故左茂可有

五月廿八日本藩豊後國預所江戸取扱郷村諸書物を日田郡代より引續の件終了す

〔江戸返達御用状扣〕

豊後國御預所江戸取扱郷村諸書物今廿八日御郡代窪田治部右衛門様御手附持參引渡候付請取置申候以上

五月廿八日

御 留 守 居 共

〔豊後國之内御預所並天草郡非常御警衛之儀永く御任被爲蒙仰候一件〕

一筆致啓上候向暑之砌御座候處彌御堅固被成御勤珍重奉存候然之去月廿八日郷村諸書物其外引渡相濟候趣御届書別紙寫之通江戸表に差立候間爲御見合丸寫差進申候其 御預所ニ不拘分之御差除御受取之趣御認入江戸表に御差立之方々存候勿論同所ニおゐて御打合いたし不都合之義無之様可取計旨江戸詰之者に申遣候間御地よりも御同様被仰進御座候様いし度候右可得御意旨治部右衛門申聞如是御座候恐惶謹言

六月十一日

佐藤金三郎
脇谷義郎
岡田三郎兵衛
志賀甚藏

小川次郎助様

豊後國吳崎新田作徳之内積石有高引渡御届書

一 米 六石九升五合
一 粟 貳拾五石

豊後國東郡吳崎新田作徳積石有高

右之私當分御預所豊後國東郡吳崎新田去ル亥年以來作徳之内爲積石取立候分書面之通右新田身元儲成者持藏に詰置候儘去月廿八日細川越中守御預所に引渡申候依之御届申上候以上

卯六月

窪田治部右衛門

御勘定所新開入用遣拂殘銀引渡候御届書

一 銀八貫八百壹匁九分八厘

右之私元當分御預所豊後國東郡吳崎新田開發普請入用遣拂殘銀書面之通常月廿八日細川越中守御預所に引渡申候依之御届申上候以上

卯五月

御勘定所

窪田治部右衛門印

豊後國村々廿分一御下穀并貯義倉穀共引渡御届書

一 粃貳石六斗壹升五合貳勺五才
一 粃貳百九拾四石貳斗六合六勺
一 大麥三百貳拾貳石七斗五升三合

豊後國直入郡村々

廿分一御下穀并貯義倉

是之私御代官所當分御預所之内細川越中守御預所に引渡候分

豊前國宇佐郡

一 粃九石四斗五合四勺五才
一 粃五百八拾八石八斗四升
一 大麥貳千貳百貳拾石六斗九升五勺

右同斷

是之私御代官所之内有馬中務大輔御預所に引渡候分

肥前國松浦郡村々

貯義并義倉穀

一 粃六百三拾八石壹斗九升

是ハ私當分御預所松平主殿頭御預所に引渡候分

右之豊後豊前肥前國私御代官所當分御預所之内細川越中守有馬中務大輔松平主殿頭御預所被 仰付候付書面之通去月廿八日諸書物一同夫々引渡申候依之御届申上候以上

卯六月

窪田治部右衛門

御勘定所

御林引渡候御届書

一 御林九拾壹ヶ所

豊後國

慶應三年

四二七

是之私御代官所當分御預所之内細川越中守御預所に引渡候分

一御林百貳拾八ヶ所

豊前國

是之私御代官所^有馬中務大輔御預所に引渡候分

一御林四拾壹ヶ所

肥前國

是之私當分御預所^有松平主殿頭御預所に引渡候分

右之私御代官所當分御預所之内細川越中守有馬中務大輔松平主殿頭御預所被仰付候付書面之通去月廿八日諸書物一同引渡申候依之御届申上候以上

卯六月

窪田治部右衛門印

御勘定所

鄉村諸書物引渡御届書

一高貳千九百八拾九石三斗貳升四合

豊後國直入郡

是之私御代官所之内細川越中守御預所に引渡候分

一高四千八百五石八斗七升三合六勺

同國國東郡

是之私當分御預所之内右同人御預所に引渡候分

一高貳万貳千九百九石貳斗七升三合貳勺

豊前國宇佐郡

但豊前國宇佐郡四日市村^{陣屋壹ヶ所}_{牢屋壹ヶ所}

是之私御代官所之内有馬中務大輔御預所に引渡候分

一高壹万五千貳百三拾三石四斗五升壹合

肥前國松浦郡

是之私當分御預所^有松平主殿頭御預所に引渡候分

右之私御代官所當分御預所豊後豊前肥前之内書面之通細川越中守有馬中務大輔松平主殿頭御預所被仰付候付諸書物陣屋牢屋共去月廿八日引渡申候尤鄉村之儀之御警衛筋之御趣意も有之候ニ付其以前引渡其段申上置候義ニ御座候依之御届申上候以上

卯六月

窪田治部右衛門

豊後
豊前國村々諸書物引渡候御届書
肥前

私御代官所當分御預所之内豊後豊前肥前國村々此度細川越中守有馬中務大輔松平主殿頭御預所被仰付鄉村諸書物去月廿八日夫々引渡申候依之御届申上候以上

卯六月

窪田治部右衛門印

助合穀拂代其外貸附金引渡候御届書

豊後
日向國助合穀拂代銀貸附

一高銀六拾六貫八百六匁壹厘之内
一銀七貫九百壹匁七分壹厘

豊後國助合穀
拂代銀貸附

住江村九郎兵衛差出銀貸附

一高銀百八拾三貫九拾目貳分壹厘

一銀拾貳貫八百貳拾九匁七分八厘

住江村九郎兵
衛差出銀貸附

小以銀貳拾貫七百三拾壹匁四分九厘

是之細川越中守御預所に引渡候分

慶應三年

豊後國助合穀拂代銀貸附

高銀貳百四拾七貫七百四拾貳匁七分七厘貳毛

一銀百貳拾四貫三百目八分壹厘三毛

高銀百八拾三貫九拾目貳分壹厘

一銀三拾六貫三百八拾八匁六分九厘

小以銀百六拾貫六百八拾九匁五分三毛

是之有馬中務大輔御預所に引渡候分

一金百三兩永百八拾壹文三分

肥前國松浦郡
大川野宿本陣并
渡船修復手當貸

是之松平主殿頭御預所に引渡候分

右之私元取扱助合穀拂代其外貸附金銀書面之通常月廿八日引渡申候依之御届申上候以上

卯六月

窪田治部右衛門印

御勘定所

〔全書〕

今度御預所被爲蒙 仰候窪田治部右衛門様御支配所村々御受取方として小川次郎助以下被差出先月廿八日郷村諸帳而類受取方相濟申候國人十五人御引渡有之候得共廻役才料等召連不申候付彼方に預ケ方及頼談置候間早々引取セ度依之才料ハ鶴崎在御家人之内出方同所同役に申談廻役一人相添豊前四日市に差越可申右御家人之足輕並之造用等追而被渡下候様此節御預所御受取ニ相成候段御鄰領之御知セ奉札案被渡下御達之趣承知仕候然處松平主殿頭様より速見郡大分

郡村々御受取濟之儀窪田治部右衛門様御知セ無御座而も可宜哉御内輪之事彼方ニ而者御承知ニも可有之候得共表立奉札を以被仰進儀ニ御座候ハ、文安急ニ被渡下候様有御座度奉存候右之段御達仕候以上

六月六日

飯田熊之助
小川次郎助

御郡方

御奉行衆中

猶々次郎助已下昨日高松表に到着熊之助相談仕答ニ御座候以上

五月某日我藩豊後國預所警衛の兵を派遣す

〔北岡文庫輯録〕

(警衛出兵人數從元治元年
至明治元年二月 阪本彦衛調の内)

五月

一豊後國預所爲警衛物頭三人足輕六十人同國別府へ出張

五月廿八日藩世子護久着京して壬生の藩邸に入る

〔江戸京都來狀扣〕

一筆致啓達候 太守様益御機嫌能被成御座御膳等御快可被 召上奉恐悅候將又 上々様益御安泰可被成御座恐悅奉存候若殿様益御機嫌能段々御旅行今廿八日伏見御發駕夕正八時當御陣屋に被遊 御着夫より二條關白様一條様日野大納言様板倉伊賀守様は御廻動被爲濟重疊奉恐悅候當御陣屋別條無之御着付而早打之御飛脚差立候付如是御座候恐々謹言

五月廿八日

四三二
田中典儀
郡夷則

御家老中宛
御中老宛

〔護久公依召御上京引續御目見御元服一件〕

傳奏

御月番

日野大納言様に

細川越中守養子細川澄之助儀當月十八日國許發足今廿八日京着仕候此段申上候様申付越置候以上

五月廿八日

細川越中守内
青地源右衛門

〔慶應三年正月
御國京大坂返達御用狀控〕

六月十日安田より 七月五日着 (熊本より江戸へ)

御飛脚立候間致啓建候

一若殿様益御機嫌能先月廿七日大坂御發駕淀川御通船伏見御着被遊御止宿同廿八日壬午御陣屋に被遊御着當月朔日御目見被仰付候間御旅館に被遊御出候様且又太守様ニ之御名代を以御禮被仰上候様御書付御渡茂有之候段御到來有之奉恐悦候

〔北岡文庫輯録〕

(終衛出兵人數從元治元年
至明治元年二月 阪本彦衛調の内)

五月

一護久儀詔邦名代トシテ當月廿八日上京通例供廻ノ外騎士ノ子弟二十五人引辛七月歸藩

五月廿八日松平大隅守星野豊後守竹内日向守小笠原伊勢守設樂岩次郎兵庫開港事務取扱を命ぜらる

〔風説記〕

於京都相達ス

大目付	松平大隅守
御勘定奉行並	星野豊後守
大坂町奉行	竹内日向守
御目付	小笠原伊勢守
設樂岩次郎	

右兵庫表開港之御用取扱候様可被致候事

五月廿八日

右六月七日持歸

五月廿九日松平春嶽淺井新九郎を引見して長防處置に關し本藩世子の盡力を懇通す

〔慶應丁卯年
一新録自筆狀〕

慶應三年六月朔日京地發之急脚 同十一日着

(六月朔日附郡田中より家老中老宛書)

扱又昨廿九日之夕淺井新九郎を御内使者として春嶽様に被差出候處直ニ被成御逢今度薩初之三藩と共に幕府に段々御建言之趣大略御採用ニ相成候得共長防御所置結末之處落合兼候子細之幕府者彼より御訖申上恭順之實跡相顯候上寛大之御處置可有之との儀ニ有之四藩者迎茂寛大之御處置有之上者此儘ニ而御處置有之候ハ、風波無相治り可申との趣中立候得とも寸斗貫兼候付此方様御同意ニ候ハ、右之趣被仰立度而目替り候ハ、通りも可宜と被仰聞候付昨今之御着京未タ一赫之様子も委ク御承知無之事ニ付得斗御勘考も可被爲在哉被仰聞候趣者奉畏具ニ可申上段御答申上候由然ルニ四藩に御同意ハ難被遊候付右ニ無拘至當之筋合を立程能御返答被爲在候方可然幕府に之御答振共御役々專致研究居申候

付札 本文御答振者追々御國議之筋を追時勢を參酌し幕ニも不依四藩ニも不別種之確論相立候得共未タ御答切ニハ相成不申追而之模様ニ應し枝葉之事等者少々損益も可有之哉ニ付御矢放相濟候上ニ而委細之儀可申達候事(五月廿六日の條に續く)

六月朔日將軍慶喜我藩世子護久を引見して長防處置兵庫開港のことにつきては越藩と協議して盡力すべき旨を諭示す

慶應丁卯年
〔一新録自筆狀〕

慶應三年六月朔日京地發之急脚 同十一日着

若殿様御目見被爲濟候事且兵庫開港長防御處置被仰出候等事
以別紙申達候若殿様益御機嫌能被遊御座今朝五時之御供揃ニ而被遊御登營御目見首尾能被爲濟畢而奥に被爲召猶御對顔板倉閣老侍座有之御酒とも御頂戴御懇之上意ニ而何茂被爲打解寛々御對話御手自御酌杯も被爲在候由至極之御

都合重疊奉恐悅候擬兵庫長防之事件等一ト通被仰聞又春嶽様之御間柄之事ニも有之諸事被仰合候様との儀も被仰聞候付上意之趣御敬承尤昨今御着京此許之時赫等未タ委敷不被遊御承知長防之國情も寤と分兼候付得斗御勘考も被爲在候上閣老迄御答可被仰上旨被仰上候由(以下は五月廿九日及同廿六日の條にあり)

六月朔日 田 中 典 儀
郡 夷 則

帶刀 將監 孤雲 殿宛
美濃 男吏 金左衛門

六月朔日攝政二條齊敬松平春嶽を召し曩日の建言に對して指令有無の件を諮ふ

〔續再夢記事〕

同日(六月朔日)九ツ半時出邸二條攝政殿の許に參候せらる殿下より御使を以參殿ある様にと仰遣はされし故ふり此時殿下仰せられしハ過日四藩より指出したる伺書ハ其儘預り置くへきや又ハ何とか指令すへきやとの事ふりしか公(春)答彼の伺書ハ素より御指令を願ふ趣意ふりしかし殿下の御都合によりて其まゝ御預り置とあるも大藏大輔よりハ別に異存あらず云々ふりき七ツ時過歸館せらる登京日記 被日記

慶應三年
〔時體探索書〕

(七月附津野田秋吉古閑山田連名報告書の内六月三日附西桂坊探索書の一節)

一昨日越前侯殿下に御參殿之上御逢有之殿下向て餘程十分ニ御申請有之候由或説ニ越侯頃日幕府之奸計ニ而何乎其策略ニかゝらんとして少しく耳を被傾候事も有之候由ニ候得共當今薩と相離を候而ハ同侯も不宜義有之候ニ付御一致

申傳も有之候事

六月二日長州處分實行の督促幕府に下る

〔京都返達御用狀扣〕

桑名様公用人の手入候書付寫

彌御安全珍重候御過日防長寛大所置早々可取計被 仰出候處其後如何ニ成候哉攝政殿大樹公に御尋被遊候間早々被仰上早々御返答伺度候以上

六月二日

雅 典
資 宗

松平越中守殿

右一通
右御斷書付寫

云々之趣大樹公に申入候處右に此程御沙汰之趣最早過く布告仕此上早々處置可取計之處過日於 禁中言上仕候通順序茂御座候儀ゆへ即今夫々手筈取懸居候間右相運ひ次第神速寛大之所置可及被存候尤防長所置之儀兼而御委任之事ニ付前件之都合相運ひ居候内此後外々之建白等ニ寄 御沙汰等被仰出候儀之無之儀と奉存候此段攝政殿に御申入被置候様致度旨大樹公被申候右御答旁云々

六月

六月四日幕府横濱の砲騎傳習兵を江戸に移す旨を達す

〔續徳川實記〕

四日(六)月、横須賀表傳習之騎兵砲兵引移令

一横濱表に罷在候傳習兵之内騎兵は來る十日砲兵は十一日江戸表屯所に引移候様可被致候尤雨天に候はゞ日送り之積可被心得候

右之通相達候ニ付隊伍組立候儘品川宿關門通行可致候間差支無之様勤番之向に可被達置候事

六月四日我藩世子護久松平春嶽を訪ひ長防處置に對する意見をのぶ

〔續再夢記事〕

四日夕七ツ時細川澄之助殿來邸せらる今夕は伊達殿ニも來邸あるへきなりしか御指圖ありて御斷なりき酒肴の御饗應ありて餘興に畫工中島華陽河北春谷をして揮毫せしめられ夜五ツ時過歸邸せられぬ此日木村東市正及び細川殿家頼淺井新九郎其他中根雪江酒井十之啄毛受鹿之介伊藤友四郎新宮涼介等陪席せり登京日記

〔自筆牒扣〕

(六月九日附田中典儀木村男吏より長岡帶刀以下宛書翰の一節)

長防御處置之儀ニ付而從上様御尋之趣且春嶽様方御相談筋茂有之御答振等段々致研究候次第之元來長防御寬典之儀之兼而被仰立置候趣茂有之此節四藩中立之大意と同様之事ニ候得共現實御施行之處ハ何程ニ可有之哉右之通ニ而以往違亂無之御目途屹ト相立 朝幕一致之御評決ニ御座候ハ、更ニ異存之筋之無御座候得共右申立通直様削封を被返官位復舊を茂一時ニ被仰付候ハ、長防眼前之治り之付可申候得共彼國情ニおって彌恭順ニ相運往々平穩ニ歸候目算之何分相立不申殊ニ上下之分茂有之事ニ付次第順序を不被得候而之御紀綱茂相立申間敷彼是篤ト御廟議を被爲盡度委細之儀之猶重役を以御役筋迄相伺且申上候儀も可有御座との趣を以御答之方ニ相決春嶽様ニ茂右之趣ニ而御目算無之儀を御同

意御周旋と申儀之何分難被遊段去ル四日御直答ニ相成御尤ニ御聞取之由(以下は六月六日の條に出つ)
六月五日幕府は本年十二月七日より兵庫開港江戸大坂開市の旨を公布し外人と貿易することを許す

〔御同席觸寫大目付様御廻狀寫扣〕

〔六月五日〕小笠原豊岐守渡

豊岐守殿渡

大目 付に

來ル十二月七日より兵庫開港江戸并大坂市中にも貿易之ため外國人居留ハムシ候答ニ付諸國之產物手廣ニ搬運勝手ニ可達商買もの也

右之趣御料私領寺社領共不洩様可觸知候

右之通可被相觸候

六月

六月六日我藩世子護久は閣老板倉勝靜を訪ひ郡夷則道家角左衛門は永井玄蕃頭に見わ共に長防處置につきて意見を陳ぶ

〔自筆牒扣〕

慶應三年
以別紙申達候長防御處置之儀ニ付而從上様御尋之趣且春嶽様御相談筋有之御答振等段々致研究候次第之云々(六月四日の條に出つるを以て此間の文を略す) 公邊に之御答之同六日板倉閣老に御出前文(六月四日の條を参照せよ) 之趣を以被仰上候處至極御尤ニ御聞上

ニ相成候由同晚夷則道家同道ニ而永井玄蕃頭様に參上之處打解御寛話ニ亘公邊之御目度等相伺從是茂見込之趣ハ申上候處何茂御同意筋ニ而早速上様に茂被仰上篤ト御評議ニ可相成との御事ニ御座候

付札
本文之趣ハ長防可討之罪ハ有之候得共是迄幕府御失勢之儀も不少於 天朝茂御不行届之儀無之とハ難申根元長防會王攘夷を首唱いたし其末段々行違之儀も出來終ニ過激ニ馳今日之形勢ニ立至候付而之 朝幕共御自反御自責之譯ニ而其再征之御取止先削封を被返下彌以恭順を盡其實跡相顯候上ハ追而猶寛大之御處置茂可有之との趣を以重役之内被召呼候乎又ハ御役人様御發向ニ而被仰渡左候而彌以恭順の運ニ至候ハ、入京茂御差免官位復舊を茂可被仰付哉右之通順序を被追候ハ、頗御紀綱茂相立可申敷ト奉存候段私論之場を以申上候事

右之内小倉より敷願ニ相成居候監察御下向之一條茂此節好機會共可申傍ラ長防事件も御含早々其筋ニ相運候様御咄合可有之との儀茂被仰聞候備薩州初長防御處置を促候深意ハ難計候得共此儘極寛大之御處置ニ相成候ハ、彼之益勢を得忽上京地に致横行候様之儀有之間敷共難申誠ニ不容易事件萬一此度御處置を被失候而之天下之危急今日ニ相究可申右等懸念之趣且承込居候件々無伏藏申出御參考ニ供シ畢而假令此節寛大之御處置ニ亘候而茂幕府之御確定無之候而之御成功茂無覺束此上猶更兵力を被強候儀今日之御急務ニ可有之との趣申上候處此儀最肝要ニ被思召段被仰聞候

〔中略〕
一 御元服之儀明後十一日又之十五日之御目度ニ有之候由成丈十一日之方ニと周旋いたし居候事ニ御座候此節之御上京外向ニ而之大造之人數御引卒之唱も有之哉ニ而萬一薩ニ相抗シ候様之響ニ茂相成候而之却而 朝幕之御爲ニ宜ル間敷右御手敷等被濟候上ハ急速ニ御引揚之方可然と重疊致心配居申候近日之時體筆談ニ而之何分難盡小橋恒藏儀江戸方下り懸暫引留被置候を此節之御飛脚一同海上早打下路中之急ニ而今日此許差立候條着之上巨細之事情御聞取可被下候内外多事不能詳悉右迄勿々如是御座候以上

六月九日

田 中 典 儀
木 村 男 吏

長岡帶刀殿以下

六月七日藩世子護久井口呈助に防長處置に關する意見を含め京地の形勢報告の爲め下國せしむ

〔慶應丁卯年
一新録自筆狀〕

慶應三ノ六月七日京發井口呈助持參七月二日着自筆狀

井口呈助早打ニ而今日御國許に被差下候付寸緒を以得御意申候今度長防寛大之御處置可有之旨被仰出候付而者御國之儀一戰ニも及候末一統之人氣茂未タ居合兼居候内自然之物議沸騰も難計且長州方密使等被差越御依頼之儀可有之哉も難測今日之形勢ニ立至候而ハ活眼を被開御處置不被爲候而者後道御家之利害ニも關係可仕自然長州より倚頼之筋も有之候ハ、篤と御開取至當之筋ニ相運候様御世話被爲在度若右使節等相拒不都合之儀茂有之候而者難相成と若殿様重疊被遊御懸念此許一舛之事情等貫徹之爲態と井口を御差下ニ可相成との御沙汰ニ付御奉行杯にも申談則及其違申候且又於公邊寛典之御目算之相立候而茂長防之國情何程ニ可有之哉一應探索之爲下り懸小倉領へ立寄彼情實を茂御國に言上いたし候様申合候事ニ御座候委細之儀ハ同人より直ニ御開取可被下候先右之段迄早々申縮候已上

六月七日

田中儀
郡夷則

御家老當
御中老當

六月七日藝藩世子幕府に上書して寛典歎願に關し長藩說得の周旋を辭す

〔諸雜御留守居録上〕

今般長防御處置之儀ニ付從 御所被仰出候御儀も被爲在候由ニ而去月廿五日御達之趣御當地參着之上承知仕 御仁徳之程雀躍感戴仕候右ニ付而ハ前日家來共に纏々御内諭之趣具ニ傳承致候へ共一旦愁訴之道絶國情凝結致候上ハ今更及説諭候とも不行届而已ふらす却而御威徳を損し御不都合筋ニ落入折角 天幕之御趣意水泡ニ相歸し御爲不可然儀ニ付家來共右有舛申上候次第於拙者も同様奉存候乍慮外最前公邊御役之過日經歷之次第并同姓安藝守方不時申出置候事情等を以得し御反正徒御斷申上候儀ニ無之段をも御洞察被下此上神速ニ寛大之御實跡御裁斷被爲在候様御補翼有之度企望致候儀ニ御座候以上

六月七日

松平紀伊守

右御封書ニ而板倉閣老に被差出候事

六月九日幕府横濱陸軍傳習所を江戸に移す

〔御同席觸寫大目付様御廻狀寫扣〕

御同席觸寫

小笠原壹岐守殿御渡候御覺書寫壹通相達候間被得其意御同列中不殘様無遲滯早々可有通達候答之儀之先々從銘々不及挨拶各より黒川近江守方に可被申聞候以上

六月九日

大目付

松平大和守殿
佐竹右京大夫殿

右留守居

覺

慶應三年

四四一

此度當地に陸軍傳習御引移相成候付三兵爲修行途中隊伍を立品ニ寄教師同道ニ而當地近傍出行候儀も可有之候右之西洋之式法ニ寄頼無之刀鎗等をも携罷出候事ニ付此段爲心得向々ニ寄々可被達置候事

六月

六月十一日藩世子護久從四位下侍從に任し名を右京大夫喜延と改む

〔江戸京來狀扣〕

一筆致啓達候雖向暑之砌候 太守様以下例文 若殿様益御機嫌能成御座此度 御元服被 仰出候間今十一日五半時御登 營 太守様ニ度御禮被 仰上候間 御名代御差出相成候様昨日御達ニ付今朝正五時之御供揃ニ而 御登 營被遊候處於 御前御元服被 仰出 御一字御拜領以 上意從四位下侍從 御拜任 御盃御頂戴 御腰物御拜領御實名喜延公御名 右京大夫様ニ被遊御改 太守様御禮者 御名代阿部美作守様を以被 仰上諸事御首尾好被爲濟重疊奉恐悅候右之御儀付而早打之御飛脚差立候付如是御座候恐々謹言

六月十一日

現十三日立
同廿三日齋熊

田 中 典 儀
郡 夷 則

御 家 老 殿
御 中 老 殿

六月十三日長崎奉行徳永石見守浦上基督教徒の重なる者八十五人を捕へて之を櫻町の牢獄に投す

〔風説記〕

長崎來狀之内寫

六月十八日出七月五日着

右急速ニ付一紙を以申上候益御機嫌能恐悅奉存候然者切支丹一條ニ付何分取込罷在候ニ付何を后便萬機可奉伺候早々云々

六月十八日出帆

玉の浦ハ長崎の事也

玉 之 浦拜

江府總御一統様

尙々時候折角御厭可被成候當時實ニ浮雲之心地ニ罷在候切支丹外國之方此後如何成行候哉時宜ニ寄候ハ、不容易一
大事件出來も難計只々信心のミ其外種々諸家且英國戰爭一條も有之由ニ候得共未だ一見不仕一見致候ハ、早速可申
上候切支丹之方向卒ノ、鎮靜相成候様奉存候古今之未曾有之大事件也當節晝夜警衛少しも安心難成平穩のミ奉祈候
云々

別紙

卯六月十三日夜御召捕ニ相成候山里村浦上切支丹一條拔書

浦上一圓百姓共方今彼之切支丹宗旨之儀專傳習増而天子堂參詣ニも烈敷相成當時傳習夥敷其盛なる事岩石も打碎有
様且又我農行等も打捨晝夜宗旨のミ信行農行自然と疎ニ相成最早一千六百有餘ハ風聞之取沙汰依而難捨置一大事件ニ
付六月十三日夜二時頃大風雨を見込公事方掛安藤障之助谷澤勘四郎小岸利五郎定役且手附町司不殘其外乃武館劍館隊
下殘炮隊組差圖役草野庄三郎始不殘惣勢大凡百七十人益風雨盛ニ相成大橋落流し依之炮隊組之面々馬込脇道ハ浦手に
迫り此川に飛込無恙登人も不流渡川十人或之廿人を一組と定メ若又手向致し候者有之候ハ、切捨候旨指揮有之一
統刀を抜鑓鞘を合し手附共等々取圍ミ家々へ飛込打重而召捕又之戸を踏倒し一同聲を發して繩を懸床下より引出し召

慶應三年

四四三

捕も有之手附共之働言語ニ難盡也此夜召捕之人數七十三人女十二人都合八十五人也右召捕之最中北之方より凡四十八人何れも竹籠或者縛得物ノ取携へ既ニ打寄候折柄最前馬込より迫り来る炮隊組横合より顯出彼之集勢是を見て銃炮ニ而打立ち候而之不叶とや思ひけん四方八面へ散亂内四人召捕亂最中手附之者兩人行方不相分所々尋といへとも一圓不分翌十四日ニ至り漸々庄屋之裏ニ總有之一人之面休目カ耳へ廻迄被切候様子惡血衣及濃キ一人之腰居立出來不申一命ニ之別條無之手附之働キ深く感心夫カ炮隊半分劔鑓隊半分爲警衛殘し置其餘不殘引取第一番ニ安藤障之助谷澤勘四郎小岸利五郎引續キ召捕之人數八十五人左右に手附劔鑓方炮隊組引去り定役町司爲守衛罷越櫻町牢屋へ不殘押込炮隊組爲警衛牢屋取圍ノ役々引取候上右之通御届ニ相成以思召左之通

公事係リ

越後編 三反
金 貳千疋

安藤障之助
谷澤勘四郎
小岸利五郎
定役四人

同 貳反

手附頭取
手附惣中に

金子五百疋ツ、
紋付帷子一金千五百疋

炮隊組
乃武館

同 一金千疋ツ、

町司

西役所爲警衛炮隊組乃武館相詰

直様引返し詞役初一同浦上に罷越種々及應接候之處四百人余罷出候付其中ニ而頭取之人三人罷出暫時之間及應接候處

右三人申候之然者一同昨夜御召捕ニ相成居候人民と同様信行致候間同罪ニ御仕置奉願度依而速ニ御召捕被下候様言舌與ニ申立若又御召捕ニ相成不申候ハ、昨夜御召捕之一統不殘助命相成候様申立候ニ付公事方共申聞候ニ之夫々其方共心得違之儀申立一同好を以同罪ニ被處度之旨尤也併し右罪人共も未だ如何様之御所置ニ相成候哉且其方共申立候之大ニ相違致し居拙者共召捕候之種々調上之儀ニ付其方共之召捕ニ不及一同退散有之候様申達候處何れも歸退右ニ付安藤定役共參殿右之通御届ニ相成且鎮靜相成候得とも如何様之事件出來も難計候ニ付夫々御手當可然旨ニ付手當向致し居御評議最中注進有之候之昨夜御召捕之内壹人出奔致し候旨注進有之候

一夜八時頃ニ相成又々注進有之候之浦上人民共不容易企有之守衛難相成役々被打破上町邊より興善寺町に押移り其人數一向不相分市中之動搖大方不成老若男女等之駈寄夫より櫻町牢屋へ火を懸ケ奉行所へ押寄候之趣注進有之候ニ付急キ打手を向安藤初炮隊組且劔鎗方向何れも鑓鞘を外し紙ニ而是を卷差越鎧々連ニ着替夫々に鐵炮等を與へ嚴重ニ人數を揃へ相扣罷在候處未だ何等之沙汰も無之只々風聞のミ四時頃ニ及カ警衛之人惣引取右ニ而一ト先安藤櫻町牢屋何分手狭ニ而一夜ニ而出來相成候様被仰出候ニ付當港近村大丁召集所々に篝火燒キ擊劔之音實ニ震動目覺敷事件六時過出來相成申候一昨夜城ニ而ハ無之一夜半長サ八間余横中六間也

六月十五日幕府は前議奏廣橋胤保前傳奏野宮定功等復職の事を建白す

〔諸雜御留守居録上〕

朝廷に幕府を建白

先般遊野井中將始無様之説を主張

朝廷を致辭動候粗忽之罪を以朝典を被正其節關係之公卿何も一時ニ退役被仰付攝政殿ニも御辭職被仰立候次第就而ハ右之爲諒岡不逢候四卿速ニ復職被仰付候旨當然之御儀ニ有之然ルニ大關係之公卿は直ニ復職被仰付無罪之四卿ニ至候

慶應三年

四四五

而者其儘宥途ニ被濫今以御沙汰無之段如何之御次第ニ可有之哉不奉得其意候從來極機兩役之進退天下耳目之向背ニ相
拘り殊ニ方今多事之折柄一旦不可贖之要地ニ有之候處右以來久敷缺員ニ被打過加之諸藩士等依怙之私見を以 朝臣吹
嘘沙汰ニ被及候儀も有之趣傳聞いたし甚以無謂次第目 朝廷之御大躰を相損し其害不細儀ニ奉存候前件之形勢ニ立至
候儀も全御基本不立願ク御動搖被爲在候故之儀ニ而此上御因循被成候ハ、偏 朝權不立候間一日誣横ニ沈候四卿
速ニ復職被仰付後來無根之流言等相唱人心爲致愚惑候弊源を被絶候様有之度當今之急務此段難默止言上仕候何卒早々
御施行被成候様御評議之程希冀候已上

六月十五日

六月十五日日本藩郷兵創設につき在中寸志士籍の輩銃隊稽古に加はり精練すべき旨を達す

〔慶應三年
機密間日記〕

六月十五日

一郷兵御取起之儀付而在中寸志士席之面々に連筋付而御奉行に書付相渡候事

〔全書〕

御奉行に

在中寸志士席之面々重キ身分ニ被進置候付而之自然之節軍陣之御奉公相勤度との志願ハ申迄茂無之候處方今之時體御
國中一般之御軍備筋急速ニ相整不申候而之難相濟就而之郷兵御取起之儀追々及達候通ニ而士席以上之當代家族之無差
別其人柄次第追而者最寄々々之引廻或者大砲隊之類ニ茂編入可被 仰付候條差寄所々之銃隊稽古ニ相加一刻茂致熟練
候様精々可被相示候尤平日心懸之厚薄之御郡代より茂深心を附致見聞有折相達候様との儀茂可被申聞候已上

六月十五日

上ニ付札 本文之趣寸志御中小姓之面々にハ御郡代より相示候様可被達候

六月十七日閣老井上正直職を免せらる

〔續徳川實記〕

十七日(六)

一御役御免
溜詰格

右被仰付旨於御座間御二之間御入類兵部大輔列座美濃守申渡之(以下略)

井上河内守

六月十八日藩世子喜廷參内して龍顔を拜す

〔江戸京都來狀扣〕

一筆致啓達候雖甚暑之節候御平安例文 若殿様益御機嫌能成御座昨十八日巳刻 御參 内被遊候様被 仰出候段日
野大納言様より御留守居御呼出ニ而難掌近藤外記を以被仰渡候付同日正六半時之御供揃ニ而一ト先一條様被爲 入
御衣冠ニ 御召替之上 御參 内夕八半時 龍顔御拜無御滞被爲濟奉恐悅候隨而當御陣屋別條無之候御用有之早打御
飛脚差立候付如是御座候恐々謹言

六月十九日

田中儀典
郡夷則

御家老 惣連名
御中老

慶應三年

六月十九日藝藩世子松平紀伊守更に幕府に建白して長州寛典の實行速かならんことを請ふ

〔諸雜御留守居録上〕

藝州世子再度幕府に建白

長防御處置之儀人心向背之機天下治亂之所分ニ候ヘハ不憚忌諱毎々鄙見之趣建言仕候儀ニ御座候處今般從 御所可被處寛典被仰出候間天下感喜之至奉存候然上者速ニ御奉 勅之御沙汰可被爲在管ニ奉存候折柄彼方歎願云々之御内諭有之就而ハ書取を以中上置候次第も御座候ヘハ當然之御指圖も可被爲在且又企望罷在候得とも今以何之御沙汰も無御座此委ニ而御遷延ニ相成候而ハ折角 朝廷に御寛典被仰上候詮無之而已ふらす重キ 朝命御等閑被成置候委ニ相當何共奉恐入候元來斯る紛擾之時態ニ至候も畢竟於大義名分之上人心不服之處有之釀成仕候儀哉ニ推考仕候處尙亦前條之御次第ニ而彌以異論沸騰疑惑所積結局如何之御都合生し候哉と難量深案煩仕候將又大膳父子士民とも只管寛宥御沙汰渴望仕居候場合前以 朝廷之御沙汰既ニ一統に御布告ニ迄相成候上ハ定而傳承初ニ御仁德を感戴仕一日三秋御沙汰相待居可申奉存候篤ト御反察神速 朝旨御貫徹仕候様練々不堪至願候彼是之次第登營之上委悉申上度心得ニ御座候ヘ共生憎所勞ニ而只様及遲引危急之時態寸時も不忍傍觀義ニ付大略楮上を以申上候恐惶敬白

六月十九日

右辻將曹を差出候由

七月十四日寫

首

藤

六月廿二日松平春嶽我藩世子喜延の旅館に來訪す

〔續再夢紀事〕

廿二日夕八ッ時出邸細川右京太夫殿の許に到らせらる種々御響應の末細川殿の家臣淺井新九郎片山多門宮村平馬青地

源右衛門關繁兵衛等陪席し御餘興に畫工岸竹堂岡本元彦外ニ竹堂の門人竹谷等出席して揮毫し夜九ッ時歸邸せられたり登京日記

六月廿二日在京本藩吏河添彌右衛門石光敬助幕吏榎本亨造に就き西國郡代兵庫開港の事及び坂神の豪商を商社頭取に任命の件等に關する時事を談す

〔一新録自筆狀〕

慶應丁卯年

七月十三日夜着京都之官脚下廻ニ參候書取

六月廿二日夕七時比石光敬助同道榎本亨造様は參上夜五時過迄酒間御懇話之内樞要之儀御應接等之概略

兵庫御屋敷地御買入之一條付而石光敬助追々登京之子細ハ右御屋鋪地御買上之内談相整居候場所之内海岸之方四十間程敷公義御用地ニ御取込ニ相成候由ニ付敬助儀最前上京御役々咄合之上榎本様御留守居を言上仕候處右等之事件ハ都而加納次郎作申者引受取扱候事ニ付直ニ此者へ懸合候方可然との事ニ付敬助下坂右居住を尋參候處手代之者罷出次郎作儀之當時上京いたし居候間用向之儀不苦候ハ、咄聞せ候様申出候付御屋敷地之一件一通り申聞候處寸斗思ハ敷談判ニも運兼敬助之其儘引取候由然ルニ右次郎作申ハ以前次五郎申せし者ニ而御國之御用向ニも携種々煩敷儀も有之生質不宜人物ニ付ケ様之者を加候而之往々御爲ニ宜ル間敷何様公邊御役筋之手を經周旋いたし候方可然此節猶登京御役々談合御留守居同道敬助榎本様へ直ニ言上いたし候ハ、御同人見込之筋も可有之と相決候處御留守居之方ハ近日殊外繁劇ニ付彌右衛門同道罷出候方ニ相成前文之趣一通り申上候處右之御同僚設樂岩次郎様御懸り之事ニ付此方へ御談ニ可相成候間直ニ御同人に可及御懸合旨被仰聞候付難有御受申上候畢而豊後國御預所御所務一件付而彌右衛門申上候趣ハ公邊御多事之折柄只今ケ様左様申立候譯ニハ無御座候得共右御預所之儀窪田様最前御申聞之趣追而御引渡之節御郡代相伺候趣大ニ相違いたし候次第を始御警衛向諸入費都而自力を以取替候様ニ御座候而之往々難

遊之事情等申立追而之奉願筋も可有御座於公邊茂篤ト御参考も被成下度との趣申上候處尤ニ御聞上何様御所務之内方御出方之稜目等區別立不申而之相成間敷との事ニ而借縣令之事且日田天卿之事情之先般實地御見聞之次第等委細上様に建言いたし置候趣も有之縣令之からたハ追々御取扱之品も可有之且一躰之振合も當時之儘ニ而ハ相濟間敷窪田ハ輕卒之人物牧民之職掌ニならずとの儀も密ニ被仰聞候付今日之形勢ニ而ハ西國御郡代之儀ハ最緊要之御役前ト被考御人躰次第ニ九州一圓人心之向背も關係可仕誠ニ御大切之儀ト奉存上候段申上夫々御談話裏ニ入敬助方ハ產物取扱之御咄等申上彼是胸襟を被開御談話之内芋ハ百方之手段一ツも整兼全窮策ニ出候ものと相見英ニ入説不相替討幕論を唱兵庫開港も幕相手ニ之迎も行レ不申 朝廷ト直條約結直し候様おと專相唱候よし夫ハ借置宇和島ハ有名之人なら芋之大鼓持ニ相成候ハ有間敷事ニ而且藝ハ兵庫不可開之論を主張建言をもいたし候諸藩方右様斷然鎖港之建白迎ハ無之ニと御不平之御口氣よて御座候却説彌右衛門方申上候趣ハ兵庫開港之儀之兼而人氣ニ觸不容易大事件ニ御座候處近來大坂兵庫豪富之面々商社頭取等被命上之御趣意柄之敬承仕居候由ニ候へとも加納次郎作如キ奸商を御登用彼ら裁判を受候様ニ而之何方も甚不平を抱居候由同人ハ小笠原閣老之御氣入ニ而商法等之事御相談柱ニ相成居候由此者知仕御草創之御右様之人物を御任用萬一天下之人心を被失候様ニも成行候而ハ兼而薩之口實ニいたし居候通貿易之利ハ總而幕ニ被成御占候杯諸藩も注目種々之異論を生し可申之必然ニ而乍恐幕府之御不爲之申ニ不及忽天下安危之境とも相成可申誠以御大事之場合と奉存候段申上候處不怪御驚愕之躰ニ而次郎作事ハいゝ様と歎御工夫も可有之豈被殿之人心を被失候が所長ト被仰聞候付其御所長を此交ヒニ共被成御出候而ハ重疊可恐之至ニ御座候ト任御懇命不顧忌諱私論之儘を吐露仕候處餘程御心構ニ相成たる様ニ被伺結局幕府之御爲杞憂之餘右様之儀迄も申出失敬奉恐入候段御斷申上候處從來御依頼之御國柄聊ニ而も心付候儀之無伏藏申聞候様懇切ニ被仰聞候事

河添彌右衛門

六月廿四日賀陽宮土州藩士をして我藩世子の滞京に盡力せしめらる

〔京都自筆牒扣〕

六月廿五日早打仕出

以別紙申達候若殿様御發駕御内定之儀之先便申達候通ニ御而暇御願書茂被遊御差出 朝暮共御引留之御念慮不被爲在趣ニ御座候處於 朝廷一旦之表分御留無之候而之諸藩之釣合茂有之此儘直ニ御暇と申儀ニ之何分運兼候由依而今日表分御留之御沙汰被爲在中一日を置廿七日猶御暇御願被爲在候得之廿八日ニ之御暇可被 仰出御模様ニ御座候左候得之廿九日ニ御勤筋被爲濟來月朔日被遊御發駕御内定ニ御座候右ニ付而之御役々茂種々ニ心配茂いたし候得共攝政様方事を被爲分候而之御内意も有之最早被是致周旋候日合茂無之致方無御座候此節之御狂ト被爲在間敷專其用意いたし候事ニ御座候其外此許之近狀差而相替不申右之段爲可得御意如是御座候以上

六月廿五日

田中典儀
木村男吏

長岡帶刀殿

已下宛

下ニ付札

本文之通ニ候處昨日賀陽宮様方土州藩士御呼寄被仰聞之趣ニ之若殿様速ニ御歸國之御願立ニ相成居候由肥後引拂候ハ、薩州如何様之暴動ニ及可申茂難測候間今暫之處御滞京ニ相成度との趣當御屋敷に申入候様御沙汰有之候由ニ而既ニ容堂様ニ茂御病氣被仰立御歸國ニ茂相成候末此方様を御引留之儀之周旋難仕候得共前文御沙汰之趣之相傳置候段探索生迄申聞候由右之必定會桑方宮様に突込御引留申候ものと被考候得共 朝暮之御深意何分難奉計自然ハ朔日之御發駕御差障共被爲出來候而之萬般之御手都合ニ以係候事ニ付今夕直ニ淺井新九郎を宮様に被差出猶明早天より

慶應三年

四五二

道家角左衛門永井様に罷出朝飯後宮祿に參上委曲之事情具ニ申上候方可然と相決申候左候而之朔日之御發駕茂些不丈夫ニ付佐賀關より之人馬長く滯留致せ置候而之典繁之砲東目之困弊共相成可申と深キ思召之旨被爲在右人馬之
一ト先解放佐賀關御着之上人馬相揃候迄之同所に可被遊御滯座旨御内沙汰被爲在候付右之趣ハ委細鶴崎御郡代を初御國に之御奉行方申向候由ニ御座候

六月廿五日内大臣近衛忠房書を上り開港の事は國家の安危に關するか故に嚴重なる規則を設けて豫め後患を防かれたき旨を建白す

〔慶應三年正月上季 京都返達御用狀扣〕

近衛様建白書寫莊林彈正より差廻來申候

一開港之事不被得止事過日御差許ニ相成候得共此儘ニ而之行末進もノ安心之場合無之と恐敷候何卒永世不朽之良圖哉運シ王室之御安危ニ不相拘萬民之致安堵候様殿と規則相立候様尤殿度言上有之候様大樹四藩に被仰付度偏朝家之御爲幕府之爲候間宜奉願候事

右之甚恐入何共申上兼候得共與々も 皇國之御安危此秋と存候ニ付心痛後患之恐實ニ不少不願恐心付候儀言上候事

六月

忠

房

議 奏 中

開港之事

一於開港地里敷殿と極メ置夫を限りニ決而往反不相成自然押破り通行候節ハ必打留可申様尤大藩之内ニ藩計に被仰付隔年替しニ定メ置嚴重ニ警衛可仕様永世 王室之御安危不相拘萬民之致安堵候様被遊度尤奉始 神宮其他大社之向々は勿論御寺院 勅願所には立入候儀堅停止邪宗門堅停止之事

右之通規則相立候得之行末大患も有之間敷幾何卒右之通殿と大樹に被仰出候様奉願度候此余規則之廉々茂在之候得共肝要之所者先如此ニ候半敷愚考申上度宜敷言上可給候也

六月廿五日

忠

房

議 奏 中

六月廿五日我藩井口呈助長藩小田村素太郎と長州小郡に會見して長藩の恭順を勸告す

〔慶應三年 京都自筆牒控〕

六月廿五日長州於小郡驛井口呈助と小田村素太郎對話之趣會藩清水勘解由登京之上長防形勢直話之末呈助素太郎咄合密々書取見せ候付寫取

一應挨拶終り呈助云今度澄之助様御上京先月廿七日御着前薩大隅公越春嶽公土密堂公宇和島老公御登込ニ而御私邸ニ而數度御寄合其上都台三度迄御登營ニ而兵庫ハ開港尊藩御所置ハ重疊御寬典可仕段被仰立先月廿三日御參 内大樹公及諸藩御出席ニ而前文之趣ニ御決議 御所ニ而御徹夜翌廿四日晚迄御懸り諸事御取計相濟御藩之儀ニ付被掛置候京大坂伏見御高札茂同日ニ御取卸相成候尤開港寬典ハ四藩御同意ニ候得共先尊藩御所置有之次ニ兵庫開港と内外順序有之度將又御再征ハ無名妄擧ニ而削地御取捨御官位復舊此節一時ニ被取行度との儀ハ隅州主ニ成御建言密堂公御不同意春嶽公ハ中ニ立而不怪御配慮之由折節澄公子廿七日御出京弊藩カ一言御同意有之候得之一時ニ御慮置御決着ニ付御建白有之度との儀ニ候得共内外前後一時御官位復舊之儀何レ茂不安心ニ而殊ニ出京即下御建明ハ無之御勘考中ニ有之前條之次第急ニ寡君に中間屹と國論を茂凝候爲メ只今呈助國元に被差下候中途小倉領に立寄尊藩之御國情を茂致探索歸國候様家老カ之内沙汰茂有之生駒三浦兩人に致面會聞籍候得共十分御情實分兼候付不圖一己之存念を以右兩人に申談御當地致推參事ニ候薩州ニ之兼而尊藩御懇意之段承居尊藩之御情實篤と會得之上之御獻議とも相考候得共去年御征討御

不都合之後也。朝幕共御自反御自責ニ相成諸藩之高論ニ從ひ開港寬典之御沙汰ニ相決候處尊藩ニ之何茂。朝幕之御不
 條理ト申處を御押立ニ相成激然として勝氣ニ誇り。朝幕が御手を下され候上ニ無之候而之石倉東西之御人數御引舉
 被成間敷との御主意ニ候哉若シ左様之御國情ニ候ハ、御藩御身晴ハ十分被思召候得共以後。朝廷幕府ハ無キ物ト相
 成二千年來萬國ニ勝レル君臣上下之大義今日尊藩之爲ニ相棄り積り異人之奴隸と相成候義近ニ有之事ト誠ニ數敷次
 第二被存候澄之助ニ茂如斯不容易事件一己之了簡を以建白仕兼至急ニ越中守に申越候事ニ候一應倉藩ニおゐて探索仕
 候得共尊藩之御眞意相分兼候付一向私之了簡を以此邊之儀委細相伺罷歸候ハ、越中守了簡茂可有之國內格悟筋共相成
 可申との區々タル寸衷を以是迄罷出候事ニ御座候。

小田村答昨今京師表之形勢且弊藩に御立越御主意無御包被仰聞致太慶候薩藩之儀之内々往復無之ト之難申候へ共右等
 之次第謀合候儀迎之無之隅州京師御建議之趣弊藩國情を被酌合致候物と相考候於大膳父子之。朝幕之御爲最初
 必ふまら致周旋。報慮尊奉ニ家國を抛候覺悟ニ而罷在候處何故敷不計茂境町之一件ト相成彼ノ三臣茂實之悲歎之餘り
 主人之冤鬱を愁訴之爲推參致候處無味逆賊之罪ニ陥り申事候處大膳父子ハ聊恭順之道失不申江戸大坂屋敷御破却數百
 人之士民被召執官位御取揚等彼是御情無キ御處置而已候得共兎角恭順謹慎罷在御役人様方御詰問之節茂御返答振り一
 々御聞揚其上何之御沙汰茂無之御再討との念ハ無之候得共弊藩頑固之士民ハ誠ニ憤鬱ニ堪兼昨年之次第と成行弊藩ニ
 取候而茂誠ニ心外之至無是非次第ニ御座候。

呈助云御話之趣一々傳聞罷在候御趣意今更辨解仕候譯茂無之畢竟。朝廷幕府ニおゐて茂彼是御不都合而已有之御征討
 茂不行届之義深御自反御自責有之候儀ト相見に列藩ニおゐて茂昇平三百年之末萬事因循而已ニ押移今日之爲休ト相成
 候事ニ候得之解兵後弊藩茂不取敢御自反之儀致建言候事ニ而外夷狄之巨害を引受ふるら内地ニ事を生シ。皇國浮沈
 之度外ニ閑候様成行候而ハ是ニ過たる失策無之候得之上下一同自反自責之御運と相成候處獨り。朝幕ニ而已答を被歸
 於尊藩一切御落度無之候付。朝幕が先御手を不被下候而之石州小倉御出張之人數茂被引揚兼候と申候而之兵威を以

朝幕を被要候と申物ニ而君臣上下之分ニ於而如何御了簡被成候哉假令薩長又之弊藩ニ茂セよ志を天下ニ得候半ニ名分
 地を拂候而之何を以國家を御鎮撫可有之哉此度君用を聞是迄推參仕候義ハ此一言ニ有之何卒御亮察被下度奉存候。

小田村答誠ニ高論御尤ニ存候於手元篤斗勘考山口表に罷歸役々申談及御返答可申呈助云最前茂申述候通り此節ハ澄公
 子より至急之用向を以被差下一己之所存を以内々罷出候事ニ而前條一言御聞受被下候上ハ外ニ聊望候義茂無之國家未
 曾有之大事件一朝一夕御返答可相成儀ニ無御座候猶篤ト御勘考可被下候呈助儀ハ至急用向ニ付今晚直ニ乗船歸國致候
 段申向候處小田村頻ニ留候得共承引不致其中酒肴取出饗應有之夜八時歸宿致候其節小田村三浦を引留申候ニ是迄ニ
 而歸國ニ相成候而ハ餘り無味残念ニ候間是非今日ハ滯留致候様左候ハ、自身ニ之未明方山口に歸り役筋又ハ頭立候在
 山口之面々に明晩之様子申聞向國情之趣談合候筋茂可有之速而相止吳候様致相談候付如何様と歎申談明朝及返答可申
 段申向歸候由。

廿六日平明比彼の様子尋ニ人來候付如何答可申哉三浦が相談候付今朝之沙合茂惡敷夕潮見合出帆可仕夫迄猶豫致候段
 話合三浦自己が彼宿に參談合置候事。

小田村直ニ打立山口に歸り候由ニ而夕七時比小郡に來候由宿亭が申今日之當地於御茶屋饗應有之管候得共内々之義ニ
 而却而可致迷惑候付昨夜之所に乍難題出浮吳候様追付彼方が案内申越候付其心組致居候様申來候付承知之段及返答晚
 六ツ半比案内申來出浮。

小田村云昨夜京師之模様深切談話之趣山口に罷歸役々又々在山口頭立候者共に茂話聞候處重疊尤之儀ニ而役々之如何
 様と歎心配致度存候へ共國內餘多頑固之上民等斯迄存込候上ニ而中々說得等屆兼尤此節之御模様不日ニ國內ニ取傳候
 上之何方ニ茂高論感服ハムし末々より起り立御處置恭順之場ニ至間敷物ニ茂無之若左様之時宜ニ茂至候ハ、必小倉様
 に御引合尊藩に使者を差立相願候筋茂可有之左様之節之宜敷御取計頼入存候。

呈助答夜前茂毎度申述候通私寸衷御聞取さへ被下候得之外ニ聊願望之儀茂無之候處山口表御詰合御役々迄御相談被下

候段案外之義ニ而實望ニ過却而痛入申候御國內數千萬之御人數箇様迄御差入之上一介之書生口舌を以御國議を動候儀勿論可相成様茂無之其儀之被仰迄茂無之候處不肖之身分人數ニ御入斯迄心頭ニ被懸候御儀返々茂身ニ取面目之至ニ御座候何レ今晚ハ早々出帆ハムし自然御縁茂有之候ハ、重而拜顔之期茂可有之段致挨拶候處酒肴取出雜談相成候今晚其他少々論談ニ亘り候儀も有之候得共略。

右慶應卯七月十八日於壬生營寫之

六月廿七日朝廷我藩世子喜廷の上京を嘉して物を賜ひ且つ暫く滯京して力を國事に盡すへきことを命せらる

〔慶應二年六月 若殿様御用控〕

今日 朝廷に御名代被差出候處日野大納言様方別紙御書付一通被成御渡候間寫之則相違申候以上

六月廿七日

御 用 人 中

郡 夷 則 殿

田 中 典 儀 殿

猶以鯉十喉御酒三挺被遊 御拜領候此段茂相違申候以上

御書付寫

應 召登京 叡感不斜候國事多端之御時節候間暫滞在有之盡力可奉安 宸襟之旨

御沙汰候事

六月廿七日鍋島閑叟入京す

〔風 說 記〕

私儀最前御届仕候通先月十一日國許發足仕候末昨廿七日京都參着全廿八日傳奏日野大納言殿に奉伺 天氣候此段御届仕候以上

六月廿八日

松 平 閑 叟

七月九日出

六月廿九日一條壽榮君女御入内の儀を決せらる

〔慶應三年正月 御國京大坂返達御用狀控〕

七月八日 七月十二日夜半着 (京より江戸へ)

河口より

一一條左大將様御妹末君御方昨日 女御御治定被 仰出候付自今被稱 女御御方候由

七月朔日

六月廿九日藩世子喜廷眼疾の故を以て滯京の朝命を辭し賜暇國に下らんことを請ふ

〔慶應二年六月 若殿様御用控〕

日野大納言様に

私儀同姓越中守爲名代登京仕候處官位等何茂家格之通蒙御沙汰最早御用向言上之筋茂無御座候付御暇之儀去二十一日幕府迄内意願出候得共未御沙汰者無御座候處私儀一昨日被爲召所勞ニ付名代之者差出置候處恐多茂蒙 叡感御國事多端之御時節候間暫滞在盡力可奉安 宸襟之旨蒙御沙汰拜領物を茂被仰付冥加至極難有仕合奉存候右之即下猶奉願候儀者重疊奉恐入候得共當節御用向言上仕候程之儀茂無御座殊ニ年來之眼疾近日之炎氣且水土之變換彼是ニ而甚難滋仕候

付一日茂早下國仕專療養を加往々屹度御用相動候様仕度奉存候尤臨時之御用筋者兼而家老始之者共相詰居其上御警衛向付而者當時詰込之外備人數茂不日着京仕管御座候間何卒別段を以速ニ御暇賜候様御沙汰之程偏奉懇願候以上(本文申し七月四日賜暇の命ありたり)

六月二十九日

細川澄之助

板倉伊賀守様に

私儀同姓越中守爲名代上京仕候處不日御目見引續元服官位拜領物をも被仰付難有仕合奉存候最早御用向言上之筋茂無御座候付御暇之儀去二十一日奉願候處未何之御模様茂無御座内私儀一昨日從 朝廷被爲召所勞ニ付名代之者差出候處登京 寂感之旨被仰出御國事多端之御時節候間暫滞在盡力可奉安 宸襟之旨蒙御沙汰拜領物をも被仰付冥加至極難有仕合奉存候右之即下猶奉願候儀者重疊奉恐入候得共當節御用向言上仕候程之儀も無御座殊年來之眼疾近日之炎氣且水士之變換彼是ニ而其難遣仕候付一日茂早歸國仕專療養を加往々屹ト御用相動候様仕度尤臨時之御用筋者兼而家老始之者共相詰居其上御警衛向付而者當時詰込之外備人數も不日着京仕管御座候間別段を以速ニ御暇賜候様御沙汰之儀日野大納言殿迄願書今朝差出申候猶委細之事情者追々御内意申上候通ニ付何分可然様御沙汰相成候様幾重ニ茂奉願候以上

六月二十九日

細川澄之助

六月廿九日土藩寺村左膳賀陽宮邸に伺候し薩土兩藩の間に討幕の議論ありし事情を陳ふ

〔時體探索書〕

聞取

一昨廿九日土州御側御用人寺村左膳 尹宮様に參殿仕候而御内話申上候趣ニ之先頃容堂出京之節薩州との論説一躰之場ニ至り不申候而歸國仕候ニ付此度後藤庄藏を出京致させ同人薩邸に罷出島津隅州を始メ小松帶刀大久保市藏西郷吉

之助等同席ニ而容堂申含之次第論談ニ及候處猶又薩州討幕之議論と相成土州ニおひても必定同論之事と相心得此度上京仕候處案外之事ニ而最早此上之薩州一藩ニ而斷然と相決候と議論沸騰其夜ハ及徹夜引取猶又後藤罷出察討仕候ニ之一旦討幕之兵を起シ六十餘州之紛亂を醸し候ニ至不申之日適御座候哉當時各國を窺察いたし居候折柄全國一致ニして外患を禦候こそ第一 皇國之急務ニ之無御座候哉兼而薩藩ニ而公明正大之持論有之候處討幕之一條甚々得其意不申候處切迫ニ論破いたし候處薩州ニ而も討幕と相成候末國亂を開不申之見込固ヨリ無之隅州を始メ議論析る腹心を開内情を話候ニ之當時弊邸に長人潜伏いたし居候者頻ニ討幕を促シ今日ニ至り何分抑揚之致方無之あるし已後之屹度彼等を制止可申と返答いたし候ニ付猶後藤が長州御所置官位復舊之論是又順序を經不申の論と説破いたし遂ニ薩州之三人辭無之後藤ニ説得被致候由ニ而猶又翌日職集會此度之何之論説も無之酒宴專ニ爲有之趣之由左膳が至密ニ宮様に言上仕候由ニ御座候

一土州後藤庄藏猶徳大寺様に罷出説得仕候趣ニ之最早日本ニおひて外國と和親を結び候上之彼等御當地に入込候を無理否御嫌被成候譯ニ之至り中間敷まらし此儘ニて御許御座候而之皇國之御恥辱と相成可申候間鴻臚館ニ而も御設被成屹度彼等を御待被成候御土臺無御座候而之相成中間敷と言上仕候處徳大寺様も至極御同意ニ相成候由ニ御座候

一前條之通後藤が盡力いたし候ニ付寺村を始メ一ト先復命之爲至急ニ歸國いたし猶又引返し上京之筈御座候由右之

尹宮様方御内分御直話奉拜承候

一前條之次第ニ而薩州ニおひて之 閣下ニ暴動を發候患之無之哉之段 宮様方土州之見込御尋御座候處未々其儀之丈夫

ニ御決答之難申上と土州ニても未々安心之場ニ之至兼居候由ニ御座候

七月二日

櫻田惣四郎

七月朔日幕府閣老稻葉美濃守外四名を國內事務、會計、外國事務、陸軍、海軍の各總裁に任じ

事務を分掌せしむる旨を達す

〔御同席觸寫大目付様御廻狀寫扣〕

八月九日着之御飛脚ニ相達

御同席觸寫

稻葉美濃守殿御渡候御書付寫堂通相達候間被得其意御同列中不殘様無違滞早々可有通達候答之儀之先々從銘々不及
挨拶各より黒川近江守方に可被申聞候以上

七月朔日

大目付

松平大和守殿

佐竹右京大夫殿

右留守居

大目付に

御國內事務總裁

會計總裁

外國事務總裁

陸軍總裁

海軍總裁

右之通被

差出候様可被致候

右之通万石以上以下之面々に可被相觸候

美濃守 周防守 壹岐守 縫殿守 兵部大輔

右之通被 仰付候付而者向後月番之不相立其筋總裁ニ而取扱候得共諸向共身分ニ付諸願伺届等之御國內事務總裁に被

六月

七月四日藩世子喜延歸國の願を許さる

〔護久公依召御上京引續御目見御元服一件〕

一御願之通 朝廷より御暇被 仰出候事

七月四日傳奏日野大納言様より御呼出青地源右衛門參上之處 若殿様御事御所勞ニ付御願之通御暇被 仰出候段雜掌

山科筑前守を以左之通被 仰渡

今般御所勞ニ付御願之通御暇被 仰出候此段御達被申候

一朝廷より御暇被 仰出候付而 幕府より茂御書付御渡之事

七月五日板倉伊賀守様より御呼出ニ付御留守居代として池邊掾右衛門參上之處左之御書付御用人を以御渡有之 御請

御使者同人相勤候

ツマニ 細川右京大夫に

細川右京大夫に

御所より御暇被 仰出候間一先在所に罷越候様被仰出之

七月四日幕府江戸町奉行所を増して三ヶ所とし外國惣奉行並朝比奈昌廣をして町奉行を兼ねし

む

〔續徳川實記〕

四日(七)御役替

一町奉行兼帶

外國惣奉行並 朝比奈 甲斐守

慶應三年

四六一

右被 仰付旨於芙蓉間美濃守申渡也

〔慶應三年 時體探索書〕

（卯八月五日とあるもの、内）

一江戸町奉行所是迄南北貳ヶ所之處此度々三ヶ所ニ相成候御觸之寫外國奉行調役并朝比奈甲斐守殿町奉行兼帶ニ被仰付候
以下本ノ、

七月五日

七月五日江戸各地に於て外國人居留所運上所交易所等の設定及び江戸町奉行増員等の事を報する者あり

〔慶應三年 時體探索書〕

今般於江戸表ニ被仰出候異人居所芝高輪泉岳寺前接遇所芝ひし坂濟海寺芝伊皿子シンシャウ寺麻布古川大中寺麻

布古川善福寺小川町土手調練所神田橋外御除ヶ處當時普請中御上覽見張番所跡同上鐵炮洲此度被仰付候

鐵炮洲藝州様御濱屋敷御取拂ニ相成夫々北之方明石町十軒町迄川付南北へ入町東西へ壹町半御取拂ニ相成異國人に御

貨渡ニ相成今日々人家取崩ニ懸り候由本港町近邊之其儘稻荷橋南詰へ關門出來御運上所も出來此處交易所ニ相成候個

島南近比出洲出來御臺場ニ相成居候所取崩本船懸りニ相成候趣又靈岸島も望居候由

一江戸町奉行所是迄南北貳ヶ所之處此度々三ヶ所ニ相成候御觸之寫外國奉行調役並朝比奈甲斐守殿町奉行兼帶ニ被仰付候

七月五日

七月六日朝廷物を賜うて我藩世子喜延の勞を慰せらる是日喜延京師を發して歸國の途に就く

〔慶應二年六月 若殿様御用控〕

今朝飛鳥井中納言様御呼出ニ付志垣傳内罷出候處雜掌を以別紙之通被仰渡 御扇子箱御渡相成候以上
此段御達仕候以上

七月六日

池邊 棕右衛門
青地 源右衛門

郡 夷則殿

田 中 典儀殿

依 召早速登京大暑之砌大儀 思食依此 御品賜候

〔江戸京都來狀扣〕

一筆致啓上候、若殿様益御機嫌能去ル六日 朝廷より別紙之通 御沙汰を以御扇子一箱御拜領且同日四半時之御
供揃ニ而御當地被遊 御發駕重疊奉恐悅候其後段々可被遊 御旅行も奉存候將又當御陣屋別條無之候江戸より之御飛
脚着御國に差通候付如是御座候恐々謹言

七月十一日

田 中 典儀

御 家 老 殿

御 中 老 殿

〔故護久公御事蹟調〕

慶應三年

一漸く御歸國の御暇賜はりたれハ七月五日御參 内天機御伺あり夫より御登營將軍家に調せらましに新舶來の中折聯發銃一挺御頂戴あらせらる御歸邸後直ニ京都御發駕伏見より淀舟に召されたれとも早魃にて渴水の爲め翌朝漸く御着坂あらせらる少時の御休憩ニて直ニ端舟に召させられし風波悪しく夜半漸く天保山沖の御召艦凌雲丸ニ達せらる直ニ解纜西らせらる(下略) (高岡元眞提出)

七月九日三條實美等歸京速進の爲め筑藩小河伊兵衛薩藩大山格之助宰府を發し上京の途に就く

〔尊攘録五卿一件帳〕

慶應三ノ七月十一日宰府表之來札

從御許勘局御銀被差越候歸便を以錄上仕候三條殿列上京及遲延候付先般小林甚六郎殿於京師五藩に御問合之趣筑前爲知御座候間爰許談判決議之次第筑藩に頼託いたし同藩飛脚を以京師諸御同僚兼并青地源右衛門に此元方直ニ申越候趣先便得御意置候處其後筑藩政府ニおつて評議有之迎茂飛脚位ニてハ相成間敷依之類役小河伊兵衛各藩御留守居々々に申向之書簡を持參登京いたし候様被命申候折柄薩之大山格之助も京師諸重役登京申來候處右伊兵衛上京之儀手延ニ相成候而ハ不宜申處を以蒸氣船被差立候間格之助も便船相頼一昨九日宰府發程仕申候惣辦五卿方復官等之儀隅州侯御周旋有之其上ならてハ廻船無之杯巷説も御座候處右ハ一應御歸洛之上再度 御沙汰御座候方其際も相立且ハ却而順序を得可申何分宰府ハ兎角一時茂早御立離ニ相成候社天下之人心安易居合も可宜右之處精々格之助に茂盡力いたし候様及申談候處至極之同意ニ而三條殿御病氣も過半御平癒有之候へとも此末宰府之風土に御滯留御座候而之彌以不宜何を御生産之土地に御歸有之候ハ、不待瘵養御全快ニ赴可申との醫案薩之醫員前田杏齋相認候を格之助持越申候又於爰許之五卿方に罷出万一薩之船差支跡四藩最寄々被差出候船ニ而も御障無之哉相伺候處御預五藩之何も一樣ニ思召候付聊去嫌無之由御返答ニ御座候間孰之道ニ致せ此節ハ不遠相運候勢ニ相見申候將又薩々廻船延引付而ハ事情不

貫處がよても可有之歟表裏之姿ニ相見五卿方も疑惑相生居候へ共方今薩を離候而之外ニ依托之向も無之不得止形ハ益結託之趣ニ有之候との風説も御座候へ共意中之隱微何分確證ニ之難相成候左候得之薩之船一向見頁も付不申依之四藩被仰談最寄々御出繼有之候方早捌々推察仕候間其邊宜被仰述其段京師へ急飛を以被仰向何方をそ御迎船速ニ廻着いたし候様御座候ハ、御國迄ニ無之天下之大幸何事敷過之可申奉存候此段任序心付候儘不聞各様迄得御意申候付筋々宜被仰達可被下候以上

七月十一日

古 閑 富 次
秋 吉 又 助

機密間

根取業中

七月十二日薩兵多く東上するの風聞あり是日我藩人を薩領に派して其事情を探らしむ

〔慶應三年時體探索書〕

覺

島津三郎様於京地御不慮之儀有之右ニ付鹿兒島表々餘計之御人數被差登候哉之風評有之薩州表に罷越委敷承繕御達申上候様被仰付趣奉得其意候昨十二日出水表に罷越承候趣左ニ申上候

一出水郷土土屋五右衛門黒木丹羽兼而知音之者ニ付右兩人悴共今度被差立候御人數之内ニ付罷出委敷間候得共三郎様御儀如何之御儀と申儀相分不申御不例と申御達迄ニ而御座候段申間候出水々六拾人阿久根方四拾人去ル九日出立八人ニ夫壹人宛自勘届ニ而召連候郷土惣人數千五百人之由昨十二日鹿兒島勢揃之由ニ而京都方今一左右申來次第右人數重富領主島津豊後殿被召連蒸氣船方出帆之段申間候ニ付所々ニ而承候得共いつ方茂同様ニ而御座候

慶應三年

四六五

右之通承繕候ニ付覺書を以御達申上候以上

慶應三年七月十三日

袋村外間 庄 九 郎
屋 庄 一 之 允
高 橋 一 之 允

水保吉左衛門殿

上野惣右衛門殿

上野善右衛門殿

佐野亥一郎殿

七月十五日三條實美の使者森寺常徳太宰府の我藩旅宿を訪ひて答禮をのぶ

〔元治元年以後 五卿一件〕

慶應三年七月

一御客屋方御奉行中より左之通

三條様より御答禮として別紙御口上并御目録之通秋吉又助古閑富次が差越來候間御品添翰共差遣候間可有其御取計候以上

七月十八日

向々本文御品乘臺之儀御音信方ニ之御有合も可有之候間都合能御取計有之度存候以上

請取之則御品并御目録御口上書共各様迄御達仕候付筋々宜御取計可被下候

番士歩御小姓細田員五郎儀交代相濟當所出立いたし候付一翰録上仕候今十五日三條殿御使者元諸大夫森寺大和守拙

者共旅宿に相越御二品被爲進上段別紙御口上書之通申述候付尤乘臺有之候得共難いたし候ものニ而員五郎入組之器茂手細ニ御座候付不得止爰許に殘置候間臺無之而之相濟間敷候ハ、御許ニ而可然様御取計之儀是又相願申候此段得御意度如是御座候以上

七月十五日

古 閑 富 次
秋 吉 又 助

機密間

根取衆中

尙々御目六并御口上書入組置申候以上

御口上書

殘暑之節越中守様御始益御安泰被爲成御座候儀珍重被存候然者先般者爲御儀御目録之通被爲進御念被爲入候御口上之趣御懇情之段深忝被存候右ニ付目録之通乍菲薄聊御答禮之驗迄ニ被致進呈之候此段各様迄宜得御意旨被申附候以上

七月

御目録

御 一具

博多織 御袴地 一端

以上

七月十五日閣老板倉勝靜は英國士官ミットホール以下四人能州七尾より陸路大坂に赴くにつき別手組をして途中を警戒せしむべき旨を達す

〔慶應三年正月上季 京都返達御用狀扣〕

御頼御小人目付方差出候書付寫
七月十七日伊賀守殿御渡 御目付に

覺

英國士官ミットホール通辯官サトウ外附屬之もの壹人支那人壹人能州七尾港方攝州大坂表に陸地罷越候付途中爲警衛別手組出役十五人頭取壹人英人旅中に罷越附添相勤候様可被致候尤宿驛泊割別紙之通候間得其意急速出立候様可被中渡候尤委細之儀者御目付可被談候

右之通別手組頭取取締に相達候間可被得其意候事

別紙泊付扣略

七月十八日藩世子喜延能本に歸着す

〔慶應三年 機密間日記〕

七月十八日

一若殿様益御機嫌能今十八日四時過御花畑に御立寄夫方二丸御屋形に被爲入九時過被遊 御着候事

〔護久公依召御上京引續御目見御元服一件〕

一御國御着付而 公武に御届其外御知せ之事

若殿様七月七日朝六半時比大坂 御着即夕凌雲丸に被爲 召翌八日朝御出船同九日暮六時比佐賀關 御着岸之處御供

乘組萬里丸器械相損出船手間取御後を申上候付十日十一日同所 御滞留萬里丸着船ニ付十二日同所 御發駕鶴崎に一日 御滞留同十八日晝御機嫌能熊本被遊 御着候段御到來奉恐悅候事

七月十八日三條實美等歸洛の事につき關係五藩士京都の薩藩邸に會議す

〔尊攘錄五卿一件、時體探索書〕

薩州類役内田仲之助列より太宰府滞留五卿一條ニ付同藩より彼地に差越置候大山格之助儀過日致出京候付今十八日薩邸へ集會いたし吳候様此方様初兩筑肥前に廻狀を以て申來候付後藤彈助罷越候處各藩類役列席ニ而右格之助より中間候ニ者今日御集會相願候儀外之儀に而茂無之太宰府在留之五卿御歸京ニ相成候様との儀ハ當正月 公邊より被仰出置候通ニ付疾く其御運ひニ可相成三條實美公御所勞ニよつて是迄遲延ニ相成居然處先般長防寛大之御處置被 仰出根元同所より五卿も斯之次第ニ付長防御所置之品被 仰出候上御歸京ニ相成候方順序を得可申との趣大隅守存寄有之既ニ昨十七日自分儀原市之進殿へ罷越右之通ニ而者何程ニ可有之哉と相伺候處委細承知有之尤五卿一件ニ付而者小林甚六郎儀御用懸茂被 仰付置候事ニ付同人に其趣五藩連書ニ而も差出可然段中間有之候付不取敢今日御集會相願御四藩御存寄等無之候ハ、手敷いたし度と之事ニ付御話合之趣逐一承知素り自分限如何様共返答出來可致譯も無之歸邸之上其筋に申達候上明夕迄ニ及返答可中段一同相斷引取申候處各藩何方も御國通議之方ニ相決候段翌十九日廻章を以申來候事右之通御座候以上

七月

京都

御 留 守 居 中

下付札

本文五卿歸京一件肥筑之説之根元脱走有之候後謹愼殊勝之廉目相願候處より各藩周旋之末公邊ニ茂御開濟斯之通被仰出何そ長防御處置寛嚴ニ關係いたし候譯ニ無之且五卿ニ之素より歸京之儀重疊御渴望於諸藩之警衛之人數を損相

慶 應 三 年

四六九

待居候事ニ付一刻茂京師に護送いたし度存念ニ有之加之宰府表に在留未ク相成候丈ケ餘計之入費茂有之候處獨斷ニ
限り延滞申立ニ相成候次第何様子細共之有之間敷哉之嫌疑も有之隅州公之見込之何方も不同意之趣ニ相聞申候尤
筑前之前條之議論を立候而茂自然之宰府表に不測之患を引起候儀茂可有之歟との恐有之三藩之模様次第相心得可申
肥前之五卿歸京之遲速何卒大事ニ關係仕候儀之有之間敷當時京攝多事之砌ニ付何茂擬置薩意ニ任せ候方却而可然歟
との口氣ニ候事

七月十九日日本藩京都留守居は幕吏榎本享造に就き長州處置に對する薩土越宇四藩建白後の狀況
及び兵庫開港の内情等を得て之を報告す

〔京都自筆牒控〕

榎本殿に參候而長州御處置之儀四藩建白之末如何之御運ニ相成候哉至密相伺候處寛大之被 仰出之至極之御事ニ候
得共寛大ニ付而之次第順序茂有之名義不正候得之御處置振不被得至當四藩申立之通唯今之有姿ニ而官位共ニ復舊之持
ニ至候得之以後 天幕共何を以天下獨服之道相立可申哉方今閣下様ニ茂御登京併暫御所勞ニ候得共最早御快方ニ付明
日明後日までに之御登營茂可有之左候得之長州御所置前之儀等御談合持論茂御尋被成候筈ニ而御確論茂可有之且又尾
州老公ニ茂先日來御登京之筈之處御所勞ニより成瀬隼人正爲名代被差登幕府之御模様茂伺取兩三日歸復命有之候程之
事ニ而今日之形勢不日ニ御所置被 仰出候ト申様之御運之御見込無之既ニ四藩建白之書而之不日從攝政様四藩ニ御
差返之筈ニ御決定尤從 朝廷寛大之儀之被仰出候得共御所置品之儀ニ 幕府に御委任被成置候付何共不被爲在御沙汰
候旨被仰渡候筈之御手續之由就而之越土之處ハさしふる儀御承知無之候得共薩宇兩藩之堂上之内に手を替所を變種々
入説致候趣ニ茂相聞候間些細之事ニせよ右等承出候ハ、内々早々知らせ果候様との御頼談ニ候事
一前條御談之末今度英人能州七尾方陸路ハよし大坂表に罷越候筈之段之閣下共其役筋に御達ニ茂相成候通ニ付根元薩人

柴山要助并外登人何某於横濱英人に追々面會ハよし今度兵庫開港之儀之誠之 勅許ニ無之幕府方 朝廷を擁し奉り無
理開港ニ而諸藩ハ其根を知り十二七八之不同意ニ有之連茂追合之見込之更ニ無之是迄一として幕府之儀之信用可致筋
ニ平り兼不都合之事而已多殊ニ兵庫表開港ニ付而之刺客等茂有之趣ニ相聞不慮之災害究而引起可申夷人之爲ニ之勿論
我國之爲ニ茂不相成加之我國何國ニ共夷人陸路通行之不善筈之處彼是ト幕吏共申立相支候間長州寛大之所置相濟候
上兵力を以幕府を壓倒ハよし候上ふらて之眞之開港ニ之至り不申杯ト頻ニ入説ハよし現金を賄且通稱官サトウ共ニ之
向以莫大之賄賂を遣し遊所ニ伴候等之儀御探索相成候處證據茂有之候由右之模様を以御考候得之此節陸路通行之儀申
出候者ト相見候由且又浮浪杯を招寄手ニ付刺客ニ拵立候趣ニ茂組御聞込相成種々之策略を以幕府之御手續之儀出來候
茂難計仍而警衛茂十分被差遣大坂表ニ茂市中格別取締之儀御達ニ出候筈之由彼是ニ付尙又堂上之内ニ之沸騰茂可有之
貴藩ニ之格別之御依頼右等之趣御國許に御内々被仰達置候ハ、御心組ニ茂罷成可申且大坂御景敷に茂市中取締等之儀
ハ被仰置置候方可然との御内教ニ候事

七月十九日

京都 御留守居中

七月廿一日日本藩京都留守居は來年正月上中旬の間に今上御元服ある御治定の由を報告す

〔京都返達御用狀扣〕

天皇來年正月上中旬之内 御元服御治定之事
右被 仰出候旨於八景繪間代攝政殿兩列座飛鳥井中納言被申渡候右被 仰出ニ付一兩日中禁中准后等參賀之事議奏
被示候仍申入候
右之通山本掃部ト爲知來申候以上

七月廿一日

慶應三年

御留守居中 四七一

七月廿二日英國公使パークス大坂に入り長崎に於ける英艦水夫殺害のことにつき幕閣を詰る
〔防長回天史〕

〔慶應三年秋の大勢抄出〕

偶々英國軍艦水夫殺害の事長崎に起る嫌疑土州汽船横笛號船員に懸る英國公使之れを聞き大に怒り是月(七)二十二日大坂に入り幕閣を詰る要領を得ず乃ち曰く土州人肆に英人を殺害す今や幕府大藩に對し自ら正當の處斷を行ふこと能はず因て自から軍艦を率る直に土州に赴き以て問ふ所あらんとすと幕府大に驚く而も遂に如何ともすること能はず平山圖書頭以下幕吏數名をして英公使と共に土州に到り土藩を説き無謀の舉に出てざらしむるに決す

〔探索書扣〕

〔八月六日附櫻田惣四郎取抄出〕

先月板倉閣老土州英人との一條ニ付土州京詰重役由井伊内松井脩助之兩人大坂へ御召下ニ相成英人殺害之次第御尋ニ相成候得とも一向相分不申候右ニ付大小監察土州に之被差越前文土州重役兩人も早打ニ而歸國仕候由ニ御座候〔聞取の全文は八月六日の條に出つ〕

七月廿三日幕府更に外人に對し疎暴の舉動あるべからざる旨を達す

〔御同席觸寫大目付様御廻狀寫扣〕

大目付様御廻狀并御書付寫

稻葉美濃守殿御書付寫一通相達候間被得其意無違滯順達留より黒川近江守方に可被相返候以上

七月廿三日

大

日

付

細川 越中 守 殿

〔外八名略す〕

右留守居

大 目 付 に

外國人市中遊歩之節故もなく礮を打其外不法之儀仕掛候ものも有之候付是迄度々相觸置候趣も有之候付而者不法之儀等無之筈ニ候處兎角右觸面之趣をも忘却致し候哉今以礮を打又之惡口等および粗暴之舉動致し候ものも有之趣相聞以之外之事ニ候以後右休之もの有之候節不得止事情より外國人共必ス發炮及び若御國人之内不法之所業不及その迄そま玉ニ當り怪我等々々し候而之不容易儀ニ付決而右様之儀無之様町役人共より嚴敷可申渡候若取用ひ不申礮を打候もの有之候ハ、兼而相觸候通無用捨召捕其筋に可指出萬一見逃し又ハ等閑ニ致し置候ニおゐてハ其所役人等に茂急度答可申付候間其旨相心得末々ニ至迄心得違無之様嚴重可申付置候

右之趣町中に不洩様可被相觸候

右之通相觸候間末々小者等ニ至迄心得違無之様主人々々より急度可申付置旨万石以上以下之面々に不洩様可被相觸候

七月

七月廿四日將軍慶喜英佛兩國公使應接の爲め大坂に下る

〔續再夢記事〕

廿三日九ツ時出邸登營七ツ半時歸館せらる伊達殿にも御同様ふりきさて本日登營ありしに攝海へ外國船渡來せしため

板倉閣老及平山圖書頭俄ニ下坂し猶又明日ハ大樹公にも下坂せらるへしとて營中ハ殊の外ふる混雜の躰ありしか大樹公御對顔あるへき言ふれと其事にハ及はれかたしとて板倉面會せられたり(下略)

同日(廿四)大樹公大坂へ出發せらる英佛兩國の公使大坂に來りし故應接せらるゝ爲めあり

廿五日永井玄蕃頭の許へ中根雪江を遣はさる昨日永井より召喚ありし故より永井云昨日上様御下坂御發途前の仰に今度ハ暫時の滯坂なれとも尙不在中萬一 朝廷に於て此細の事に動搖せらるゝ事もあらんかと其た懸念すれハ大藏太輔此旨を心得注意ある様頼みたく奉するなり(中略)中根答御沙汰の趣大藏太輔へ申聞くへししかし右様の御沙汰在らせらるゝにハ何とか指當り御懸念の次第ある事ふりや永井否指當り御懸念の廉あるにあらず此節からの事故御念を入れらるゝふり、、(福密備忘)

〔慶應三年 時體探案書〕

聞取

薩州岩下佐次右衛門佛蘭西博覽會に罷越歐羅巴諸國ニ申入候ニ之當日本政府ニ候而之西洋各國連も思ハ敷貿易通信出來不申以來何事も薩に任せ候ハ、諸大藩に申談十分貿易通信出來候様心配可仕併幕府を立置候而之行ハを兼候間何卒各國之助力を以討幕之存念を遂度旨種々ニ談判ニ及び候由之處英夷を初メ各國同意いたし獨り佛蘭西のミ猶豫いたし居候中民部太夫様佛蘭西表に御着船段々御説諭相成候ニ付佛蘭西ハ遂ニ薩に同意不仕幕府を助候方ニ國議決着仕候由折柄日本大亂ニ而大樹公御殺害被爲遇政權之朝廷に御委任相成候様區々之風説等有之各國ハ愈以薩を助之議論ニ確定佛蘭西方種々説得を加に候趣ニ候得共一切聞入不申のみならず却而各國之惡を受テ佛蘭西之孤立之勢と相成不一方心配仕候趣ニ御座候尤佛蘭西本國方横濱表に居留之ミニストル急ニ呼返し日本之情實委細吞込之上猶各國を精々説得仕候含ニ御座候山右等之儀ニ付此節佛蘭西船攝海に來帆大樹公に御直談願出候ニ付俄ニ今日御下坂相成候由ニ

御座候

但博覽會に之各國共國王參り居英ハ王子參り居候由

右之昨廿三日原一之進殿尹宮様に被仰上候趣同日宮様方御直話拜承仕候事

益 田 勇

〔續徳川實記〕

七日(八)去月廿八日云々

一上様去月廿四日京地御發途淀川通御乗船同日大坂御城に着御云々

七月廿四日幕府藝藩に命じ長州寛典の朝命により申達すべき儀あるを以て末家の内一人吉川監物並に家老一人上坂すべき旨を長藩に傳達せしむ

〔自筆牒控〕

(七月廿七日附田中典儀より藩政府宛書翰の一節)

一板倉閣老に藝州家老御呼出長州末家等上坂之儀通達いたし候様被仰渡候由別紙御留守居書取之通ニ御座候右之 若殿様御滯京中邸内私論之場を以被仰入候筋ニ被指出候敷と相見何卒都合能相運候様奉萬祈候

(別紙)

去ル廿二日板倉様方藝州侯御留守居御呼出御達有之候別紙差出申候右之末家始被召呼直ニ寛大之御處置被 仰渡候と申御運ニ之無之上様御處置之品御目的茂相立居可申候得共昨年來之次第茂有之彼恭順之模様ニ應し御處置之品不被下而之順序相立申聞敷 御所より被 仰出候趣之素より末家始に被 仰達長防之様子茂可被成御尋御儀と被成御勘考候

由榎本殿方承申候事

七月

青地源右衛門

松平安藝守

長防之儀早々寛大之處置可取計旨從 御所被 仰出候ニ付御達候儀有之候間末家之内家人吉川監物并家老壹人致上坂候様毛利家に可被相達候

七月廿一日イニナシ

〔續再夢記事〕

廿四日藝藩辻將曹石井修理寺尾清十郎岡田喜太郎來る公(松平春嶽)御逢ありて長防の事情を尋ねられしに辻始め一とほり其事情を述へ且今晚幕府より毛利家末家の内一人吉川監物及ひ家老一人上坂する様達せられし旨をも告げて退座せり扣所にて中根雪江面會今晚の御達書は今後何日程にて請書を出す事に運ふへきやと尋ねしに凡そ二十二三日を要すへし末家初の上坂ハ尙彼地に於て衆議を盡すへければ九月下旬ふるへきかと答へたり幕府より藝藩へ達せられたる書面ハ左の如し極密備忘(幕府の達文は之を略す)

七月廿四日本藩演武場取締役及ひ倡役を任命す

〔御國往來狀扣〕

三右衛門嫡子

遠山謙藏

專九郎養子

白杉新平

堅藏養子

大野平之助

牛之助弟

渡邊彌兵衛

兵左衛門弟

山川龜三郎

多門助育之從弟

牧準太

右者演武場倡役被 仰付爲御心附毎歳八木貳石五斗宛被下置旨

右之演武場取締役被 仰付勤中三人扶持被下置旨

右之通同日(七月廿四日)及達候

右之通候事

八月

七月廿五日鍋島閑叟京師を發し歸國の途に就く

〔慶應三年 京都返達御用狀扣〕

慶應三年 八月

右者昨廿五日御當地御發途御歸國相成申候以上

七月廿六日

松平 閑 叟
御留守 居中

河口 權兵衛 殿

〔慶應三年 京都自筆牒控〕

〔七月廿七日附田中典儀より藩政府宛書翰抄出〕

一閑叟様一昨廿五日爰許御發途ニ相成申候御暇願之御病氣被仰立ニ而相濟 公邊方御尋之趣ニ付御返答之於大坂被仰上答之由ニ御座候

七月廿五日佛國公使登營す是日將軍佛艦に臨む尋て佛公使再び登營して將軍に謁見す時に閑老板倉勝靜等屢々英人宿寺を往訪す

〔慶應三年 京都自筆牒控〕

今日櫻田惣四郎同道板倉閑老に罷出公用人田那村勘兵衛監察吉田謙藏に面會承糺候處別紙御觸達之通ニ而昨日朝飯後佛人登城爾後上様佛國軍艦安治川口に御成今日猶又佛人登城今日之御察應有之候由右御應接之趣之一切相分不申候英人ハ未々登城ハムし不申尤板倉閑老今朝六半頃方御登城四頃方英人宿寺寺町本覺寺と願申寺之由に御出ニ相成九頃御登城七ツ前方尙又英人宿寺に御出ニ相成暮比迄之未々御歸ニ相成不申候設樂様は茂暮過罷出候處此御方茂御下城懸事直ニ英人宿寺に御出ニ相成未々御歸ニ相成不申候右英人之能州所口に開港願之趣ニ而御許容無之趣直ニ承引可仕様茂無之去迎右之夕所に御許容ニ相成候而之類引御手ニ被及間敷公邊ニ茂余程御迷惑之事ニ而可有之との田那村見込話ニ御座候何茂

情實暇仕候儀相分不申先外表ハ右之通御座候事

七月廿六日

池邊 棕右衛門

御頼御小人目付小川幸吉方差遣候書付寫

七月廿四日

伊賀守殿御渡

明廿五日五時過佛蘭西人登城有之候此段向々に可被達候事

同日

御同人御渡

明廿五日九時之御供揃ニ而備前島御上り場方御乗船目標山邊ニ而佛國川蒸氣船に本文目標山と申之天保山を唱候由御座候御召替夫方同國軍艦に被爲成候旨被仰出候右之趣向々に可被達候

七月

同日

御日付に

覺

明廿五日佛國軍艦に被爲成還御之節軍艦ニ而祝炮廿一發宛三度打發候間右答炮目標山御臺場ニ而執行候様炮兵頭に相達候間可被得其意候事

同日

伊賀守殿御渡

明廿六日五時過佛蘭西人八時過英吉利人登城有之候此段向々に可被達候

慶應 三年

七月

○本文之内英吉利人登城無之候事

七月廿五日小倉藩幼主小笠原豊千代丸父の遺領を相續す

〔慶應三年
機密問日記〕

七月廿九日

越中守様に

豊千代丸様か

殘暑之砌御座候處愈御安泰被成御座珍重思召候然者於京都先月廿五日御用召ニ付爲御名代小堀數馬様御老中板倉伊賀守様御宅に被成御出候處御遺領無御相違被蒙仰之難有被奉存候右爲御知御禮旁御使者被差立候付御目錄之通被進之候
(目錄等略す)

七月廿七日將軍慶喜英國公使パークスを大坂城に饗す鍋島閑叟亦席に列る

〔慶應三年
時體探索書〕

(七月廿九日櫻田惣四郎幕吏瀧澤喜太郎より聞取書の一節)

英人も一昨廿七日登城之節御饗賜り折節肥前閑叟公御登城ニ付右御席に御召出ニ相成御役々之閑老參政迄御連りニ相成候儀ニ而御應接之模様之篤度相分不申候得共英公使之大分酒を嗜み候由ニて滿飲愉快を盡數刻滯座頻ニ談笑之聲相聞退城仕申候

〔全書〕

(八月七日附綾部信之進聞取書の一節)

聞取書

卯八月五日會津藩諏訪常吉より聞取

一先達而越前薩州土州宇和島侯より長州御所置兵庫開港之儀ニ付建白ニ相成居候書附之成行相尋申候處當時専ら幕府へ御委任之上之右等之書附之一切御採用無之様所司代々之申立ニ而關白殿下之御手ニ握り殺ニ而御下ハ無之由との事
一肥前老侯大坂ニ而英人ト同一ニ大樹公へ拜謁有之候處英人老侯之大樹公へ御恭敬を盡させ給ふを拜見致愕然たる模様ニ而其後大樹公へ御應接振も打替候由且退而請申候ニ之只今迄聞込居候ニ之當時幕府之上天子ニ厭まれ下諸侯ニ見之ふされ有とも無ことくニ而命令等ハ一切行を不申様聞込居候處今日有名之肥前侯應接之有様を見候處ニ而之申々左様之譯ニ而無之天下之命令を司り被成候事顯然たる儀と初て大樹公之權勢を知申候趣ニ相見申候由右御應接之儀ハ閑老方も拜見致被居候由ニ而諏訪も閑老カ右之趣拜聞仕候との事

七月廿七日日本藩池邊松右衛門幕府英佛應接の概要を報告す

〔慶應三年
時體探索書〕

今日於御城御目付設樂岩次郎様に拜顔英佛御應接之趣内密相伺候處佛蘭西人之於本國薩州岩下左次右衛門幕府之微力權柄茂無之交易邊之儀迎も取持出來不申薩州之強國ニ而其權茂有之交易邊之儀十分取持出來候杯申觸候ニ付西洋各國大幹薩ニ左祖いたし佛之幕府之全權有之候儀を主張いたし候得共各國信用不仕因而日本滞在之ミニストルを呼歸請解いたし候都合ニ相成此節横濱カ大坂に廻り直々大樹公に拜謁御様子相伺度段願出候付直ニ御下坂ニ相成早速佛人登城大樹公ニ茂佛艦に御出ニ相成何も御懇親之譯ニ而外ニ何ぞ申立候儀之無之由右佛艦に御出之砌之御送迎祝砲等諸事國王に應接之禮を執行幕府に重ミを付左候而佛之アトミラル之是カ直ニ歸國實見之趣を以西洋各國に辯解いたし候筈との旨ニ御座候英吉利之先頃於長崎英人兩人賊被致殺害候節礙泊いたし居士州之船直様暫時乘廻其儘南海に向出帆いたし候由依之英カ右致殺害候者全土州人之所爲との見込ニ而幕府カ不被及御手候ハ、英カ直ニ右之刺客を搦捕日本

慶應三年

四八一

政府に差出可申段申出候由依之明日敷明後日敷大御目付戸川伊豆守様并御自身様も土州に御下りニ相成候旨との旨ニ御座候却説昨夜書取差出候田名村見込話之趣能州所口は開港願之一條茂相伺候處右様之儀之無之北國ニ而ハ西洋各國も新鴻に開港望ニ而大方其通御許容ニ相成可申との御返答ニ而御座候事

但今日四半比ハ英人登城御饗應有之八時之御供揃ニ而大樹公御歸京彼是殿中大混雜稍暫時御立話位之事ニ而英人に御返答之趣取詰相伺候儀頓斗及失念申候尤戸川様列土州に御下りニ相成候得之英之申立通御許容ニ相成候儀之有之間敷奉存候事

七月廿七日

池邊 樗 右衛門

七月廿七日日本藩青地源右衛門は幕府の英國に銃砲を注文するの風聞を傳ふ

〔慶應三年 探索書扣〕

薩大山路之助雜話ニ弊藩家老岩下在次右衛門儀當春以來英國に罷越居候處同人書翰之内ニ公邊ハ大炮小銃砲員數ハ相分不申候得共何万挺ハ英に御注文有之候處右之當十月限出來ハ候様尤其期限ニ出來揃候得之旨一挺ニ付三十トル充夫方延引ハ候得之二十五トル充減少御仕向有之旨之由然ニ右之通期限を以御注文之儀不審相立居候處代金之儀之薩長討潰シ御仕向ニ相成との儀申來居候間要心ハ候様右左次右衛門に英人方申聞候由候事

七月廿七日

青地 源 右衛門

七月下旬松平春嶽山内兵之助を訪ふ

〔慶應三年 時體探索書〕

〔八月七日附綫部信之進聞取書の一節前文は七月廿七日の條に在り〕

八月六日土州藩生駒清次方聞取

一 去月廿八日比越前宇和島二老侯夜分八時過比御使者之振合位之御供廻りニ而土州邸ニ御入ニ相成候由承候間如何成御用向ニ而右之候哉相尋申候處左様之儀之無之去月廿七日比越前侯御一人御入ニ相成申候得共夜分等ニ而之無之共事件之當時英人より申出居候長崎表ニ而暗殺之儀ニ付御氣遣被成御尋ニ御入被成候由其後宇和島より右之事件ニ付夜分御使者參候事之有之候由尙其後廿九日比越前字兩侯御出ニ相成候様御案内有之候得共其時之病氣ニ而御斷申上候との事

七月廿八日我藩田中典儀は三條實美等入洛の事に關しては京師の形勢に鑑み暫く薩藩の延期説に賛同するを可とする旨を藩政府に通牒す

〔尊攘錄五卿一件帳〕

慶應三ノ七月廿八日京發早打八月八日着自筆狀

以別紙申達候五卿護送及延引候付而何程之様子ニ有之候哉之儀小林甚六郎殿ハ五藩に御尋之趣有之候付而其御留守居方御奉行迄申向置候由之處右之一件此許詰筑前藩方之急飛國許へ相達候付於太宰府五藩中談之趣之三條様御病氣ニ而是迄及延引候處最早漸々御快復ニ付早々護送可有之處薩之迎船相廻不申候付京地ニ而五藩咄合薩之迎船急ニ相廻候様取計有之度若異議も有之候ハ、各藩之内最寄方出艦之申談有之度と相決候趣秋吉又助古閑富次方此元御留守居并機密間根取に中越且右一件ニ付薩藩大山路之助茂急ニ致出京候由ニ而薩ハ五藩集會之儀申來候付留局より罷越候處是迄延引之譯之三條様御病氣故之事ニ候處大隅守様御存寄之次第有之其子細ハ此節長防寛大之御處置被 仰出根元五卿茂長防之事方斯之次第ニ付長防御處置之品被 仰出候上御歸京之上方順序を得可申との事之由委細之別番御留守居書達之通ニ御座候元來五卿歸洛願之事之長防御處置被 仰出候以前方之事ニ而此節之御處置ニ關係可有之譯ニ無之何共難

心得事ニ候得共蔭ニ之何歟深意有之事を左右ニ寄せ申延候事と拜見候處此交ヒ只今五卿歸洛ニ相成候ハ、又如何成ル混雜を生し可申越茂難計今暫是迄之通ニ被差置候方却而天下之爲 幕府之御爲ニ茂可然哉共相考候付先薩之意ニ被任置候而之何程ニ可有之哉と御奉行杯共咄合申候間得斗被及御評議御様子被 仰聞候様存候以上

七月廿七日

田 中 典 儀

御 家 老 當
御 中 老 當

七月廿九日兩肥兩筑の京都留守居書を幕府に提出して三條實美等の歸洛は更に本國の報を待ち之に答へんことを請ふ

〔長州再征帳〕

筑前太宰府表に在留五卿方歸京之儀ニ付而者當春 公邊より被 仰出候通ニ付其運ハニ相成可申答之儀三條實美所勞ニよつて是迄延延ニ相成居候然處漸々快復最早何時ニ茂歸京不苦候へ共長防寛大之御所置被 仰出候付而者右御處置之品相分候上歸京ニ相成候儀順序を得可然との趣於薩邸存寄ニ付右之通ニ而者何程ニ可有之哉と同藩大山格之助方申出候付各藩集會話合ニおよひ候處右者重役共登京者ハムし居候得共何分此許限取切候儀難相成國許に通議之上ふらてハ決兼候依之急飛を以て通議治定之上御届可仕と申談相決候處海陸相隔往反今暫者隙取可申候間此段不聞御届仕置候以上

七月

松平美濃守内
井 上 六 之 丞
細川越中守内

青地 源 右衛門
右馬中務太輔内
柘 植 傳 八

松平肥前守内
百武 作 右衛門

右書附七月廿九日筑前井上六之丞筑後柘植傳八肥前長森傳次郎後藤藤助同道小林甚六郎殿に差出候處反復披見之上御届之趣委細承知ニ相成此上ふから御國ニ而通議連ニ歸京之運ハニ至候様各藩申合盡力いたし候様被 仰聞候事右之通御座候以上

京 都

八月

御 留 守 居 中

本文之通ニ候處甚六郎殿ニ茂五卿方歸京之儀畢竟恭順謹慎之處より被 仰出何そ長防御所置ニ關係いたし候譯ニ無之との御説ニ而薩之存寄之重疊不同意ニ付六之丞列方申候ニ者書面之通海陸往復暫之隙取可申つ迄と申期限も相分不申事ニ付急ニ護送之運ニ至候様取計可申旨御付札ニ而茂被成下候ハ、依夫猶申談之筋も可有之と相伺候處成程夫者左様ニ茂いたし可申候得共一旦薩方申出候末ニ付此節之屈服ハムし候而も向後如何様之故障申出歟茂難測所謂草を打蛇ニ驚之患を引起可申歟と薩ニ之恐怖之御模様ニ拜見返スノも各藩御盡力急ニ歸京有之候様取計可申旨御噂ニ相成候事

七月廿九日日本藩櫻田惣四郎幕府英佛應接の要領を報告す

〔慶應三年時體探索書〕

慶 應 三 年

聞取

一今廿九日瀧澤喜太郎様に幕府監罷出英佛と御應接之決末如何相成候哉之段御尋申上候處最早兵庫開港居留所^{浪無内}御許容御座候上之彼御迷惑之筋強而申立候儀も無御座兩國共ニ御應接穩ニ相濟候段初對面故畧格別御漏無之候ニ付此度英佛態と攝海に來泊いたし大樹公も御下坂御座候故必定大事件ニ而可有御座と世上ニ而之相唱居中候風説ニ承候趣ニ之英人方之能州七尾浦所口開港申出并ニ英人兩人^{水夫}長崎表ニおひて殺害ニ逢候事件を以罷越候由^{英人殺害いたし候者之土州}人と見込佛人之此節ヨフロツバ州中ニ而輔薩之論盛ニ有之由ニて右辨解之爲歸國之管ニ而拜謁を願出將又長崎表ニおひて佛人方教館を拵候處當所百姓等天主教ニ歸向いたし候ニ付公邊方八拾人計^{ナリ}御召捕ニ相成候由

右等之事件ニ而罷越候由承候處何程ニ御座候哉之段猶御尋申上候處兩國方願出候事件之數ヶ條有之矢張右等之事も御座候英人之能州所口開港と差究メタル事ニハ無之候得共彼國王公子并アドミラル^{官名水師提督}所々乘廻り北海にも一港開申度との事ニ御座候所口之儀加州方最初之拒ミ候様子ニ御座候處天下之御爲ニ相成候儀ニ御座候ハ、聊存寄無之由申上候由^{英方}所を取極メ願出候儀ニ而之無之由ニ御座候土州に之大小監察被差立^{せま}御應接之御連ハ付居申候佛人との御應接も矢張風説通ニ可有之佛人之固方公邊に御忠告之誠實方罷出候儀ニ而御迷惑之筋願出候儀決して無之英人も一昨廿七日登城之節御饗應賜り折節肥前閑叟公御登城ニ付右御席に御召出ニ相成御役々之閑老參政迄御連リニ相成候儀ニ而御應接之御模様之篤度相分不申候得共英公使之大分酒を嗜ミ候由ニて滿飲愉快を盡數刻滯座候ニ談笑之聲相聞退城仕申候右之模様ニ候得之至而打甘キタル御應接決して難事を願出候譯ニ而之有之間敷根元大樹公御下坂之佛人之爲ニ而御座候處幸英人參合居候故御召出ニ相成候事ニ御座候旨御返答御座候而御應接之委曲精細之儀之實ニ御承知無之歟御漏シ無御座候事

七月廿九日

櫻田 惣四郎

七月下旬土佐藩中岡慎太郎^{石川清}京都に於て陸援隊を組織す我藩藤村四郎^{朝葉}亦之に加はる

〔青山餘影^{田中光顯伯小傳}〕

先是阪本龍馬は長崎に於て海援隊を組織せしが中岡^{慎太郎}も之に倣ひ京都に於て陸援隊組織の計畫あり當時志士の京都に潜遊する者多く諸處に散在して事を謀るに便ふらす且つ其保護を受くる所ふきを慮り中岡は愈々其計畫を實行することゝふり大目付佐々木三四郎^{原註、後}に狀を具して白川ふる土佐藩邸を借りて同志を收容することゝふつた時は實に七月下旬である(中略)今陸援海援兩隊の規約を擧ぐれば左の通りである

一出京官 參政一員 監察一員 附屬書生二員或は三員

右書生當時出京兩官の自選を許す外藩應對の際並に陸援隊中の機密を掌る

一陸援隊 隊長一人

脱藩者陸上幹旋の才ある者皆此隊に入る國に屬せず暗に出京官に屬す天下の動靜を觀諸藩の強弱を察し内應外援控制變化遊説間諜の事を掌る

一出崎官 參政一員 附屬書生二員

右書生當時出崎官の自選を許す外藩應對の際並に海援隊中の機密を掌る

一海援隊 隊長一人

汽船各船之に屬す脱藩の者海外開拓に志ある者皆此隊に入る國に屬せず暗に出崎官に屬す運船射利應接出沒海島を拓き五州の輿情を察する等の事を掌る

凡海陸兩隊所仰の錢備常に之を給せず其自營自取に任す但臨時官給固より無定額且海陸用を異にすと雖も互に相應援

其所給は多く海より生ず故に其所射利は復た官に利せず兩隊相給するを要す或は其所轄の局に由て亦其部分金を收む
即ち兩隊臨時の用に充つべし右等の處分京崎兩官の計議に任す
即ち兩隊相應して土佐の別働隊とあり彼の奇兵隊や新選組ふと、共に當時頗る有力なる團體であつた而して此陸援隊
は長州に於ける忠勇隊の如く中島信行岩村高俊大江卓香川敬三中川忠純青木義彰三宮義胤藤村紫朗等各藩の浪人を集
めたもので今其隊員を擧げると左の通りである(人名は之を略す)

七月某日松平春嶽實母病氣の故を以て賜暇國に歸らんことを請ふ

〔探索書扣〕

先達而御暇之儀奉願上候處 御國事御多端之御時節ニ付今暫滞在仕候様被 仰出奉長候然處再應奉願候儀重疊奉恐入
候得共内實之國許ニ差置候實母此節暑邪相障り餘程之容弊ニ茂申越極老之儀故甚心痛仕候私情ニ付相願候儀之別而奉
恐入候得共最前奉願候通之次第ニ茂御座候得之旁以重而御用之節ハ何時成共上京仕候間此度之儀ハ右等之内情深御憐
察被成下別段之御慈評を以御暇之儀被仰出被下候様只管奉敷願候以上

七月

越 前 宰 相

右書付八月四日之飛脚ニ御國ニ申向濟

八月朔日幕府關所通行の規定を改む

〔時體探索書〕

卯八月五日御達書

關所通方之儀前々御規定之趣も右之候處今度御變革被 仰出候條來ル八月朔日別紙之通可相心得尤是迄御留主居

ニ而取扱候廉も已來都而關所懸り御目附取扱候管ニ候右之趣万石以上已下面々へ不洩様可相觸者也
右之通於江戸表ニ相觸候間御供之面々可申達候

八月五日(本台は七月十九日江戸に於て達せられたるものなり)

(條々)

- 一 婦人通し方之儀別段之改無之惣而男子同様之振合を以相通し少女子振袖留メ袖勝手。次第イ ムるへく事
- 一 剃髮惣髪かぶ等總而別段之改無之事
- 一 首死骸亂心手負囚入等手形無之候共差添之者より證書差出。通行可致事
- 一 御役人急用之節上下共夜中も通行不苦事
- 一 鐵炮武器等之其品々差添之者證書差出。通行可致事
- 一 是迄印鑑引合通行之分以來其儀ニ不及候事
- 右之通可相心得候イ(實記に據る)

八月三日日本藩所有の軍艦に關する調書を幕府に提出す

〔江戸返達御用狀扣〕

八月十三日藤木より 九月六日着

御軍艦奉行澤志摩守様より 此方様に御買上ニ相成居候蒸氣船追々御届茂相濟居候得共此節御取調之儀有之候猶巨間
細ニ御届可仕旨先達而御達有之候付而御届之儀被 仰付越候通ニ付脩藏名元之書付出來繪圖相添去三日御軍艦所に御
届相濟申候右書付寫一通差上申候以上

八月三日御軍艦所に 差出候書付寫

覺

細川越中守手船

一萬里丸

原名
コスモスホライト

西洋千八百五十九年打立

但スクルーフ

蒸氣

木製

備筒 四挺

但旋條炮

馬力 百貳十

噸數 四百

元治元年九月英國ガラバよま於肥前長崎買入

右 同

一凌雲丸

原名
グラナーダ

西洋千八百五十八年打立

但スクルーフ

蒸氣

鐵製

四九〇

備筒 二挺

但米利堅旋條炮

馬力 百六十

噸數 貳百五十

慶應二年六月英國ゴロウルよま於長崎買入

右 同

一舊迅丸

原名
フエーリー

西洋千八百六十五年打立

但スクルーフ

蒸氣

鐵製

備筒 壹挺

但船忽礮

馬力 貳十

噸數 三十

慶應二年七月英國ゴロウルよま於長崎買入

右船印帆印等繪圖相添御届仕候以上

細川越中守内

八月三日

澤村 脩 藏

八月四日朝廷儀に伊達宗城等四名上る所の奏疏に對し將軍並に四藩主參内妥商を経たる後取捨して以て二件解決の先後を決すべき旨を達せらる

〔續再夢記事〕

四日傳奏日野大納言殿より去ル五月中(五月廿六日)公(松平)及ひ島津大隅守殿(久)伊達伊豫守殿(城宗)松平容堂殿(山内)とともに差出されし伺書へ更に御書付を以て左の如く達せられたり波日記
兩事件銘々見込遲速之異同は有之候得共大藏大藏太輔伊與守等參 内之上寛開之歸着は同様ニ付御取捨之上被仰出候尤其節之模様は委細大藏太輔伊豫守ニも承知ニ可有之併不參之面々は太樹に可承合候事

〔鶴鳴餘韻〕

八月四日日野傳奏を先般の伺書に對して長州處分兵庫開港の遲速の異同はありしも太樹並に大藏太輔(春嶽)伊豫守(原註)
(宗城)參 内の上寛開の歸着は同様ありしに付取捨の上仰せ出されたる旨の達しあり公(宗城)は直ちに久光公と連署の上再度伺書を差出さる右は四藩より同一意見を以て申し立てたるものあると公等の意見は 朝命を以て仰せ出さるべしとあるに此 御沙汰にては諸事は太樹へ伺ひ出るやうとありて 朝廷の樞機が却つて幕府へ移りたる傾きあるが爲めあり

八月四日英人殺害事件調査の爲め外國奉行平山敬忠及び英國公使等土州に赴く

〔防長回天史九〕

(慶應三年秋期の大勢抄出)
八月四日英公使英艦に乗じ土州に赴く平山等之ニ便乗す土藩乃ち後藤及び齋藤彌久馬等をして英公使と會談せしむ後

藤解説最も力む英公使意稍々解け譯官サトウ氏をして已に代り土藩吏員及び平山等と共に行害地長崎に至り犯人の捜査を行はしむるに決し公使は其九日土佐を發して横濱に歸る

〔時體探索書〕

聞取書

(前略)

一 土州人英人殺害致候ニ付公義御役人土州へ御下りニ相成候段被仰出候間土州が申上候ニ之英人を土州人殺害致候と申候者横笛と申て土州之帆前船長崎ニ參居候ニ逃込候由ニ而夫を證據ニ土州人と申立候由外ニ何ぞ確證も無之且長崎表へ向ケテ吟味不仕候而之相知レ不申候事故何分急ニ之出來申間敷候間手元ニ而一應吟味仕候上ニ而尙様子可申上候間御役人御下り之儀之暫御見合被下度段幾重ニも相願候へとも御聞入ふく大樹公が之御直書も被下候間夫も所持致候間重役之者一人同船案内致候様被仰聞候間左様ニ而之國元ニ而も其手都合不致候而之相成不申候間御先ニ下國仕度段相願候處御供文之御免ニ相成御先ニ罷下申候との事

一 越前侯が之御書も參候由との事

一 英人士州へ廻船致此節之儀直と談判可致段申出候得共其儀之公義よ御差留被成候間其儀ふらハ直談判ハ相止御役人が御談判之様様を彼地ニ而拜聞可仕段申出候由ニ御座候間土州が申上候之當時暗殺等之儀申出候ニ付而之定而國內人氣之動搖ニも相成可申其折柄ニ英船廻着致候而之萬一又々御難題等引出候様之儀も御座候而之尙さら恐入候次第ニ御座候間何卒幾重ニも廻船之儀之御留被下候様願出候へとも其儀も出來不申候

一 英人此節土州へ廻船致候ニ付而之海上功者ニ而土州人を一人水先ニ頼度段申出候由ニ有之候間當時右様之者一人も當處ニ居合不申是非と申候ハ、國元が召上セ不申而之相成不申段申上候處然之其儀之直と談判致候様被仰付候間大坂詰

之役人右之次第を以談判致候處其儀ふらハ無致方然し萬一不都合之儀も有之候而之迷惑致候間廻着之節重役一人出向をらハ度段申出候間其儀之國元へ通し候上ふらでハ返答出來不申段申向置候由

一 英人之近日出帆阿州ニ立寄夫が土州へ參申候由

一 土州之公子一昨五日ニ下藩ニ相成申候由

八月七日

綾部信之進

八月五日幕府山城全國を朝廷に獻ず

〔新録自筆狀〕

御同席觸寫

大目付に

今般山城全國之内堂上方家領寺社領並宿驛等之相除其餘御收納小物成稅物成とも一回 禁裏に御貢獻相成候付右國領分知行上知被 仰出候尤替地等之儀之追而可被 仰出候間委細之儀之御勘定奉行可被談候

右之通万石以上以下之山城國領分知行有之面々に可被相觸候

八月 右之通去ル五日於京地被仰出候間向々に不洩様可被相觸候

〔時體探索書〕

(卯八月五日とあるものゝ内)

合米六万七千石余

慶應三年

四九三

此依數十六萬七千五百俵 但四斗入
内九萬千五百俵 御分配米
殘米七萬五千俵

右慶應三卯年六月戸田侯御調ニ而 朝廷に御差出ニ相成候事

一是迄年々拾五萬俵貢獻相成候所今般幕府に御願ニ而山城一國御貢獻十五萬俵之御振替ニ相成候様御願有之由未々御沙汰之無之候事

一高貳拾三萬百石余

内

高四萬七千三百石余

攝家宮堂上方御家領

五千四百石余

地下役人共外

此高 四萬八千九百石

神社寺領

殘高 十萬千七百石余

十貳萬八千三百石余

四ツ物成ニ而 此取米五萬千三百石余

外ニ

一高六千八百五拾石余

此取米貳千七百石余

是ハ丹波攝津國御料御除料之分

二條御藏出之積り

米壹萬三千石余

是者前々方二條藏出之分

八月六日松平春嶽歸國の途に就く

〔慶應三年正月上季
京都返達御用狀扣〕

松平大藏大輔様より以手紙、

今般大藏大輔様御儀御暇願之通被仰出候ニ付來ル六日御當地御發駕御歸國被成候右爲御知被 仰進候此段各様迄宜

得御意旨被 仰付如此御座候以上（春嶽六日京都を發し
九日福井に歸齎せり）

八月四日

右一通

（中略）

八月七日

御留守居中

河口權兵衛殿

八月六日烏津久光伊達宗城一昨日の指令の旨に對し更に伺書を朝廷に上る

〔探案書扣〕

鳥津中將宇和島少將方八月六日之夕月番傳奏業に差出ニ相成候書付寫

先般兵庫開港御差免ニ相成候付御達振事實顛倒仕候故猶又奉伺候趣御座候處兩事件銘々見込遲速之異同之有之候得共
大樹并ニ大藏大輔伊豫守等參 内之上寛開之歸着と同様ニ付御取捨被 仰出候云々御達之御書而奉拜見候長防之儀ハ

大膳父子官位復舊平常之御沙汰ニ被及幕府反正之實跡顯然なる上之天下人心安堵仕國內一定之基本度可被居筋ニ御座候得共第二ニ外夷之事ニ及兵庫開港時務相當之御所置ニ相成候而順序可相適との鄙見ニ御座候得共固々寛開之歸着ハ同様ニ而更ニ異儀無御座候得共順序遲速之異同ハ瞭然相分レ候儀御座候處其段ハ徹底被爲聞召置候由難有奉存候就而之當節上京之四藩茂同様誠ニ不被爲得止御差許ニ相成候との御文言是以的當不仕何等之儀同様申上候而不被得止御差許ニ相成候廉ニ可有御座哉御取捨之上 公裁之御旨趣一圓安堵難仕當惑之至御座候其節之模様大樹に可承合 御沙汰ニ御座候得共不容易 朝議之樞機筋違可承合道理無御座再應 聖諭之趣意奉恐入候得共前文之次第柄ニ而も御請可奉申上條理辨別難仕候付不願多罪奉伺候以上

八月 島津中將 字和島少將

薩字再應伺之書付御差返之節御口達ニ可相成管之處御書取ニ而御下多ニ相成候趣左之通

誠ニ不被爲得止御差許ニ相成候儀ハ開港之歸着者同様ニ候間於 先帝既ニ被爲止置候得共時勢誠ニ不被爲得止御差許ニ相成候儀ニ而四藩言上之順序遲速之場合ニ而之無之歸着一理之儀ニ而諸藩四藩同様申上と御沙汰ニ候大樹に可承更御沙汰之儀ニ而大樹參内ニ有之候間始末承知之儀故模様柄を可承様之儀ニ候

十四日 右御書取御下多ニ相成候而再伺書殘り候故翌十五日伺書と共ニ御下多ニ相成候由御座候

十五日

八月初旬兵庫に於て外人と衝突し或は外國商館の建築工事を妨害する者あり

〔時體探索書〕

一阿州何れ之藩士歟名失念 七人同道ニ而兵庫通行之處異人と口論ニ及異人右藩士を海中へ突込切害ニ及候ニ付右主人ハ但し壹萬石計之藩之由

此節外國奉行へ及應接候由 八月六日此

一八月六日神戸異人商館普請板圍數百間之間何者之所業ニ候哉一夜之中ニ打崩候由

一八月三日兵庫神戸交易場普請延引被仰出候由

八月六日本藩櫻田惣四郎は兵庫に於て邦人佛兵と衝突の事同地外人居留地借渡の件伊丹兵庫堺の三港に於て薩藩より米三千石づゝ購入のこと及び英人殺害嫌疑のことにつき幕吏を土佐に派遣せしこと等を報告す

〔探索書扣〕

聞取

一當月四日板倉閣老御下坂之一條大坂御城附與力八田五郎左衛門ニ當時兵庫 罷出御模様相尋候處此度山口駿河守様儀ニ兵庫に被罷越候事件ニ而可有之右一條之頃日佛人布引澤見物として罷越候途中二軒茶屋と敷中所ニて青木源次郎様

捕双方手負も不仕候へ共右之次第早速佛人ハ公邊に相届候由ニ而駿州も兵庫に被參候由未タ歸坂無之故如何成行候哉

と申出候得共未タ實否相分不申候同人之其日爛醉中ニ而全酒狂ニ相違無之右之趣御役人ハ敷佛人に申向ニ相成候得共彼等聞入不申右之次第と相成候由ニ御座候

一右同人ハ承候ニ之英人當月朔日大坂居留所見分いたし其儘出帆横濱に罷越シタル由ニ御座候

一右同時當時兵庫へ之佛人耳碇泊いたし居候由ニ御座候

兵庫安田惣兵衛承候次第左之通

一兵庫表夷人館之儀最初彼等々湊川を神戸海岸一圓拜借仕度願出候左様候而之當所住居之者一切海路を被塞候故別紙略圖之通山手ニ掛ケ十萬坪御借渡ト申事ニ大略相決候へ共未タ土地之廣狭之暇ト治定も仕不申由ニ御座候(別紙略圖と見當らず)

一前文十萬坪之内田畑も有之稻綿等暫時之間ニ而取上ケ候様相成候付其趣土人々願出候得とも逆も其譯ニハ至り不申由ニ而當時地ふらし且外郭之溝堀等拵居候由ニ御座候尤 公邊より被 仰付候儀ニ而一日八分之公役ニ而候處右八分も未タ公邊を御出方無之由ニ而一統困窮いたし居候由ニ御座候

一前文御借渡地之内公邊練練所有之候處此節右之次第ニ付此方様御買上ケ地之内御引上ケ右練練場御引移シニ相成管と申事ニ御座候得とも未タ御決定ニ相成候事ニ而ハ無之由ニ御座候

一薩州を神戸地面略圖之通望地有之候由之處公邊御用と相成候故賦又ハ夷人々望出候節之爲ニ賦未タ 公邊を公然と御故障之無之候得とも地主を薩にハ遣し不申様御内分を御含メニ相成候由ニ御座候(地圖略圖今見當らず)

一薩州を兵庫表ニおいて米三千石買込候由ニ御座候
右之條々惣兵衛直話ニ而御座候

一伊丹兵庫堀之三港ニ而薩州を米三千石宛買込候由ニ御座候得とも如何之爲と申事未タ相分不申由右之島原藩大坂留守居何某開繕候事ニ御座候由承申候

一先月板倉閣老土州英人との一條ニ付土州京詰重役由井伊内松井脩助之兩人大坂へ御召下ニ相成英人殺害之次第御尋ニ相成候得とも一向相分不申候右ニ付大小監察土州に之被差越前文土州重役兩人も早打ニ而歸國仕候由ニ御座候

一板倉閣老原監察昨日を兵庫に御越ニ相成候處今晚天保山沖に御歸帆如何相成候賦成行之儀之未タ承不申候

八月六日

櫻田惣四郎

八月七日日本藩時局に鑑みる所あり在中帶刀以上の組合制度を定む

慶應三年
〔機密間日記〕

八月七日

御郡代に

方今之形勢如何成行可申哉案勞之次第ハ改而申述候ニ不及 御國家之々々上下力を合一刻茂不虞之御手當十分ニ相整不申候而之他日勝を嘆候而茂其詮有之間敷然處在中之帶刀已上之根元方角にて之御守衛ニ而他に出師ニ茂被召仕事ニ付兼而組合を設節制を立習練々々内外共急應迅速之御用相立候様有之度右組立之仕法大略別紙之通被 仰付候條同役一致ニ申談惣庄屋以下は茂御趣意委敷相諭速ニ致成就候様可被相心得候以上

八月

覺

一壹組三拾壹貳人程又之四拾七八人ニして一手永ニ先ツ貳組宛 組立被 仰付候間其所々ニ而人望有之相應之人物を撰一兩人引廻申付相誘可被申候

但募外稽古ものハ幾人ニ而茂不苦

一鐵炮之ケヘル筒を用陳列打方一揃ニ有之左右前後進退寬急最易キ號令を以速ニ相整候様被 仰付候
但仕法筋ハ其所ニ而異同有之儀不苦候

一當時鐵炮を以戰場之要器トシ候事ニ付中古以前之劍槍ニ等敷譯ニ候間炮器玉藥之銘々用意可致事ニ候へ共俄ニ調兼可申候付先ト通之上を被渡下管候得共莫大之員數何分一時ニ御仕法付兼候間先ツ其所々ニ而如何様卒工夫有之相

慶應三年

四九九

整年賦等を以追々々之自分物ニ相成候様仕法惣庄屋以下に茂精々可被申談候尤稽古用之外出張向ニ而之玉葉之被渡下
答候

一所柄次第獵夫札筒之ものを撰相應之人數狙擊隊組立被 仰付候

一右之面々他に之出師ニ被 召仕候節支配人之臨時ニ可被 仰付候

右之通被 仰付候條見込之趣茂有之候ハ、得斗咄合之上追々々ニ可被相達候以上

八月

八月上旬幕府軍艦操練所の組織を變更し商船は商船方の管理に歸せしむ

〔機密間日記〕

八月十日

一上林三二郎儀航海術修業として長崎表公義順動丸ニ乗組當月上旬出帆兵庫に碇泊之内江戸御軍艦操練所御模様打替
り順動丸を初商船之儀者商船方と申町人之手ニ御渡ニ相成候段承り右付而者江戸表に罷越候而も都合惡敷有之候付此
度御買上之泰運丸ニ乗組御國許に着いたし候然處長崎表ニ而修行中之儀ニ付明十一日より猶同所に罷越候段達有之候
事

同人儀ハ去年二月長崎へ参り居候也

八月八日鳥取藩主松平慶徳書を將軍に上り篤く天朝を尊崇し外夷を制して内政を修め以て幕府
の職責を盡されたき旨を切言す

〔慶徳三年
探索書扣〕

因州侯建白

慶徳毎々愚^{落字カク}及建白候段恐惶不少候得共御懇親之末ニ罷在路次之巷説ニ御座候得共近來之説話承及候而之實ニ傍觀難

忍元來 幕下ニハ 先朝非常之御寵遇を以御再職被遊誠ニ御本家之御相續被爲在候段を恐飽迄も被爲誓神明 先朝御
遺志御繼述 幼帝御補佐被遊攝政殿御始要路緒神家に御力を被爲添官武御一致之申上候迄も無之乾度 神州御維持東

西諸侯御檢繫被遊外夷を制して内を修るこそ幕府之御本業ニ御座候處素より御卓識御活眼之上被爲行候義ニ之可有御
座候得共當時之御事蹟凡庸不肖之慶徳等ニ而も内外倒回之様ニ相窺上候伯下匹夫ニ至迄 幕下ハ外夷あるをしりて我
神州あるを不被爲知食候様申ふし候段遠く中國西國之中迄も無之關東御膝下之土民迄万一怨望を生し候様相成申間敷

とも難申實以恐入候次第 幕下御幼年之御同舎ニ成長仕候不肖慶徳迄茂 天朝之不及申候伯以下庶民ニ對し實ニ失面
皮日夜不堪泣血慙愧他日黃泉地下ニ而源烈殿に而謁いたし候時此場合傍觀罷在候而ハ申譯も無之候付重而言上仕候段
幕下之御失徳を算候筋ニ相當不敬不禮其罪不少候得共何卒天下衆庶之向背ニ乾度御心を被爲留 天朝御尊奉之筋之義

も乾度目前領細之禮節而已ニ不被爲拘眞ニ御尊奉筋被爲立外夷御接待振之義内外被我之分乾度相立般艦不遠清阿片も
有之覆轡不被爲踏候様仕度尙御政林之義も堂々たる征夷府ニ於而目前一箇之小刑ニ御眼を被爲附却而不日大害を被爲

招様之媒と相成暨百萬之大軍御編制相成候共於幕府被爲足候義と之不奉存仰願くは 神祖之御事業ニ被爲基井伊酒井
以下御譜代ハ不及申大藩ニ至迄御手足之如夕御指揮被爲在水火を茂不避程之御基礎相立不申候而ハ不相成候處却而旗
本ハ旗本之諸臣迄表向奉命罷在候得共其實尙背離測候義恐入候次第ニ付此上之飽迄も御自省被遊御虚心を以衆議被聞

食内外之御基本被爲立乾度御所置有之度兼而源烈殿御教誡被申上候義慶徳耳底ニ之今尙残り居候得之 幕下ニ茂御忘
却ハ被爲在間敷御攝政之御旁以諸事御心を被爲竭候様泣血悲願伏而奉希候何卒御反正之御實績一日茂相窺候得者冥加
之至々奉存候不遜之罪賜嚴命候とも素甘心まる處ニ御座候誠恐惶頓首謹而呈執事

卯八月八日

慶 徳

右永井玄蕃頭殿に被差出候御使者

三 須 半 兵 衛
小 泉 重 兵 衛

八月十日朝廷薩宇兩藩より再度の伺書提出につき幕府に命じて之を説諭せしめらる

〔慶應三年正月上季
京都返達御用狀扣〕

外使中村榮次郎が指出候書付寫

八月十日幕府に御達寫

長防兵庫兩事件ニ付先達而四藩の伺書差出有之此節御沙汰ニ相成候處尙又別紙之通重而兩藩の伺出候右之今更可被及

御沙汰筋ニ無之候付兩藩に説諭方可然可取計旨 攝政殿被命候事（本文の別紙は八月六日の條にあり）

兩藩に御達之寫

此度重而申出候趣も有之候得共去ル五月御沙汰之次第委細之御趣意柄大榎篤と相心得有之候儀ニ付右書取ハ幕府に御下けニ相成候間其筋の沙汰可有之候様此段可相心得 攝政殿被命候事

八月十日

八月十日日本藩首藤敬助は横濱に於て探知せる英人殺害に關する件、横濱貿易不振の狀況、江戸各國公使館建設、舍密分拆所創設及び幕府財政困難の狀況等を在府當局に報告す

〔慶應元年八月以後
江戸都探索書〕

横濱表聞取書

一先般於長崎表何國之人歟英人及殺害候もの十五日限り御吟味相分不申候得之英人より長崎を燒拂候覺悟ニ而先月廿六日比英軍艦一ト組致出帆候由江戸に相聞申候付横濱に參幕府御役人渡邊銀吉に逢問合申候處何分横濱ニ而ハ相分不申惣軍艦ハ江戸海を直ニ致出帆横濱ニ之立寄不申儀茂右之候得ハ自然之此節茂江戸より直ニ出帆仕候儀も難計尤長崎表ニ而英人殺害之儀ハ横濱ニも相聞居候得共右ニ付英人より長崎燒拂と申事ハ承不申右等之大事件ニ相成候得之是非ミンストルより申出候上ニ而無之而ハ左様之埒ニハ至申間敷當時英國ミンストルハ箱館ニ參り居未タ横濱に之歸不申併箱館より直ニ攝海に廻り候歟も難計攝海ニも英船相廻り居候風聞御座候得ハ自然ハミンストル申出之儀ニ而も可有之歟と相考申候段噂仕候

但江戸に罷歸候上承候得之先月廿四日將軍様御下坂御應接其後外國奉行兩三人英人乗組殺害人之儀ニ付土州に爲御尋被差越候趣候得之未タ殺害人御吟味中ニ而右長崎燒拂として英軍艦出帆之儀ハ何無根之流言と相見申候

一先月十日頃外國奉行山口駿河守様平山圖書頭様横濱に被參英佛人御應對ニ相成平山様ハ直ニ陸行上京山口様ハ十八日比佛船に被乗組上坂ニ相成候趣右御應對振如何之御趣意歟相分不申候得共下評ニ之英人殺害之儀ニ付佛人に周旋御頼と申唱居候由

一先月始頃外國奉行菊池伊豫守様英船に乘組北海に廻りニ相成申候右之北海能登佐渡之間ニ開港之下拵ニ而見分ニ被參候との事尤其外近日ハ折々外國船北海ニ向致出帆候由

但江戸に罷歸候上承候得之近日加州藩が江戸商人萬屋平四郎并佐藤鼎と申もの兩人大分高格ニ召抱候由右ハ交易邊且西洋器械取扱等熟知之もの、由加州ニも専ら北海開港之下拵之由何北海開港も近々相始可申と風評仕候

一幕府より餘り佛夷に御親睦深ク有之候付英墨杯別而不平其鳴らし居候由右ニ付墨夷杯ハ追々江戸に罷出何歟申出候哉之風評

一當時橫濱貿易之儀之不怪衰微ニ而内地之産物格別出不申彼々持越候米砂糖之類も餘賣レ不申異人も餘程困居候由併
夷館焼失之跡杯ハ當時改築最中ニ而此節之猶更手廣ニ仕懸外ト堀杯も堀メ商館ニ取立候趣ニ御座候
一江戸異人館も取建最中町家杯之來ル十五日迄ニ立退候様被仰出段々諸藩之屋敷も被召上候哉之風聞横濱ニ而之聞取右
之通ニ御座候以上

八月十日

首 藤 敬 助

一於御陳原舍密分拆處御取建近々出來之由右之阿蘭陀人教師被召抱候由

一幕府ニも當時ハ不容易金子拂底ニ而頃日ハ僅壹萬金買懸之拂出來不申八千金丈ケニ而一ト先御斷ニ相成候位ニ御座候

横濱表渡邊銀吉方御城使當分森源之承に申越候寫

首藤君方御問合之内

一佛公使者去七月十九日同國軍艦に乘組上坂致候儀ニ相違無御座候

同

一英國公使之箱館に罷越候趣ニ相違無御座候

同

一長崎表ニ而英人殺傷之一件ハ未タ新聞を得不申實否相分不申又一説ニ而ハ土藩之もの殺傷致盛との風聞 先便申上置
候内

一當港ニ而通用之札愈昨廿日方通用相始申候右之江戸住吉町三井組御用所に持參致候ハ、正金ニ引替相成申候間御入用

ニ候ハ、買取御廻可申哉尤金壹兩金五兩金拾兩金貳拾五兩ニ當時之處ニ而ハ四等有之札ハいつまも同様ニ而只金高相

違而已ニ有之候

首藤氏に風聞御咄申候儀

一英國商船箱館ニ而困難致候儀之當七月廿一日南部領并天島沖合ニ而英國蒸氣船シンガポール船號飛脚舟なり暗礁に乘上沈没

いたし乗組之もの并旅客とも百四拾六人不殘小舟に乘移夫方箱館表に引取候處同所に御軍艦奇捷丸碇泊致居候付乗組

之ものに申談右御船に乘せ當港迄護送致し一昨七日入津上陸同國岡士に引渡相濟申候

一和蘭陀コンシユルセ子ラール則公使之次官也今九日第六時當港出立ニ而駿州富士山ニ罷越申候

八月十日伊達宗城養父春山宗大患の故を以て賜暇國に歸らんことを請ふ

〔探索書扣〕

私儀當四月上京仕候處猶又内外御多事之御時節ニ付暫滯京仕候旨被 仰出奉畏候處此節國許を飛脚差越同氏春山儀先

日以来殘暑相障時々發眩暈難儀仕不安心之趣申越候處最早七十六歳之極老故甚以心痛當感仕候付重々奉恐入候得共何

卒此節御暇之儀被 仰出候様伏而奉敷願候尤爾後御用之節ハ速ニ上京仕候故幾重ニ茂不得止情實深ク御情察被成下別

段之以慈評御暇被 仰出候様伏而奉敷願候以上

八月十日

宇 和 島 少 將

演舌之覺

今朝暇之儀奉敷願候儀島津大隅守承知仕居候儀御座候以上

八月十二日島津久光下坂して病を養はんことを請ふ尋て之を聽さる

〔探索書扣〕

私事滯京仕候様兼而 御沙汰之趣難有承知仕居候得共從此内脚氣症之煩ニ而段々療養仕候得共全快不仕頃日ニ至心下

瘁寒食事進兼脚部痲痺起臥不自由別而難儀仕全舛病症土地氣候ニ不馴カ差起殊ニ秋冷ニ相向候得之外感等猶更大患ニ

候段療醫より茂申出候付来ル十五日の一應下坂仕精々保養仕度御座候間暫時御暇被成下候様宜敷御執奏被成下度奉願候以上

八月十二日

島津中將

〔續再夢記事〕

依所勞爲保養下坂御暇願趣難默止被 聞召候ニ付願之通暫時御暇賜り候聊ニ而も快方候得は連上京可有之御沙汰候事

八月十三日幕吏平山敬忠高知より長崎に到着す

〔鶴崎長崎返達御用狀扣〕

八月十九日 宮村より 同廿四日着

一於長崎表御達相成候御書付御當番方筑前類役廻達有之候間則寫一通差進申候右之段申達候恐々謹言
平山圖書頭殿當地御見廻として役々御附添今十三日回天御船ニ而御越有之候ニ付此段爲心得相達候

御付添役々

大目付	戸川伊豆守
御目付	設樂岩次郎
御右筆	齋藤錠三郎
外國奉行支配調役	富田達三
御徒目付	瀧田正作
御普請役	小林源之助

右之通候

卯八月

〔全書〕

八月十九日宮村より様書 同廿四日着

平山圖書頭様御下向ニ付内々探索いたさせ候處別番之通御座候入御披見申候右ニ付動向之稜も御座候ハ、被仰越被下候様奉存候以上

(別紙)

外國奉行組同心	吉川敬作
御小人目付	内田鈿五郎
	金指隆造

當月十三日朝回天丸御艦より御若年寄并外國惣奉行平山圖書頭様其外當港御着早速西御役所に御上陸相成候付御旅宿之儀寺方に御申付可有之候處當節柄之儀ニ付不及其儀岩原に旅宿可被成旨被 仰付候由依之右岩原に旅宿相成居候組頭中臺殿調役橋本殿早速組頭吉岡殿明御役宅に被引移依之即刻御三殿様岩原に御同宿御支配向方者同所内御勘定方御普請役旅宿に割込御旅宿相成申候

一右者長崎表御見廻として御出崎ニ申事ニ御座候得共内實者先達而丸山町ニ而異人暗殺ニ逢候一件中々以六ヶ敷相成居候付取捌方且異宗一件ニ付當分之内御滞崎尤右御用相濟次第一旦京地に御引取其上一應江戸表御歸之上對州御用として御出被成候旨勿論當地御用濟次第手操之御便船を以御歸其節對州人ニ而水先案内之者壹人御召運御上京ニ申事ニ御座候

一右平山様其外御役人書付別紙之通御座候

一對州御用之儀者去年朝鮮おるて佛國邪宗之僧數人仕置相成候一件ニ而猶又佛國軍艦差向結構之由右ニ付爲應援政府に出勢申出候由右ニ付援兵差出候而者御和親國に對し不相濟去連不差向候而者朝鮮を屬國といたし居候詮無之旁和談整として御出之由御座候猶細者相分次第爲御知可申上候

八月十七日

八月十四日幕府監察原市之進京都に於て兇人に殺さる

〔慶應丁卯年 一新録白筆狀〕

（慶應三年八月廿日京發牧新五持參九月八日藩白筆狀の一節）

一去ル十四日之朝原監察横死之次第別紙御留守居書取等之通ニ御座候右之全ク水戸藩中ニ而可有之との見込茂有之候得共榎本殿噂之通ニ候得之御家人ニ相違無之と相見申候何様ケ様之珍事出來候も幕威之御衰微歟と被相考可敷事共ニ御座候

八月廿日

田 中 典 儀

御 家 老 當
御 中 老 當

〔慶應三年正月よ李 京都返達御用狀扣、從京都來候探索事等〕

去十四日原監察横死之始末前々より之探索ニ而大體相分り候得共榎本監察者當日板倉閣老旅館に始末御詰切諸事御取計爲有之由ニ付翌十五日源右衛門一同榎本殿に罷出相伺候趣左之通
十四日朝遊擊隊之者と申候而兩人原殿旅館に參り拜謁願出候處一應者取調候儀有之候間逢出來不申段被及斷候由之器

一口申上度儀有之候間御登城懸ニ而も宜敷御座候間鳥渡拜謁仕度段申出候付左候ハ、逢可申と居間之次之方に通し置原殿ニ者丁度食事中ニ而食事相濟月代有之家來共勝手ニ而食事ハ、し居候御鏡も不見自身に鬚を剃被居候處右之兩人兼而家來共通候口よ、居間に踏込原殿ニ者矢張家來と心得振向も不被致歟聲も不立後口ハ、兩肩ニ切込手もなく首を刎其儘首級を提ケ玄關に脱置候刀茂不取奔出板倉様に罷出候由是、前板倉様に陸軍奉行并之組ニ而鈴木恒太郎と名乗公用人に逢申度段申入取次往復中右兩人首級を携御門に參り幕人ニ而有之候段相答候得共御門を入不申其趣御玄關に相答候間恒太郎者狼狽ハ、し候歟便所に參り候連座を立テ他の間に這入書付ニ名札を添置致切腹候由原殿御旅館ニ者前條之物音を知候時者最早首級を提ケ逃出候間若黨兩人仲間一人直様追懸候由兩人ハ、板倉様御門者明キ不申追手ハ、迫り候付壹人ハ、御門外ニ而切腹壹人ハ、急遽故歟脇差も持不申候間自及出來不申彷徨ハ、し居候内原殿若黨奔付仕留兩人之首を取主人之首も取返し引取候由右兩人ハ、鈴木豐太郎依田雄太郎と申ものニ而豐太郎者恒太郎之弟雄太郎者陸軍奉行之仁依田佐助と申もの之悻之由ニ御座候恒太郎者切腹致し候へとも死を遂不申候間直ニ療治を加へ糺明有之候得共咽を突居候間言舌不相分筆先ニ而少々宛者相分り候趣ニ而今度三人申談江戸ハ、罷登兩三日前着京前條之擧ニおよひ候由恒太郎帶し居候刀ハ、餘程能キ道具ニ而中々輕輩之所持可致品ニ無之拵者水戸風之由素懐之書付者水府之文體致方も大關列之仕方ニ類し且又梅澤殿ハ、是迄格別外向之御用も無之當前之當番位ニ而左程他ハ、情を被受候程之儀も無之旁水府之奸黨市川三左衛門列よ、鼓舞ハ、し刀を茂遣し使ひ候ニ而可有之との榎本殿御噂御座候事

八月

青 地 源 右 衛 門
池 邊 棕 右 衛 門

報國徵衷

原 市 之 進
梅 澤 孫 太 郎

此者共儀元水藩として源烈公ニ奉事し先哲の間に入交し兼々管轄之大義者講究しなから當時顯要之地ニ居り奸謀機逞し剩今度兵庫開港之儀ニ付恐多くも先帝之叡旨を茂不顧天聽を欺罔し奉我君をして勅許を要し奉るの舉に至らしめ源烈公の御遺旨を奉し我君を補助し尊攘之盛舉御施行せらしめ而こそ至當之儀なるより一死を惜み己の榮利を貪り苟安を旨とする件々不少は臣等の多言を待す國體を破壊し天倫を滅裂し共天を戴さるの賊臣也臣等衆之所惡天必是共誅するの義ニ原き今身以當之上者先帝在天之靈ニ奉謝中は君家之汚辱を雪き下者衆人之所望ニ答るより天下有識之士幸ニ是を諒せよ

幕府小臣

鈴木恒太郎
同 豊太郎
依田雄太郎

慶應三年丁卯八月

逆賊此輩の如きハ上下に不少今此舉先帝の神靈ニ奉謝君家之辱を雪ぎ衆人之所望ニ答る萬分の一に當るより自らす唯同志戮力の少なを憾るのみ實に臣子報國の微衷也此志を諒するを我々後日之語として請ふ

八月十五日河津祐邦長崎奉行に任せらる

〔續徳川實記〕

十五日(八月)、御役替一人

一長崎奉行

右被 仰付旨於芙蓉間老中列座美濃守申渡之

八月十五日島津久光大坂に下る

御勘定奉行並
河津伊豆守

〔慶應三年正月上季 京都返達御用狀扣〕

(八月十八日河口よりの書類の内)

松平修理大夫様方——然之大隅守様御病氣ニ付一應御下坂御保養被成度候付暫時御暇御願之通被 仰出候付昨十五日御當地御發駕被成候右爲御知各様迄宜得御意旨被 仰付如此御座候以上

八月十六日

〔慶應三年 時體探索書〕

薩大隅守様御滯坂ニ付而御供之人數等内々聞繕申候處左之通

一御供之人數上下六百餘之趣ニ御座候

一薩州御屋敷方此節市中ニおゐて蒲團千疊御買入之由ニ而段々手當ニ相成居候由右者近々御國元方御備手多人數着坂之趣ニ而時候柄ニ付御手當ニ相成居候由尤上坂之上六七日程滯留ニ而直ニ上京之趣ニ有之候段薩州御出入御用達之内方致噲候段肥前藩之内方承り申候(以下略)

大坂

御留守居方

九月四日

八月十八日伊達宗城京都を發し歸國の途に就く

〔慶應三年正月上季 京都返達御用狀扣〕

右之昨十八日御當地御發達御歸國ニ相成申候以上

伊達伊豫守様

慶應三年

五一

八月十九日

河口權兵衛殿

御留守居中

〔自筆牒控〕

慶應三年 八月廿日附田中典儀より藩政府宛書翰抄出)

宇和島老侯ニ之御實父春山様御病氣之被仰立ニ而御暇願相濟一昨十八日御發途ニ相成最早藝世子迄之在京是茂不違御下國ニ茂相成可申哉左候得之此許之平穩共可申候得共薩之舉動何共難心得懸念之事ニ御座候

〔續再夢記事〕

(八月廿一日附伊達宗城より松平春嶽への書翰の一節)

僕歸邑願も薩方共六ヶ敷實ニ閉口よふノ説得之末過ル十日願書差出十三日如願相整十六日登營十七日參 内拜 龍顏誠以難有仕合御吹聽申上候隨而十八日朝大雲院乗出シ鳥羽通り第四時當邸へ着降心仕候十二里行存外當夜ハ草臥仕候

都を立出て

旅衣たちまよふかふ雲霧のはれぬ都をあととなしつゝ

十九日夕藝蒸纏廻着昨日荷物積今夕第四時頃出立乘艦明後曉迄ニハ着宇可仕と奉存候乍憚御休念可被下候

八月廿日在京本藩重役田中典儀は三條實美等歸洛の緩急につき幕吏と薩藩との間に意見を異にせるも暫く現狀を維持するを可とする旨を藩政府に通牒す

〔新録自筆狀〕

慶應丁卯年

慶應三年八月廿日京發牧新五持參九月八日着自筆狀(一節)

一五卿護送延引ニ付小林共六郎殿より五藩へ 御沙汰之趣有之五藩申談之次第ハ先月廿八日之御便ニ申達候通候處其後薩之存寄小林殿ニ之不同意ニ而急ニ護送有之度との事ニ候得共薩を被憚候様子ニ而強而其儀を申張茂無之土臺小林殿一己ニ而急ニ被申 朝暮之緩急共差而御構無之由ニ御座候左候得之先便ニも申達候通今暫只今通ニ而被聞候方却而朝暮之御爲可宜歟と相考申候間猶御參談有之候様存候

八月廿日

田中典儀

御家老當
御中老當

八月廿一日將軍慶喜尹宮及び關白邸に抵り長州處置に對し朝廷の意思確乎ならんことを進言す

〔探索書扣〕

慶應三年 八月廿六日御國に之御飛脚ニ申向濟

聞取書

一當月廿一日大樹公 尹宮様關白様に御入被成候儀之長州召出ニ而御處置筋被仰出候節彼之舉動ニ應し而者萬一朝廷之御動茂被爲在候而ハ大ニ治亂之基ニ關係致候故猶其御固り之爲御出被成候由
一大樹公御參 内之節 禁中ニ而刺殺可致等鷺尾殿被談候事茂御座候由
一西本願寺家來樋口太藏早瀬内匠井口次郎右三人當十七日被召捕候十五人計黨類御座候而薩州人士州人交り居薩州下宿之表札を打居候餘之遁逃致候鷺尾殿同志之者之由
一薩人井上大和々申者嵐山之方間道を吟味致居候由何之爲々申儀ハ耽々相分不申候由

八月廿三日

綾部信之丞

八月廿二日幕府は兵庫開港商社創設につき金札の通用を達し資金を募集す

〔御同席觸寫大目付様御廻狀寫扣〕

稻葉美濃守殿御渡候御書付寫二通相達候間被得其意御同列中不殘様無遲滯早々可有通達候答之儀ハ先々從銘々不及挨拶各より瀧川播磨守方に可被申聞候以上

八月廿二日

大目付

佐竹右京大夫殿

松平大和守殿

右留守居

大目付に

此度兵庫御開港商社御取開相成候付而之融通之ムニ此節より金札當分之内通用被仰出候付都而通用金銀同様心得御年貢其外諸上納物ニ相用候而も不苦候間五畿内近國共無差支通用可致候尤右札正金ニ引替之儀之商社會所并商社頭取其外御用達共方ニおゐて引替候答ニ有之右引替ニ付而之歩割減等一切無之候間不取締之儀無之様正路ニ取引可致候事

右之趣御料之御代官御預所私領之領主地頭々不洩様可被相觸候

右之通可被相觸候

八月

大目付に

此度兵庫御開港商社御取立ニ付外國交易取組方元手金として差加金致し又之品物ニ而交易取組度もの之大坂中之島商社會所に申立候様可致左候ハ、商法益銀を以銘々出金高ニ應し割合相下ケ尤差加金致し候共交易望無之ものハ相當之利足可相渡尤右金差懸り入用之節之何程ニ而も申立次第相下ケ候答ニ候
右之趣御料之御代官御領所私領之領主地頭より不洩様可被相觸候
右之通可被相觸候

八月

八月廿三日小笠原近江守家族阿蘇郡内牧を發し歸邑の途に就く

〔機密間日記〕

八月廿一日

小笠原近江守様御家族方爲御歸邑明日内牧御發足ニ而大津御泊之管ニ候依之御小姓組之内壹人右御歡御旅中御見舞旁爲御使者被差越候條此段可被達候尤御音物茂被進候間動方之儀之御書方承合候様可被申聞候以上

八月廿二日

奉行所

御小姓頭衆中

〔肥前外十五藩へ此方様御使者被指立候一件〕

小笠原近江守様之御家族様ニ

御口上手扣 一通

慶應三年

小杉原紙 一箱
佐賀關鯛 一捲
御目錄 一通

右八月廿三日於大津御止宿御使者勤之事

八月廿四日我藩議三條實美等歸洛の件は暫く薩藩の意に任せ置くべきに決す

〔長州再征帳〕

態と以飛脚申達候五卿方歸京之儀薩藩ニ而此節之了簡不得止之由福岡御類役より御懸合ニ及候趣ニ付御國議之御模様御窺取有之度段委細被示越候通致承知相達候處右之事件ニ付而ハ於京地も四藩之考議薩と落合兼各藩一應國々に取遣之上可致御答段御用懸小林甚六郎殿まで御届申置候段此節申來候右薩州之申分長州片付之上ふらてハ順序を不得との儀ハ勿論於御國も御不同意之事ニ候然處根元歸京之周施之薩ニ而取起始終主ニ成奔走ハムし候儀之何様淵底之意思有之事と相見候得之只管體面前之理窟ニ而者順熟之筋ニ之參兼可申其上強而風濤を起緩急を論候様之事ニ茂有之間敷候間先主宰之薩州ニ任せ置追而之模様ニ應し御處置有之可然その御評議ニ相決候間左様御心得其許出役之三藩御相談有之一致之熟議ニ至候ハ、其次第京師に申向可有之候間早々御會談有之様子被 仰越候様可申達旨ニ付如是御座候以上

八月廿四日

機密間

根元中

秋吉 又 助殿
古閑 富次殿

八月廿五日長藩木戸準一郎長崎を發し國に歸る

〔防長回天史九〕

〔慶應三年秋期の長土關係並木戸伊藤等の動靜の條〕

〔莊村の書翰〕

敬奉拜啓候先時は途中にて奉得拜容雀躍仕候今日御發軔之御模様ニ奉窺神州之御爲御保重奉懸候却說唯今旅舎へ罷歸候處無存懸御名刀御惠投被成下辱次第奉拜謝候永く珍品に致し可申候御禮詞之段は禿筆に難盡御座候短銃一箱幸持合居申候間此行御餞別之爲寸心を奉表候書餘は猶奉期再晤候恐々頓首再行

八月二十五日

莊村 助 右衛門

木戸 淳一郎様

侍史御中

八月晦日幕府監察小林甚六郎の屬吏筑前藩に通牒して三條實美等歸洛延期の事に關し兩肥兩筑四藩本國より回報の有無を照會す

〔尊攘錄五卿一件帳〕

五卿方歸京之儀ニ付小林甚六郎殿より催促之末薩州大山格之助より申出候趣有之御國許通議ニおよび追而御届可仕段四藩申談甚六郎殿へ御届仕置候段之當七月相達置候通候處右ニ付御同人より猶催促有之たる由ニ而筑前類役井上六之丞より廻狀を以別紙寫之通申來候間爲御承知相達置申候尤同人へ之未だ御國許より何たる模様も不申參様子相分候ハ、早速知せ可申段及返答置候間別紙相添相達置申候以上

九月六日

御留守居中

以廻狀致啓上候然之小林甚六郎様より御尋之由ニ而高橋平之丞大原道藏より委細別紙の通申越候得共弊藩へも未何

たる模様も相分不申儀ニ御座候御各藩様之御振合如何之御都合ニ御座候哉御模様御承知ニ相成居候ハ、致承知度候付御書込を以御答被遣候様奉存候此段爲可得御意如是御座候以上

九月朔日

松平美農守内

井上六之丞

細川越中守様

有馬中務大輔様

御留守居中様

御留守居中様

別紙

平之丞
高橋(丞)
大原(藏)

六之丞様

秋冷相催候處先以彌御安泰被成御勤珍重ニ存候然之先達而甚六郎より及御談大山路之助へ談判方之儀四藩各國へ飛脚被差立候事ニ相成候處尊藩之飛脚之未歸京不致候哉外三藩之飛脚も如何相成候哉承度趣甚六郎より申聞候間及御問合尤外三藩にも貴所様より御問合之上否拙者共迄御申聞有之候様致度存候右御問合可得貴意如是御座候以上

八月晦日

九月四日幕府大宮御所造營の入費を遍く諸國に課す

〔慶應三年正月よ李 京都返達御用狀扣〕

(九月十二日河口より報告の内)

御頼御小人目付方差遣候書付寫

准后御方 立后被 仰出 大宮御所新規御造立相成候付右御普請御入用先格ハ萬石以上之内に御手傳被仰付候得共此度之御料所并諸大名領分寺社領に國役割被仰付候間村高百石ニ付金三分之割合を以御料之御代官御預所私領之領主ニ而取立納方之儀之 御所御用取扱大久保主膳正星野豊後守に承合當卯年中上納可被致候

但寺社領之最寄御代官に相納候而も不苦候

右之趣御料私領寺社領とも不洩様可被相觸候

八月

〔續徳川實記〕

四日(九)、大宮御所御造立國役金被仰付令

一准后御方 立后被仰出云々(以下略)

九月七日日本藩政府は在京重役に通牒して内外多端の時局に鑑み財政緊縮軍備充實に努める旨を述べ且つ井口呈助防長周旋の事に關し或は薩長の誤解を招き辯解の必要あるべきを以て速に呈助を下國せしめんことを命す

〔慶應三年 自筆牒控〕

九月七日御國許被差立候早打同十五日之夜着

別紙を以申達候追々御便茂有之候未近日ニいたり伊藤十助着いたし 朝暮を初一體之御模様且原市之進殿殺害ニ被差候一條茂致承知其末如何相運候哉其外佛蘭西於展觀場民部大輔様に對し薩州之岩下左次右衛門國旗印章等之事ニ付而義論之趣茂相聞内々之益以六ヶ敷都合ニ成行候由去レ之何時異變も難計御方々様茂右之次第被聞召上下一方被遊御案勞顯光院様御初御住居向御作事之疾ク被差止其餘非常之御差略を以一刻茂御國中御軍備相整候様との思召ニ被爲在就而之多端之事件專致評議居候事ニ御座候

一井口呈助長州於小郡談判之次第之御承知之通ニ而其末長崎を相聞候趣之呈助申出と致相違些煩敷綾茂有之候付一日之呈助暫ク滞熊之咄合茂いたし候得共聞老及大小監其餘粒立候御向々萬々一間違之儘御聞込ニ茂相成候而之以外之事ニ而夫等之爲ニ之一刻茂出京被仰付候方可然と相決先月晦日當表被差立候處去ル二日莊村助右衛門儀瓊浦を至急ニ罷歸於同所此節長州之桂小五郎を追々面會いたし呈助小郡之間答書付茂貫受前後應接之模様委ク承り候得と御國を叩疊致疑惑且恨を合候氣味合茂有之夫ト申茂最前助呈を申向候趣意之大眼目を拔有之夫を彼國中之激徒之中ニ不及薩杯ニ茂差廻候様子ニ相聞見様次第ニ之如何様ニも相成何様追而之都合ニより候而之屹ト辨解不致候而之相成申間敷被呈助此許に居不申候而之大ニ便利を失候間急ニ被差下候様及御相談申候此段爲申達態ト早打御飛脚差立候事ニ御座候委細之來ル十一日池松十内差立候間同人着京之上御聞取候様存候以上

九月七日

田 中 典 儀 殿

長 岡 帶 刀 以下

九月八日鳥津久光病氣療養の爲め歸國を許されんことを請ふ

〔慶應三年 探索書扣〕

私事就所勞爲療養暫時下坂御暇願之通御許容被仰付早速下坂之上精々保養服藥針灸等百端盡其術候得共心下搭寒食事進兼殊ニ脚部痲痺増長するに至り起居進退不調病困益加精氣日耗治術之功寸分相見へ不申候既經二旬如斯容躰ニ而者涯々順快之養無覺束別而痛心仕候兼而滯京候様 御沙汰之趣且亦少々得快氣候ハ、速ニ上京可仕段不容易重命之趣も奉拜承候上萬々奉恐入候得とも今形ニ而ハ假令 御用之品蒙命候而も辨別拜趨之任ニ難奉堪實ニ以無致方次第ニ御座候間一應歸邑之上保養仕度候付右之事實御洞察被仰付以御垂憐御暇被成下候様奉願候今般鳥津備後上坂仕候付爲名代滯上仕御警衛且似合候御途ニ相備候様仕度私茂一涯盡養少し得快氣候ハ、早々上京可仕候ニ付右之趣宜敷御執奏被成下願意御許容被仰付候様奉伏冀候以上

九月八日

鳥 津 中 將

九月九日在坂、我藩監察馬場彦左衛門薩藩の動靜及び之に對する幕府の方策を藩政府に報告す

〔慶應三年卯丁年 一新録自筆狀〕

慶應三年九月九日御日附馬場大坂報告同十八日着鳥津隅州滯坂中舉動之事 鳥津大隅守様先日京都を御下坂ニ付而之種々風説茂有之永屋猪兵衛殿を申來候趣茂有之追々及探索せ別紙段々之書付通ニ而京都迄之追々申達候得共取留候儀茂無之候付其御許に之いまた不申達候處昨今薩藩之模様何とも煩敷多勢罷登其中ニ之長藩も打交り居候哉之様子ニも相聞委曲御留守居方々相達候七印書而之通ニ付此後之動靜之難計候得共何様落着兼候事共ニ付其分ニ茂難關態ト此段申達候右御留守居方書中ニも有之候鳥津備後と申之大隅守様御實子修理大夫様御舍弟之様子ニ相聞最前之風聞にてハ薩藩一和いたし不申大隅守様此度御上京ニ付而茂何角一事之不被途候而之御下國ニ之相成不申とら之御息込ニ付御病氣を幸御手醫師杯より勸立御下坂之上直ニ御下國之手段とも相聞候處近日之形勢難得其意既公邊ニ茂氣取ニ相成候哉ニ而此元御城に大垣勢四五百人計到着猶追々入込候哉ニも相聞若州侯御

人數茂着坂之様子全夕薩之御手當之模様ニ相聞申候勿論相變儀茂有之候ハ、急脚を以可申達候得共先此段迄爲可申達如斯御座候以上

九月九日

大坂詰御目附也
馬場彦左衛門

御奉行所中

壹 島津大隅守様御滞留之御模様内々聞籍申候處左之通

一大隅侯御滞之儀御病氣之現實之先比少々御脚氣之氣味ニ被爲在其後御快方之由此節之御病症御申立御願取ニ付而之儀之彌御病氣ニ被爲在候哉一向役々之申分相分不申何様此程於京都角力御覽も在之候末之事ニ而御病氣之程何程ニ可有御座哉之趣ニ御座候今暫御滞留ニ而追而御快氣之上尙御上京と申事ニ御座候事

一御供之御人數之小松帶刀大久保一藏其外二隊之御供ニ而一隊之人數之百人と申事ニ而候二隊ニ而貳百人由ニ候事

一追而御國元島津備後と申人大隊之人數引卒ニ而上京之由右大隊之人數之凡七百人程之由併未々何比上京と申儀之相分兼候山ニ候事

一大隅侯御下坂即下ニ而諸藩方茂段々探索之由ニ候得共御模様相分不申由今暫いたし候得之少しハ聞取之筋も可有之段噲も御座候右薩州御家中ニ而承取候事

一字和島侯明十九日京都御乘切ニ而御下坂之由御着坂之上長田作兵衛幸町別莊御覽被成度由當所詰之内ハ懸合有之候段同人手代御屋敷へ罷出致噲候事

右之通迄ニ而今日之處少々相分兼申候尙追而探索之上相分次第御達可仕候以上

大坂

御留守居方

八月十八日

右稜書之内無用之稜ハ省キ置以下准之

貳 右同斷猶聞籍之處左之通

一大隅守様御病氣之御模様得斗聞籍申候處最前御達仕置候通御脚氣之末今以御快無御座候由尤格別之御病氣ニも不被爲在候へ共昨朝杯之粥二椀被差上候右ニ付御間内御氣分之宜折御運動ニ成候趣勿論未御床上ニ之相成居不申段御膳部方之咄ニ御座候事

一昨廿日着坂之守衛人數三百人之都而郷士之若手計ニ而銘々西洋筒持參右人數之内五拾人之京都へ御警衛之内病氣下リニ相成居候跡詰として今朝上京残り貳百五拾人之暫ク此元へ御留置ニ相成候由尤右殘之人數是迄京都御警衛人數詰代り又之別段被差登候との儀ハ當時役々ニ而些相分兼候趣ニ御座候事

一右御人數着坂ニ付而之大小之箱様之七島包餘計揚方ニ相成多分玉藥又之武器等ニ而も可有之哉と見込申候右之外疊壹枚程之者七島包として貳括一同揚方有之是之差札ニ献貢と認有之候由ニ候事

一今度大隅守様御供頭御用人當番頭田尻務養田傳兵衛兩人之由
一大久保一藏京都へ御用有之一昨夜上京之事
但尙追而下坂之由

一昨夜薩ノ蒸氣三國丸より被差下候町田民部元御國元方京都へ御用有之滯京之處此程下坂ニ而罷下候由之事

一今日宇和島侯當所御發駕之筈ニ御座候事

一薩州滯坂御供之人數惣替相替儀無之至而靜ニ相見候事

右之通今日薩藩之内ハ承取申候尙追々探索之上御達可仕候以上

大坂

御留守居方

八月廿一日

三 右同斷此元動靜之模様等聞籍申候處左之通

慶應三年

一 京都寺町通ニ而薩州之下宿札張出有之人数ニ脱落入市集之由有之 禁裡御守衛ト相唱居長人杯茂致同宿尤薩藩之内押
 へとして罷在候由右人数之程ニ相分不申候得とも脱落之而々從 御所御守衛被 仰出候哉之趣ニ而此元澤坂之小松帶
 刀從 朝廷御召登之由ニ而早々上京之譯風説有之虚實之相分不申候得共諸藩之内方承取申候右ニ付薩藩之内に罷越
 段々聞籍申候處如何之譯敷一切不相分候得とも小松之今夕方上京致し候旨ニ有之候段承取申候事

一 去ル廿日薩之蒸氣三國丸を罷下候町田民部儀之急成御用向ニ而往來日數十日限之早打之由右之今度御國許に人数上坂
 之催促ニ罷下候趣尤七百人又之千人程と申附茂御座候由諸藩之内方承取候付薩藩に罷越聞籍申候處右人数上坂之儀ニ
 當所役々ニ而之一切相分不申候へとも何時人数着坂も難計尤右民部罷下候日限之早打ハ相違無之不日致着坂候得之事
 柄相分可申との噂ニ御座候事

一 去ル廿日着坂之守衛人数三百人之内五拾人ハ最前上京残り人数ニ當所ニ未タ澤坂之由尤右人数之内三拾人宛程路々西
 洋筒持參ニ而警衛として當所御藏屋敷内御殿支關へ晝夜交代ニ而相詰候由ニ御座候事

一 當所御屋敷表裏御門内ニ大炮貳挺宛備立ニ相成居尤夕景頃ニ之間々大炮稽古之手數いふし候儀も有之尤是ニ大炮御圍
 ニ相成居候場所差支候付右之通御屋敷内へ持出候段薩藩之内方承取候事

一 此程着坂警衛人数之内方夜分拾人程宛御屋敷外見廻候由ニ候事

一 此元澤坂御供之人数ニ惣物靜ニ相見申候勿論炮術武藝杯も一向稽古致し不申只々角力杯計取組候由御座候段承取申
 候事

一 薩州之御米先達を追々京都に運送有之是之全此節詰込人数も餘計ニ付御手當として被差登候由尙又今日方引續千石程
 も別段京都へ運送之由候事

一 此程京都方致下坂候西郷吉之助身分之儀ニ御家老職之場相勤候様被仰付置惣躰京都御守衛人数之惣頭ニ而御備をも御
 預ニ相成居候由候事

右之通今日先承取申候下略

八月廿七日

右同斷

四

一 大隅侯御病氣之儀之相違茂無之趣ニ而日々之御食事赤小豆粥ニ而瓜之奈良漬計召上候由尤ハシ御好之由ニ而當所ニお
 りて段々吟味有之候へとも品不宜候付長崎を參居候者へ拵方被仰付候得共是以御氣ニ叶不申由ニ而右瓜漬計昨日迄召
 上ニ相成居候との趣ニ御座候事

一 御病氣御快氣次第再可被成御上京旨 朝命下り候由ニ候事

一 大隅侯御實子之由名之相分り不申候へとも年齢十四五歳位之人今度京都より御供並ニ而御駕臨ニ附添被申此許に滞留
 ニ相成居候由候事

一 先月廿日早打ニ而罷下候町田民部事往來十日限之趣ニ候へとも昨日迄之未タ着坂無之由候事

一 先月廿日薩州方罷登候守衛之郷士三百人之京都御警衛外別段被差登候由ニ候事

一 隅州侯御澤坂ニ之候得共至而物靜ニ相見何ぞ相替候儀も無之哉ニ候事

一 隅州侯御澤坂之御趣意之一切相分兼候へとも何様幕府之動靜被相伺居候歟之見込諸藩共同様之趣候事

一 隅州侯方今度 朝廷に御建言爲有之趣ニ候得共御趣意ハ相分不申候由

外ニ聞取左之通

一 普請方異人昨日入津市岡新田と申所へ上陸右ニ付爲警衛歩兵六十人程差圖役共被差越候由尤右作事方差圖役之異人之
 一日金八兩宛之雇入と申事ニ候事

一 於兵庫乞食休之者數敷所々徘徊致し候由尤錢を乞食物を貰候儀等之一切無之不審之者共と申事ニ候事

一 薩大隅侯於京都土生浪士ニ而池田庄司と唱候もの御抱入ニ相成候由事

右件々之虚實相分不申候得共諸藩之内より承取候風説之趣其儘御達仕候下略

九月二日

五 右同斷御供人數等内々聞繕申候處左之通

一薩州御屋敷此節於市中蒲團千枚程御買入之由ニ而段々手當ニ相成居候由右之近々御國許御備手多人數着坂之趣ニ而時候柄ニ付手當ニ相成候事之由尤着坂之上六七日程滞留ニ而直ニ上京之趣ニ候段薩邸御出入之者致噲候由肥前藩之内ニ承申候事

一松山世子君俄ニ御上京之趣ニ最前御達仕置候處今朝御供之分段々着坂之趣同肥前藩ニ承取申候事
右之通下略

九月四日

六

島津大隅守様先達而御病氣之處一兩日跡より餘程御快キ由ニ而先日來赤小病方豆粥召上候處昨今之御飯御用之趣ニ御座候尤當月中之御滞坂共承込候得共何時御歸國又之御上京ニ可相成哉相分不申との趣ニ御座候事

一 大隅守様御嫡子島津重富と申人年齢三十五歳之由昨六日蒸氣船ニ而着八時比上荷船屋形組ニ而御屋敷へ着ニ相成候由ニ候事

一 右重富と申人之供同勢之千人之由内五百人程之昨日着坂尙今日五百人着坂之由ニ御座候此元は之五六日程滞留之上登京之趣候事

一 右同勢之内具足杯之御屋敷内へ持込直ニ損所有無懸り役々取調候由ニ御座候事

一 小松帶刀今日京都下坂之筈ニ御座候事

一 松山世子君御供之内歟武器上荷船へ積入少々人數も附添着坂之趣ニ御座候事

一 高松侯從幕府御用召ニ而近々御上京之趣ニ御座候事

一 フルイス國と佛國と議論出來戰爭之場合ニ立至候趣右フルイス軍艦攝海へ相廻し不容易難題之國書持參之由長崎注進有之候由尤長崎并横濱に碇泊之各國船不殘本國へ引取候趣ニ相聞候由今一左右有之候ハ、巨細相分可申との趣諸藩之内囁有之候事

一 諸藩之内文通稜書之内薩ノ人數凡千四百人程山崎越ニ而上京いたし候哉之趣相認有之候を一覽仕候右件々之内末二稜之風説ニ而可有之候得とも承取候儘一同御達仕候以上

九月七日

六 右同斷尙段々承繕申候處左之通

一 大隅侯御病氣一兩日跡餘程被爲重四五日之處御太切之御場合ニ茂可有之哉との趣薩藩之内兩人并御醫師寄合三人密々囁合候趣竊ニ旅宿亭主聞取申候由暇とハ相分不申候得共何様御病氣變動之趣ニ相聞申候事

一 大隅侯此節長々御滞坂之儀之御病氣ニ茂可有之候得とも追々御人數茂上坂いたし候付而之如何成趣意ニ候哉も難量と共に邊餘程探索仕候へとも一圓相分不申尤或宿亭之者囁ニ之一昨夜止宿之薩藩士兩人内々囁合せ候内ニ長州家之先ニ被使夥數物入誠ニ馬鹿らしき事と再々申居候を竊ニ漏聞候よし右之御渡方等茂至而少ク銘々困窮之餘り發し候口氣ニ相聞へ候由ニ御座候事

一 最前大隅侯御嫡子重富と御達仕置候得とも得斗承合候處重富と申之地名ニ而矢張島津備後と申人之由偶州侯御二男年齡二十五歳之由儘ニ承取申候事

一 右備後同勢之内士分以上百人本藩方之守衛士分貳百人都合五百人程ニ相成候由ニ御座候事

一 右備後上京之儀昨日迄ハ未タ日限治定無之候へ共不遠登京之趣ニ御座候事

一 一昨日着坂之守衛士分貳百人無僕ニ而頓斗之精兵之由路々西洋商携一昨夕昨夕迄ニ追々上京致し候趣ニ御座候事

一當所御藏屋敷が具足百願急ニ賣拂之由右之於江戸表御届ニ相成居候よしニ御座候事
 一備後人數百人之内ニ長藩奇兵隊三拾人程内密供並ニ相加り居候趣極密同藩が承取候事
 一追々着坂之人數并是迄在京之分とも承合候處當時之處左之通

在京 小 松 帶 刀 西 郷 吉 之 助
 右同 大 久 保 一 藏 不遠上 坂之由町 田 民 部
 田 尻 務 養 田 傳 兵 衛

右重立候手之由外ニ

一乾御門御警衛人數上下八百人程
 一京都御屋敷其外ニ滞在人數貳千二百人程
 一隅州侯御供ニ而下阪之分上下三百人程
 一八月廿日着坂之守衛人數三百人
 一九月六日着坂島津備後人數上下五百人程
 右合四千人程

内 千九百人 士分精兵 無價之分
 貳千貳百人 番頭以上 足輕以下

一備後同勢千人と申儀上坂之節承取候得とも昨日迄之着之模様も無之段々聞繕申候處當所役々々てハ相分不申候然ルニ
 今朝ニ至薩藩人山崎越上京々々し候風説有之勿論突留候事ニ之無之候得共跡人數五百人着坂無之處ニてハ自然山崎越
 之風説實事ニても可有之哉と相考申候事
 一松山世子君ハ三四日前ニ御着阪ニ而御上京ニ相成候由右御供之内ニて茂御座候哉昨日飛船貳艘ニ三拾人程ツ、乗廻着

坂致し候事

右之通探索之次第御達仕候以上

九月九日

大坂

御留守居方

九月十一日日本藩郡夷則に演武場事務擔任を命す

〔機密間日記〕

九月十一日

耳書也

夷

則殿

演武場之御用筋主ニ成御申談候之様被仰付候以上

九月十一日

九月十一日我藩井口呈助閣老板倉勝靜に調し長州説得の奏功せざりし事を報じ翌日青地源右衛門と共に幕吏梅澤孫太郎に就きて薩藩の形勢並に浦上宗徒處分の事を聞く

〔新録自筆狀〕

慶應三年九月十三日京發同廿日着 井口呈助藩後 時休等之事

以別番申達候井口呈助儀一昨十日爰許着いたし御國許之御様子茂致承知長防之國情茂恭順ニ至兼候由左候ハ、末家以下華城御呼出茂整兼可申往々如何運可相申哉重疊懸念之至ニ御座候島津隅州之今以滯坂先日薩之蒸氣船着坂餘計之人數追々ニ上京不穩様子ニ相聞候處別番探索書之通御暇之願被差出願之通被仰出候付全交代之爲島津備後初人數茂登り

込たるニ可有之哉左候得之差て可怪事ニ茂有之間敷候得とも被狡猾之族如何なる表裏反復之計策も可有之哉決而油斷之難成事ニ御座候且又松山世子去六日着京阿州世子茂近々登京之間有之是は何ぞ茂御隠居御家督之爲ニ上京之由藝世子之御病氣ニ付伏見ニ而御療養之願不被爲叶折々同所へ御運動迄御免之由右之長州末家等御呼出之様子相分り候迄之留置管ニ御座候

一御長柄頭京都詰被差止當時詰込之藪田八郎左衛門之大坂詰被仰付旨及違候様先便被仰越候通ニ付及其達申管之處八郎左衛門手元ニ茂有之模様同役方粗申越候職同人方御奉行迄内意之趣之此許之儀御守衛第一之御所柄大勢之組方寺町詰茂有之一鉢之締方抑揚等直頭相詰居不申而之甚懸念ニ有之大坂ハ御屋敷警衛迄ニ而外勤も無之候付強而頭詰込ニ茂及申間敷見込ニ付京都迄之詰方ニ被仰付度元來一己之便利を差計候ハ、大坂之方至而閑散ニ而宜敷有之候得共爰許之大切之御守衛向ニ付自己之便利を不顧内意相違候との事之由尤之事情ニ相聞殊ニ近來薩之舉動杯物騒之折柄旁御長柄頭一人たりとも詰込相減不申方御手厚筋ニ付今暫内意之通被仰付置候而之何程ニ可有之哉と嗚合下達之先暫見合置申候間猶被及御參談御様子被仰越候様存候以上

九月十一日

田 中 典 儀

帶刀 將監 孤雲 美濃

夷則 男吏 金左衛門 殿宛

尙々探索書等一綴入御披見申候以上

一薩隅州大坂ニ而之動靜探索書添居候得とも同所詰御日附馬場彦左衛門方九月九日仕出之報告ニ記録有之候付略ス

御留守居書取

今十一日御旅館に罷出板倉閑老に罷出拜謁奉願候處直ニ御逢私罷登候儀御心待被成候由御噂ニ御座候長之事情夫々申上折角罷越申候得とも何之功能も無御座思召も恐怖之段申上候處夫丈之儀ニ而も事實相分候得ハ御心組ニも相成候段

御挨拶ニ相成被方應不申所ニ而ハ上之思召ハ如何被爲在候哉四藩御同意ニも可相成哉否との御尋有之候付被方應候ハ

ハ是非御順序之御處置ニ相運名分相立候御周旋も被爲在度御主意ニ奉伺候得とも一向應不申處ニ而ハ何分御周旋之御見込も付兼被爲居候内末家家老御呼出之御沙汰被爲在候御模様相聞左候得ハ定而御處置承伏可仕御日途被爲立御事ニ可有御座と拜察仕先夫切ニて評論も相止呈助儀ハ罷登候事ニ御座候段御答申上置申候

一末家吉川家老御呼登ニ付而ハ何と御見込之筋も被爲在候而之御都合ニ御座候哉之段奉伺候處差而御見込之筋違ハ無之最早閑叟様御登京ニ而諸藩之建議も相濟何レも大同小異宣典之見込ニ有之 御所方も追々御催促ニ付出不出ハ渠々所存ニ任セ先當前之處を以被仰出候事ニ御座候由藝州方ハ一日取次御斷ニ御座候得とも積り御受申既ニ長州に相違申候處長州方ハ一應書付を以奉伺候儀有之追而被方藝州迄使者差越候管ニ御座候只今比之大方國元に參り可申段被考候由藝方被差登候人方申出ニ相成候由ニ御座候

一隅州ハ脚氣散々不鹽梅之由ニ而先月半方下坂ニ相成近日別而空舩相進ニ男島津備後上坂ニ相成居是迄名代ニ涉置下國仕度段願ニ相成候處昨今願之通被仰出候由御座候右歸國ニ相成候處ニ而ハ此後之處善惡如何見込候哉閑老御尋ニ付是ハ備後ハ人物一向存不申人物次第ニ而尤若輩ニ付隅候方も臣下扱善ク乍恐御心配も却而相増可申敷何共難計ト邸内ニ而ハ噂仕候事ニ御座候段御受仕置申候右閑老拜謁大概ニ御座候

一大坂表ニ而探索趣ニ之近日薩人數大惣登込重々異變難計趣ニ有之京着之上承り申候得ハ成ル程人數も段々登込候得共土臺之煩敷程ニハ左迄事情差迫候趣ニも相聞不申由尤今朝青地同道梅澤氏に參り右邊之儀承候處成ル程人數も五百計ハ兩三日登込備後近日登候由大久保西郷杯ハ近來一ト締手元之用心致し旅宿方方々に裏道ヲ明ク何方に居宿いたし候哉知レざるよふニ致右隅候も不怪用心きひしく候由實ハ策略盡果困窮之極ニ至り居候間何時如何成儀仕出可申哉此處之重疊油斷難成併京師ニ而之暴發ハ容易ニ有之間敷見込之由ニ御座候

一長崎馬哈、獸村邪教動搖之儀青地方御尋申候處成ル程信仰之日本人五六人被召執入牢被仰付置候由之處條約ニ違異教相

弘候儀重疊夷人不届ニ候處實ニ教師之儀之役人々も手儘ニ難成譯合も有之此節之儀重疊誤入候ニ付日本人も御恕宥被下度此後右様不埒之儀有之候得ハ如何様共刑罪被仰付度立テ御話申候得共上様ニハ御承引難被成御法ニ負候者共ハ他處に御引移之積り之由大村藩士十人計是ヲ懼リ教師を殺し耶蘇堂ヲ燒候企いたし近日京師薩邸ニ潜居内々所々説得同志を語候趣ニ相聞候由右之梅澤氏ニ而承候次第ニ御座候事
慶應三也

九月十二日

青地
井口

九月十五日幕府は亞米利加國との條約に準し葡萄牙、李漏生、瑞西、白耳義、伊太利、丁抹の六國との條約を改締せる旨及び江戸大坂間廻漕事業開始の旨を公布す

〔御同席觸寫大目付様御廻狀寫扣〕

一十月十三日着之御飛脚ニ江戸より相達

御同席觸寫

稻葉美濃守殿御渡候御書付寫壹通松平防周守殿御渡候御書付寫壹通相達候間被得其意御同列中不殘様無遅滞早々可有通達候答之儀之先々從銘々不及挨拶各より瀧川播磨守方に可被申聞候以上

九月十五日

大目付

佐竹右京大夫殿

松平大和守殿

右留守居

大目付に

葡萄牙 李漏生 瑞西 白耳義 伊太利 丁抹

右國々之儀亞墨利加阿蘭陀魯西亞英吉利佛蘭西等之振合を以追々條約爲御取替相成候條末々之ものニ至迄其旨可相心得候

右之趣御料私領寺社領共不洩様可觸知もの也

九月

右之通可被相觸候

大目付に

此度廻漕御用達等引請ニ而蒸氣飛脚船取設當月中より大坂表に往返致し候間御用旅行之者之勿論諸家家來百姓町人婦女子ニ至迄右飛脚船ニ而往返致し度もの之勝手次第廻漕會所に申込相當之入用差出乗組候様可致候且御用物之勿論諸家荷物又之商賣荷物等是又同所に申込次第相當之運賃を以積廻候答ニ候尤諸事廻漕會所詰合御用達とも相對可致候右之趣向々に可被相觸候

九月

九月十七日我藩田中典儀は井口呈助を歸藩せしむる旨を藩政府に報し且つ島津久光の大坂發艦大久保一藏の西下及び島津備後の大兵を率ゐて上京せしこと等に及ぶ

〔一新録自筆狀〕

慶應三ノ九月十七日京地自筆狀翌十八日井口呈助早打にて被差立

井口呈助儀御國許に急成ル御用有之早打ニ而明日被差下候付寸楮を以得御意申候去ル七日御國許被差立候急脚昨夜着

慶應三年

佛蘭西於展觀場隆之國旗印章等之事義論之極茂相聞候付而之何時畢變も難計御方々様茂不一方被遊御案勞顯光院様御初御住居向御作事之被差止其餘非常之御差略を以一刻茂御國中御軍備相整候との思召ニ被爲在就而之多端之事件專御評議有之候由御英斷誠以奉感佩片時茂早夕御軍備充實を奉冀望候

一井口呈助於小郡談判之次第於瓊浦莊村助右衛門桂小五郎承取候事實致齟齬重疊御國を致疑惑恨を合候意味も有之候由追而之都合次第ニ之屹度御辨解無之候而之相成中間敷呈助不致在熊彼而之御不便利ニ付念ニ差下候様被仰聞候通り夫々致承知直ニ及其達明日被差立候事ニ御座候尤被談判之趣等聞老初に申上候次第ハ一ト通之書取先便入御披見申候通ニ而猶委細之儀之呈助直ニ相達可申其外此許之近狀及大坂兵庫邊之形勢等も探索いたし罷越候様申合候間何茂御聞取可被下候以上

九月十七日

田 中 典 儀

御 家 老 當
御 中 老 當

尙々島津隅州大坂發艦之様子等所方之注進別番入御披見申候以上

島津大隅守様昨日爲御歸國御乘船ニ付尙其後之模様等聞辨申候處左之通

一隅州候昨朝御發駕之節御駕之儘御門前上荷船へ御乗移引船ニ而御下りニ相成候尤表向之御屋形船へ御乗移之振合ニ而右御船も一同安治川迄罷下申候且又守衛多人數銘々西洋筒携御本船兩側致警衛陸路罷下候事

一隅州候御病氣之御模様追々御達仕置候通ニ御座候得共色々と風説も有之眞偽之程相分兼候付爲と事實探索仕候處御脚氣次第ニ被差重水氣御腹中ニ相増先日來餘程御難澁ニ成候趣ニ御^{下付札} 本文御發駕之節拜上ニ罷出候者之咄直と承取候座候處兩三日少し御氣分宜趣ニ御座候由併御太切之御容躰ニ有之 處御駕内ニ而引廻之蒲團ニ御投懸り被成居候而其上數日之御床付ニ付昨日御發駕之節御駕内四方引廻し黒ヒロウ 御駕之障子御自分ニ御懸ケニ相成候を儘ニ見受

ト之蒲團厚サ五寸程ニ而眞綿懸目三百目入ニして御敷込ニ相成 候由御顔之水氣之御懸梅ニ而も可有之哉少々ハレ候由右之一兩日跡於當所新規出來之趣儘承取申候事 居候承取申候事

一小松帶刀一昨夜致下坂既昨日屋形船へ乗込御本船先キニ罷下候由右之業氣日本船迄見送之由ニ而今日直ニ上京之趣ニ御座候事

一隅州候御供之人數貳百八拾人程御供頭御用人當審頭兩人外ニ大久^{下付札} 本文大久保一藏儀之内實長州へ罷越候趣ニ御座候保一藏下ノ關迄御供いたし夫方直ニ引返し上京之筈ニ有之候事 候事

一島津備後大隅守様爲御名代今日上京之筈尤供人數四百六拾人程之由ニ候事

一先達而方滯坂人數之内貳百六拾人程當所御屋敷内外へ爲警衛被差置候由ニ候事

一惣御供人數凡千貳百人程

貳百八拾人程 大隅守様御供ニ而罷下候分

貳百人 先達而京都へ被差登候分

貳百六拾人程 大坂へ爲警衛被差置候分

四百六拾人程 島津備後惣供本藩より差添之人數上下分共

一御家老並西郷吉之助關山糾共滯京之由尤小松帶刀今日上京右三人外ニ大久保一藏とも京都へ被差置候儀ハ薩ニおろてハ深き趣意も可有之由ニ候事

右薩藩之内方承取候付不取敢此段御達仕候以上

大 坂 御 留 守 居 方

九月十六日

九月十九日松平安藝守は長州末家吉川監物等を召喚に對する長藩の請書を幕府に提出す

慶 應 三 年

五三五

〔京都返達御用狀扣〕

（慶應三年正月よ季）
（九月廿七日河口よ季の報告書の内）

桑名公用人より聞取候書付寫

今度長州末家吉川監物等御呼出之儀毛利家に及通達一應落手仕候段之兼而御届申上置候通ニ御座候處此節右家來伊原小七郎永松文輔と申もの爲使者差越別紙御受取差出候旨國許方申越候間差出申候大坂着之上旅宿等之儀申越候次第茂御座候間得斗取約模様ニより其節奉伺候儀茂可有御座候此段茂申上候

九月十九日

松 平 安 藝 守

別紙

板倉伊賀守殿より御家來に御達之趣態々以使者被仰下候段致承知早速末家吉川監物にまき及知達候

〔續再夢記事〕

十九日藝州侯より幕府へ差出されし書面左の如し此書面は同侯京都御留守居三宅万太夫より尾州藩及び本藩へ廻達せるより參政内狀

此度長州末家吉川監物等御呼出し之儀云々（京都返達御用狀控の文）
（と同じ故に之を略す）

松平安藝守内

九月十九日

三 宅 万 太 夫

寫

前日以使者及御答置候從 幕府御達之趣末家並吉川監物へ相達候處孰も舊年以來之病氣眩と無之重き御沙汰ニ付而は差押候而も發程不仕候而ハ不相濟答ニ候得共何分不任心休無余義御斷申上候然ル處重大之御沙汰筋余り遷延打過

候は如何ニも奉恐入候義ニ付不取敢家老計支度次第發途爲仕候心得ニ御座候尤末家一人監物共少々快方ニ候ハ、差押候而も可罷出候得共其中名代ニ而可然御事ニ候得は御差圖次第早速可指出候旁之趣幕府御取計致御頼候
右書面ニ幕府より附紙にて左の如く指圖せられたり

書面之趣は末家並ニ吉川監物病氣少々も快候ハ、家老一同大坂表へ罷出候様可被相達候

九月廿一日將軍慶喜内大臣に任せらる右大將故の如し是日慶喜二條城に移る

〔時體探索書〕

（慶應三年）
（九月綾部信之進探索書の一節）

一大樹公當月廿日内大臣御昇即二條御城に御引移被成候云々

〔續再夢記事〕

廿一日大樹公を内大臣に任せられ大將故の如しと仰出され又隨身兵仗を賜ハリ牛車を聽されしとそ此日大樹公二條城に移らせらる參政内狀

九月廿一日日本藩政府は番頭等に命じ豫め郷兵隊長の人選をなさしむ

〔機密間日記〕

（慶應三年）
九月廿一日

方今之時勢ニ相成候付而者差寄四境之御固急應之御備無之而之難相濟格別ニ郷兵御倡立之處追々ニ兵卒茂出來合候ニ付隊長指揮役等夫々之役々被 仰付答ニ候然處物場ニ臨右兵卒指揮いたし候儀之強手炮術鍛練迄ニ無之可成其人を被

得度精々咽合兼而文武之藝術相嗜人望有之人躰を撰名前可被相達候事

右書付表則より御審頭に相渡候事

九月廿一日薩藩大山格之助其主島津久光の書を齎して太宰府に到る尋て三條實美等を洛外迄送致すべきの議あり

〔機密間日記〕

早打飛脚を以得御意申候昨廿一日薩州大山格之助着幸いたし候由ニ而下拙共旅宿に罷越去ル十五日浪承表隅州公御氣仕出ニ而醫摩手を遣候得一同發艦いたし只今着いたし候付不取敢相尋吳候趣ニ而演述いたし候ニ之五卿方御運ヒも段々共次第ニ差重願下之由

一 同發艦いたし候付不取敢相尋吳候趣ニ而演述いたし候ニ之五卿方御運ヒも段々

一 遅延ニおよび候得共其詮無之當時京師之動靜二條殿下尹宮新將軍等御三四方ニ而萬機御決定逆茂今一層寛有之 御沙

一 汰聊見留無之時運之令然處致方無之右ニ付隅州公發艦ニ差臨薩州一藩之存慮ニ寄無果御預茂各藩重疊御迷惑ニ付當春

一 御差圖通洛外迄御運ニ相成度其上ニ而好機會茂可有之先五卿方向背相伺且其次第五藩に茂談判いたし候様被命候由尤

一 五卿方に之隅州公より之御直書持參委由申達御返答之儀之五藩に被仰聞候様申述置候段爲知申候事

一 當春五藩に五卿方謹慎ニ付御歸洛歎願之末洛外迄之御運御差圖之處猶又先般長防御處置濟之上ふらてハ五卿方之御運

一 順序を不得趣被仰立其末無開長防御品茂不出内此節之次第活物之事時々變轉茂時宜ニ可應候得共右之情實 朝暮に御

一 届茂御座候哉格之助に相尋候處右之前文之通隅州公浪華御發艦ニ差臨候而之御評決ニ付其等之事ニ不及決而 朝暮に御

一 異論之有之間敷返答いたし候間實ニ意外之事ニ而不安心之稜有之候得共強而論談いたし風波を生候而も如何ニ付其儀

一 ニ聞置候事

一 同夕五卿方御招ニ付各藩罷出候處隨從米脫水柱溪雲齊土脫南大一郎三條公是迄御病氣引續薩藩御存慮にて御遅緩

一 ニ相成居候得共時運不至早晚迄茂各藩に御難題も御心痛有之今度隅州公御書簡も御座候間此上之御艦用意出來次第

洛外迄御引取ニ被決候付諸事御各藩に被成御依頼候段被仰聞候由演舌

但右之次第之急便を以御國々に申越候様可致旨及御答候事

一 此節之儀者薩州是迄之動靜にてハ半信半疑ニ御座候間諸事能治定之上今一左右御達可仕候ニ付前廣ニ護送之番士并助

局に夫々御手賦被成置度奉存候事

一 右格之助儀五卿方御意内并各藩存慮承知いたし今朝發程歸國左候而總都合等いたし來月五日比ニ猶出幸其上ニ而五卿

一 方御仕舞十五日程之日晷に相積候へハ來月廿日日出帆之見直ニ御座候由同人噂いたし候事

一 五卿方御論所延壽王院既ニ三ヶ年之住居大分荒廢ニおよび修繕等其期ニ臨異同茂可有之候得共豫一藩三百金程之御出

一 方ニ而可然も各藩略談合置候間其旨護送之勘局相合居候様被及御差圖度奉存候事(中略)

一 先達而被 仰越候 公邊御届振各藩に早速及談判候處筑前者至極御同意米藩者御不同意ト申ニ而者無之候得共今般隅

一 州公御存慮前後不對ニ付御同意難被致趣下僕等引合前京師へ申向ニ相成居候由併京師おゐて御四藩猶御打合有之

一 候様被中越置候間於彼地大概御同福ニ可相成由肥前ハ追々催促いたし候得共國元取替中ニ付今以返答無之夫故決議之

一 次第御左右仕候儀乍存及遲延候事右段々之次第ニ而兎角五卿方之儀 尹宮殿下當りにて差加へ薩邸之見込大ニ翻語い

一 たし今更些不面目之趣ニ相見申候且又昨冬以來諸事原市之進殿に御執成相頼居候處御同人横死ニ付而者萬事之都合如

一 何可有之哉甚以懸念之次第ニ御座候將又爰許治定出艦之期ニ相臨右御歸洛之儀前以京攝御届筑藩に頼託いたし候答ニ

一 御座候左候而洛外御住居向之儀東山永觀堂三條西殿御所縁も有之候由ニ付同所は五方共御同宿之御胸算ニ候由其他御

一 達仕候事件茂無御座猶追々可申達候以上

九月廿一日

古 閑 富 次
秋 吉 又 助

機密間

慶應三年

五三九

根取衆中

右に對する覺書

委細御紙表之趣致承知相達候處護送等之儀之夫々手配ニ相成可申尤治定之儀之猶急便を以御申越候様との事ニ候以上

九月廿五日

九月廿四日我藩豊後國預所郷村諸帳簿請取を了せる旨を幕府に申告す

〔江戸返達御用状扣〕

十月十一日 十一月十四日着

藤本より

豊後國之内御預所被 仰付候郷村諸書物御請取相濟候段九月廿四日御勝手懸松平周防守様に御留守居名元之御届書差

出候寫爲御心得差進申候右之何茂御預所局取扱ニ而御届濟之儀之此度之御便ニ政府に申向有之由御座候以上

此度御預所被 仰付窪田治部右衛門様御代官所之内豊後國高貳千九百八拾九石餘當分御預所之内同國高四千八百五石

餘松平主殿頭様御預所同國高壹萬四千五百八拾五石餘郷村諸書物請取候趣別紙仕譯書相添此段御届申上候以上

卯 細川越中守内

澤村脩藏

九月

仕譯書

期月五月

御預所 細川越中守

豊後國

高貳千九百八拾九石餘

窪田治部右衛門様御代官所之内より越中守御預所被仰付郷村ハ當卯四月十八日諸書物之同五月廿八日請取申候

但當卯御物成米銀御引渡無御座候

高四千八百五石餘

右御同人様當分御預所之内越中守御預所 仰被付郷村ハ當卯四月廿三日諸書物ハ同五月廿八日受取申候

但右同斷

高壹萬四千五百八拾五石餘

松平主殿頭様御預所より越中守御預所被 仰付郷村諸書物當卯五月廿七日受取申候

但右同斷

右者此度御預所被 仰付窪田治部右衛門御代官所當分御預所之内并松平主殿頭様御預所より請取候分書面之通御座候

以上

細川越中守

卯九月

澤村脩藏

九月廿五日本藩留學生井上多久馬毅熊本を發して横濱に赴く

〔慶應元年ヨリ 慶應三年迄 遊學一卷帳〕

覺

監物家來

井上多久馬

右者武州横濱に遊學被 仰付去ル廿日出立仕候筈之處不快ニ而差延候段御達仕置候通御座候然處漸快氣仕申候尤最前之長崎表に罷越彼地方渡海仕度段御内意仕置候得共其議者見合明後廿五上下貳人爰許出立仕三宅藤右衛門殿出京明後日出立之由ニ付一同豊後路罷越御同人京着之上相州東海道通行仕度段達出申候依之最寄御役筋に之御添狀等被渡下候様此段可然様被成御達可被下候以上

慶應三年

五四一

九月廿三日

長岡監物内

松岡四郎兵衛

列四人

九月廿七日日本藩益田勇長州處分に關し備前藩日置帶刀と新選組頭近藤勇と談判の事及び長崎に於ける英人殺害者は土佐人にあらざる事を報告す

〔時體探索書〕

卯九月廿七日

備前日置帶刀新選組頭近藤勇と應接始末左之通

帶刀問長防御所置之儀ニ付而ハ幕府御失體段々相重り候末ニ付官位復舊ニ茂相成不申而之順ニ御受ケいたし候義無覺東依而天朝之御伸入を以テ方相引ニ相成候様御取扱御座候ハ、無事ニ落着可仕と見込候近藤答御所置振ニ相渡り候而之幕府之御失體も有之候得共國主たる者家臣 禁固ニ暴渡いたし候を制止出來兼候義經千歳候而も其罪難逃於幕府ハ一々 勅命御遵奉且上下之分も有之候事ニ付双方相引と申義ハ一圓得其意不申尤國事御多端之折柄彼方恭順を盡し謝罪いたし候ハ、一層御寛典之御運ニ相成候而も可然趣申聞候處帶刀暫時思案いたし然ハ彼方恭順を盡し候へ之官位復舊ニも至り候様周旋いたし候哉近藤答其持ニ至り候へ之一己之存念ハ飽迄其筋に建言可仕若事不成時ハ一身之覺悟仕候迄之事ニ候帶刀大ニ悟り候休ニ而此節之藝州世子御歸國ニ付便船ニ而早々歸國いたし得斗評議之上其種藝州にも及相談長州方恭順を盡し候様周旋可仕との趣ニ而直様下坂いたし候由尤帶刀會津諏訪常吉に論談之趣も近藤と應接之始末ニ少しも相違無之由然ル處聞老方へハ別紙建言迄ニ而帶刀下坂仕候間今一應上京仕候様被仰越候由之處帶刀澤井權十郎と申者を上京爲致他御用向ニ候ハ、帶刀早速上京可仕候得共建言ニ付而之御用向ニとも御座候ハ、諏訪常吉杯に

内談仕置候趣も有之一刻も歸國仕方都合宜敷との趣を以御猶豫相願候間強而御召も無之帶刀之早々歸國いたし候由

一於長崎表英人殺害之一件英方七州に懸合之末愈以七州人ニ而之無之方ニ落着仕候由併日本人ニハ相違無之候間積ル幕府方價金ニ而も出て可申哉之見込之由

九月廿七日

益田勇

九月廿七日幕吏小林甚六郎兩肥兩筑四藩の京都留守居に對し三條實美等の歸洛の解決を促す

〔尊攘錄五卿一件帳〕

丁卯九月廿八日

御日付小林甚六郎殿より昨廿七日二條 御城中ノ口に罷出候様兩筑肥前類役連名廻狀到來ニ付爲代勤後藤彈助罷出候處甚六郎殿ニ之御用差合之由ニ而御徒日付大原道藏高橋平之允を以御申聞候ニ之太宰府へ在留五卿方歸京之儀ニ付而之當春被仰出置候付既ニ護送ニ相成筈之處薩藩故障ニよつて其儀被行兼御國々々被及通議候段之最前御届被置候通ニ候處日敷を経候付過日及御問合候處いまた何方も御模様相分不申山然ニ其後茂凡三十日發端より之を六十月近ク相成海陸相隔往反之有之候得とも右様際取候儀何程之ものニ有之候哉且最前薩より申出之趣四藩御不同意ニ候ハ、薩之説を折キ急ニ歸京之とこひニ至候様取計候歟又薩之申分實ニ御信用候ハ、其所を以長防御處置之品相分候上歸京可然ニ歟寬急とちらよそ片付不申候而之右一件ニ付甚六郎と素り自分共儀茂態々江戸表方被差登手を措相待居茂不本意次第ニ付若寬ふる方ニ候ハ、一ト先歸府可致右邊之儀爰許に御重役方茂御詰ニ相成居可申候間御決斷有之急ニ御返答承度との事ニ付成程重役共登京いたし居候得共一旦各國へ通儀ニおよび置候末之儀ニ候得之假令詰込之重役共存寄有之候共今更此許限り取切りと申譯ニ參り兼候段一同及返答候處左候ハ、前件御話合申候次第を以如何様とそ急持いたし候様別段飛脚差立猶御國々々に及御催促候様申聞候間委細致承知様子相分次第及御返答可申段申述置候事

右之通ニ付此段相違置申候以上

九月廿八日

京都御留守居中

十月二日土佐藩寺村左膳後藤象次郎福岡藤治神山左多衛其主山内容堂の名を以て政權返上の建議を幕府に提出す

〔時體探索書、王政復古帳〕

山田五次郎内藤泰吉内藤貞八より差出候書付寫

御當地之景况見聞次書付を以言上仕候様御内意ニ付稜々相認差出申候然處最早天下ニ流布仕候儀も多く御座候處別ニ樹公御内情之件々越邸方相傳候於御趣意之樹公之大機密ニ而越邸方も深く他言ヲ戒られ年來之入魂故不圖傳聞仕候儀ニ付乍憚其段ハ重疊御含被置被下度奉希候

一土州後藤象二郎ハ八月下旬出京後献白書を認懸り外客を謝し寓居を四五日置ニ移し同藩之監察外ハ其居を知る者ふし入魂之朋友たり共面會不致機事之難メ漏泄セ 献白ヲ認懸り同僚之諸士ニ見セ申候處同僚之説ニ之今幕府之景况ニテハ假令差出候而も無用ニ屬し暫く見合すへしと云後藤答而曰決て左様ニ而無之候方今天下之公伯梁スルに樹公程之英主ハ無之且外國之事情等ニ至而ハ樹公程明ふるふし必ス採用ニ可相成何卒此節之儀之諸士之異見も可有之候得共拙子存念ニ任セ一日度急キ差出候方ニいたし度とて薩藝へも牒し合セ十月二日献白書ヲ持板倉閣老ニ指出不日ニ御答を奉待と申述同六日之朝催促ニ罷出候處來客中ニ而翌日を期して七日ニ來り折簡出動ニ差臨猶明日罷出候様との事ニ而八日ニ猴又罷出候（以下は十月十三日の條にあり）

〔一新録自筆狀〕

丁卯九月土州建白

誠惶誠恐謹言仕候天下憂世之士口ヲ嚙ジテ敢テ言サルニ到候ハ誠ニ可懼ノ時ニ候 朝廷幕府公卿諸侯旨趣相違ノノ狀アルニ似タリ誠ニ可懼之事ニ候此二懼ハ我ノ大患ニシテ彼大幸ナリ彼策於是乎成矣ト可謂候如此事態ニ陥り候ハ其責至竟誰ニ歸スヘキヤ併シ既往ノ是非曲直ヲ喋々辨難ストモ何ノ益カアラン唯願クハ大活眼大英斷ヲ以テ天下萬民ト共ニ一心協力公明正大之道理ニ歸シ萬世ニ亘テ不恥萬國ニ臨テ不愧ノ大根柢ヲ建テサルヘカラス此旨趣前月上京之砌ニモ追々建言仕候心得ニ御座候得共何分阻當之筋ノミ有之其内不圖モ舊疾再發仕不得止歸國仕候以來起居動作ト雖不隨意之事ニ成至り再上之儀暫時相調不申候ハ誠殘念之次第ニテ只管此事ノミ日夜焦心苦思仕罷在候因テ愚存之趣一々家來共ヲ以テ言上仕候唯幾重ニモ公明正大之道理ニ歸シ天下萬民ト共ニ 皇國數百年之國體ヲ一變シ至誠ヲ以テ萬國ニ接シ 王政復古之業ヲ建テサル可カラサルノ大機會ト奉存候猶又別紙得度御細覽被仰付度懇々ノ至情難默止泣血流涕ノ至ニ不堪候

慶應三丁卯九月

松平容堂

字内ノ形勢古今ノ得失ヲ鑑ミ 誠恐誠惶積首再拜伏惟 皇國興復之基業ヲ建ント欲セハ 王政復古萬國萬世ニ亘テ不恥者ヲ以テ本旨トスヘシ奸ヲ除キ良ヲ舉ケ寬恕ノ政ヲ施行シ 朝暮諸侯齊ク此大基本ニ注意スルヲ以テ方今急務ト奉存候前月四藩上京仕一々献言之次第モ有之容堂儀ハ病症ニ因テ歸國仕候以來猶又篤ト熱慮仕候ニ實ニ不容易時態ニテ安危之決今日ニ有之哉ニ愚慮仕候因テ早速再上仕右之次第一々乍不及建言仕候志願ニ御座候處今ニ到テ病症難減仕不得止微賤之私共ヲ以テ愚存之趣乍恐言上爲仕候

一天下ノ大政ヲ議定スル全權ハ 朝廷ニ在り乃我 皇國之制度法則一切萬機必京師之議政所ヨリ出ツヘシ

慶應三年

五四五